

明治三十四年四月三日發行

(非賣品)

北辰會雜誌

第貳拾九號

第四高等學校北辰會

北辰會雜誌第二十九號目次

論 說

ビシヨツバルクレー(承前)	茨木清次郎
詩聖ラルヅラルスにつきて	森 卷 吉
理想論	高見之通
老子管窺(承前)	月 聲
所感を陳べて文科諸賢に教を乞ふ	B C 生
書生を論ト併て校風振起策に及ぶ	近藤 達 兒
年 始	浦井 恒 堂
元の木阿彌考	紫 影
カントの倫理學主義	K N 生
瑣 談	武藤 元 信
木石子の觀たる戀愛	木 石 子

文 苑

冬の夜がたり	久摩志呂古字
空や水の記	山 咲
白雲微吟(新休詩)	悠 々 舍
玉 霞(同上)	月 仙
和 歌	
俳 句	
答某生論讀書	村上 函峰
紀翁婆事	伊 佐 壽

報

迎新年賀新世紀、送武笠先生、新任式と送別式、
迎新任教官、昨秋の運動會、佛語講習會、送戸
田先生、法政會の誕生、寒稽古、弓術大會、北
辰會記事、通信

附 録

明治卅三年中本部増加書目

北辰會雜誌第二十九號

論 說

ビシヨツプ バルクレー

(承前)

茨木清次郎

蓋し此説をして正當なりとし物質を以て萬象の本源とあり之を除ては吾人の外界に知覺すべき物有らずと云はゞ其結果として宗教的信仰及道德的觀念は二者は如何なるべきかは智者を俟たずして直ちに推測し得ざるべき難点ありと雖英佛二國の人民は學者を始め久しくこの説を墨守して論據の無妄を知らず又研究の不完にして感情と情緒とに屬すべき人生の一半を無視するを覺らず萬物は物質と之に固有なる勢力とに依て説明すべしとあり未だ會て之に對して何等の疑念を挾むを好まず又固より他に何等の眞理有るを曉らざりき於是乎即ち曰く物質とは何ぞや物質に就て吾人何を知らざるは遂に問はざるを得ざりしなり

凡吾人の外界は事物を觀るに當りては感官によりて其擴張、色、體積を識ると雖聊り此處に考察を施す時は此等の形質は決して獨立に存立する事能はず必ず或は一物に附纏せる性質たゞざるへかからず然らば此形質を具有すべき物は如何なる者ぞと尋ぬる時は論者は即ち答へん吾人は其物の何たるは決して知る能はず之れ吾人の知能以外に存すればなり然れども唯知る此等形質の具有せらるべき者有り之を名付て物質と稱すと然れば論者一派の物質の存在を斷定するの理由は實に

形質を綜合するに於て其必要を感せしに出たるものあり馬氏は即ち此綜合を以て吾人の心的作用に屬する所となし物質の存在を認むるの愚と説き吾人の認識すべきものは獨り觀念有るに止まり從て我が心裡に生ずる變化の外智識とあるべきもの有らず總て思想感情或は想像より來る觀念は心を離れて存すると能くざるは明白なる事實にして加ふるに五官に映する諸種の感覺も亦之を知覺する心裡に存せざるを得ざるあり一言以て之を掩へは事物の本質^{essence}は即ち知覺せられし所 *per se* なり萬物は之を知覺する心無くしては決して存在せずとは實に彼が唯心論の魂精にて即ち事物と觀念とを同著し現象は獨り心的作用に歸して實在し得る所となし唯物論の所謂物質を撲滅したり且つ夫れ唯物論は之を極論せば自ら倒るゝの弱点ありとは彼が大學に遊びし時夙に洞察せる所にして即ち斯論は教るに五官は立證に憑るべきを以てすと雖感官の信すべからざるは世既に説わる事久しロツク先づ之を疑ひ馬氏次て其虛妄を論し五官の感する所として眞を傳ふるに足らずとせりロツクは即ち説て曰く火は明且暑ありと云ひ雪は白且冷ありと云ふ是れ火雪が人心に於て喚生する觀念にして吾人は常に之を以て火雪本体の性質とみす事恰も明鏡に映ずるれ影を其實物と同形ありとなすが如し誰敢て然らずと云はん然れども距てゝは快感あるの火も之に接すれば忽ち痛感たるを知る者は曩きの快感を以て火の本來具有の性質とは決して論し難く感覺の信すべからざる事夫れ斯の如しと以て五官を通じて得たる感念は之を生せしむる所の本源とは恰んと何等の類同無きを明にす近代科學に於てハクスレーが吾人の感覺と其因て起る源体との間には類似無く亦有りと想像するだに難しと曰へるは實に其意を一にするに語なり然れどもロツ

クは茲に區別して二種の性質を分立し色、及び痛感等の如きは唯主觀的に存在すれども之に反して大さ形態及び運動等は全く客觀的實在とみし此等實在の性質を第一種となす前者を第二種とみす色、音聲、味、寒温等は凡て心を離れて存在せざると共に擴張固度運動靜止及び數の類は何れも心より獨立して存すと稱す之れ彼が漸く近世科學の半途に出でたる所にして又以て馬氏に一步を譲らざるを得ざる所以あり氏は即ち此等第一位の性質と雖心を措て存すべきにあらずとみ換言せば之を考察する心存せざれば此等も亦悉く存在する能はざるにあり固より吾人が最終の實在に付ては全く之を知る能はずと云ふは實在は存在せずと云ふと霄壤の差ありて馬氏は即ち心を離れては何物も存在せずと斷ずるは此れかのスペンサーの語に物質は存在するも只現象としてのみ吾人に知覺せざるゝが故に吾人は現象を以て直ちに實在とするを得ず畢竟五官を以て實在を知るは難しと云へると其趣を異にするものありと雖感覺を排するの義に於ては大に氏の論を強ふするに足るもれあるべし

バルクレールは始めて此見界を表はせると即ち視覺論に於て吾人の外界に存すと思考するものは唯心中に於て之を觀るに過ぎざるを説き次て人智原理を著して他の四官も亦信憑するに足らざるを論じ最後に *Hylas* と *Philonous* との對話を出せり是れ氏が絶世の作にして心の外界には實在なきを公言し吾人が日常眞に見るとなすものは唯之れ腦中の作用に歸するのみにて心を除ては何等實在の例證を有せず且つ吾人が人宇宙と稱するものも是と同しく唯上帝は心に存在し人智の得る所は僅のに其勢力の吾人に及べる影響なるが如しと斷ぜり馬氏はビショップたり故に其論ずる所

更らに進んで究むるを許さず而して此語は既に宗教家として過ぎたるもの有り何となれば之れ即ち萬有神教に到達すべきの緒あればなり然るに氏は此言の實に自説を破るの利器たりしを知りて彼と論するの輩も亦未だ之を知りざりし也彼尙唯物論者を駁して爾ち物質と運動とを除ては天下亦存するもの無しと云然れども爾何を以て物質となし又何を以て運動となすかを熟慮せば其存在の理由を興ふる事能はざるべしと云へるが如し於是乎論者にして彼の智力に拮抗するれ士有りてせば必ずや曰はん然れども若し其言の如く宇宙の萬物皆只神の心中に存すとせば吾人々類も亦等しく之れ天心中れ一影れみ亦何等の實在にはあらざるべしと氏猶能く辭ありしや否や又彼靈魂の存在を説きて其不滅を稱し既に信仰に入りて哲理にあらず彼か他に表示するの見界に對して撞着たるを免れざるも當代の士一人れ其際に乗すべきを知らざりしは幸とや云はん不幸とや云はん其短亦遂に蔽ふべからずと雖小瑾未だ大功を没せずとせば彼か究理の大半は決して之が爲めに破られざるものなり

若し夫れ唯心論の眞否如何に關しては世別に學あるべしと雖彼ら哲理は他一半を追補し以て完璧の組織たらしめんと欲せば遠く東天に溯て之を印度に求めざるべしと佛子の馬氏に先だつこと三千年にして既に唯心れ偉想を抱き造詣更らに深し馬氏は精神の問題に至て止みぬ彼は物質の存在を非として萬象の夢あるを説けり然れども奈ぞ知らん之と夢るの心は夫れ亦夢からんとはハクスレー曰く佛者の近世最大唯心論者より更らに深きを見たるは奇ありと最大唯心論者とは即ち馬氏の謂也蓋し二哲の美は一に馬氏の受けたる宗教的教育に因る所にして氏の學の佛に及ばざりし

は即ち外界の情態の然らしめたるかり若し今假りに二人逢ふて道を語りば佛は必ず曰はん爾云ふ所眞に當れり然れども一を知て未だ二を知らざるの言也是れ無上の明知を得ざるに由れり物質固より存在せず而して爾の所謂心も亦實在にあらざるなり心は唯之れ感覺意志觀念の合塊にして消ゆる事朝露の如し心既に朽つべし智識亦觸れて生ずるのみ觸るゝもの豈恒ちふんや其れ凡て斯の如し然りと雖茲に唯一の實在あり何ぞや之を知らんと欲せば先づ心の有らざるを悟れ予爾に教んと而して科學はまた智識の觸れて生ずるを證するものにして耳目舌腦は悉く皮膚より生し感覺的的智能機關は即ち何れも觸覺より發達せるものなるを知る而るに馬氏は觸覺を以て亦一の幻想とせずを見れば唯益々東洋思想の優るを覺ゆ二者の差異斯の如し然れとも一点に於て其規を一にする所あり曰く宇宙には唯一の實在あり人智に超絶して香も無く味も無く聴くと能はず又見るべからず眞實無妄にして浩然天下に塞がる人生の行動之に由て進み永遠無窮始なく又終を知らざるものなり二哲の系統共に之を以て起り共に之を以て立つ其所説の區別に至ては唯未葉のみ深淵の奇想は兩者合一せざるを得ざるなり

馬氏幼にして既に學界の木鐸となり而かも科學の進歩尙遲々たりし時に當て此等の見界を開きし者は實に世人の彼を以て歐洲學者の一位に承認するを憚らざる所以あり而して其學者は後世の更らに大なる思想の針路を開きぬ之れ例ふれば希にソクラテスあつてプラトン出て又アリストテレスありロツクはソクラテスの如くバルクレーはプラトンに似たりアリストテレスは即ちヒロムにして馬氏を續て更らに大成せる所あり尙氏れ學は延て進化派となり又近世の大科學とかり何

れも先人の功業を承けて光を後代に赫耀たらしむ氏又獨り功を學術に専らにせるにあらず實踐倫理の方面に於ても亦與て力あると多し即ち唯物論一派の陋見を一掃し物質界を離れて更に大道の存在を明にし遂には唯物論の名をして正教に反するの意を帯ぶるの文字たらしめぬ嗚呼ハルクレ一實に絶世の才を奮ふて力を學海に致し又社會を救ふ其功や偉かり其業や大かりバイロン曾て彼を評して

“When Bishop Berkeley said there was no matter,

It was no matter what he said.”

と吾人は唯詩人の妄評を笑はんのみ

詩聖ナルヅナルスにつきて

森 卷 吉

こゝに説くところは渠が思想と精神にして、それが外即生涯の事實にはあらず、我は唯見へざるナルヅナルスカ傳ふれば足れるにて

渠は時勢の産兒あり

自由民政の聲、猛然として一たび佛蘭西に揚りしより、此思想一轉して日耳曼に入り、哲學的自由思想とありてシルレルゴエテの心胸を熱し、更に再轉して英海峽を越え、英の積極的精神と融化し、以てナルヅナルス、バイロン、セレーの胸奥に宿りぬ、吾人はナルヅナルスの詩を誦する毎に、非常なる積極的精神と偉大なる自由思想とが一團とありて、渠の筆端を指導せしを視ざるは

あらず、詩海に於ける英雄ある渠も、實に亦時勢の産兒なりしなり、

渠の特 性

紀元千七百七十年の陽春花笑ふけ時、カンバーランドに生れたる渠は、性來才能よりも思想に富み、亶に哀情の人なりき、あべて衷情の人は、沈鬱陰氣にして、常に眼を心内に向け、複雑なる社會を去て、書齋に退隱靜思するが一般あるに、渠は讀みもし、散策もし、夢想もしたる、寧ろ幸福ある一處士かりしなり、而して渠は幾分の財産ある家に生育ち、衆庶に尊崇せられ、故障なく愉快に結婚し、遠く模糊の際に雲山を望み、近く水清らうなる湖水を下瞰する、最も嫺雅ある家に波靜うある生涯を送りぬ、

斯く内外共に平和ありし詩人、には、森羅萬象一として歌となさざるはなかりき、而して渠は自ら、「さしやうある草花も、かは袖ぬらす奥妙ある思想を與ふ」といひしが如く、其眼は微細沈靜なるものを視る最も巧緻にして、却てりの浮華虚飾を以て充滿せる所謂劇場的快樂を厭忌せり、故に渠はすいやかなる黎明の如き詩人とも謂ふべきなり

渠の 主義

渠が終世の主義又目的とする處は、即ち普通人間として立ち、以て道德的生涯を送ることにてありき、渠が詩は明かに之を示す、試みに其平生の自信を陳べたる「義務主に御話し」を見よ、

虚しき恐怖の嚇やうす時

勝利にて又正道なるあれは

益なき誘惑より人を救ひ
弱き人情の倦める争と鎮めのし

Thou, who art victory and law

When empty terrors overawe,

From vain temptations dost set free,

And against the weary strife of frail humanity!

と説き、人は世にある間、あらゆる煩惱の魔道に陥らず、正義公道を踐まんとせば、決して「義務」てふ觀念より瞬時も離るべからずとせり、而して血氣少壯れ青年も、愉安樂域の幸福兒も、冥々の間「義務」の支配を受くべく、若し蹉跌して一たび人生を疑ひ、遂に其解釋に苦しむあふば、須く「義務」てふ大錠鑰によつて、以て晏如たる境界に入るべしとし、「義務」に叫んで

人若しかのゝき迷ふことあらば、たしうかれよと教へりし

But thou, if they should totter, teach them to stand fast!

と叫び、更に一步を進めて、眞に樂天郷れ人は、常に「義務」の支持に安んじ、以て公平ある愛を冕とし、喜樂の路を歩むものに過ぎずとせり、加之渠は、「義務」をして世人の信ずる如き峻酷あるものとあさず、寧ろ無上に親むべきものとし、花の笑ふも星は光るも、天の永々不變の鮮色を呈するも、必竟皆「義務」の連關によるとし、遂に「我は汝れ隸屬たらん」とまで絶叫せり、斯の如く渠は、世に不平均より起る不平もあく、萬事萬業凡て「造化神に對する義務」なりとし、以

て播根錯節の憂世に處し、斷乎として道德的生涯を送りぬ、實に渠が悟道は鑰は、「義務」てふ觀念に外あふざりき。

華節を忌みし渠は、又平民の友なりき、貴族的生涯を避けて平民の友たらんと欲したる渠は、遂に又普通人間として其生涯を完ふしたるを知るべし、彼の北英國民の爲に作せる詩「ミカエル」は、即ち賤民生涯の縮寫あり、其賤民を觀るに非常の同情を以てし、之を現はすに最も高潔なる精神と、深き慈愛心とを以てしたる跡、歴然として全篇に見はる、かくして渠は北英國民にそが摸範的生涯を教へたり、英國詩海ありてより、ミルトンは一層血烈に英國の精神を寫しぬ、去れどとは、單に學者貴族の精神に止まり未だアルツヨルスの如く、牧羊者、田夫、鄙娘等凡て平和の民に宿れる精靈畫を畫かざりき、平民の友ある渠の詩は、假令榮華に飽ける高官貴族の頌讚を得ざりしも、隠れたるもれに光となり、濁したるものに水とあり、實に最大多數の慰藉者ありき、

渠の哲學的思想

非凡なる回想力と、鋭利なる内觀力とを有せし渠は、己が生れしよりの記憶より、哲學的教訓を演繹したり、「我が心波立つ」の短詩は、もとより論理的に解釋するは困難なる業なれど、免に角左の二條項に剖つを得ん、

第一、新しく出現せんとするものが、實存物たるの妙機を顯明し、又人の精神に最初の性癖を與へ、思想の永續的傾向を定めしむる所以を明示す

第二、幼年時代に有する純粹無垢なる感情の働、及其感情と外界にある萬象との密接なる

關係を説き、以て人間の靈神は元來出世間超絶的實在者と或方法によつて交接するものなるを示す、而して外界の萬象は屢二者の間を隔離せしむるを推論す、

即ち稚兒の靈魂は、其肉体に入る以前は超絶的世界に存在し、之が肉体に内住するや殺那、物質界は眼前に表現し來るものとせり、故に此物質界は始め稚兒に奇異の感情を興ふべし、

我がこの胸は ゆるぎたつ

空なる虹を 見るときに

生れし時も ありありさ いかゞ

My heart leaps up when I behold

A rainbow in the sky.

So was it when my life began;—

雖然、其眼に映下る現象は、凡て彼が先きに靈界にありし時、見慣れたるものなれば、彼は朦朧として現世が、記憶に存する靈界と、親族的關係あるものと思惟す、然るに稚兒が地上の風土に慣るゝに従ひ、局面一變、茲に鮮明なる洞察力は、暗遷黙移の間煙滅せらるゝに至り、遂に虹の如き非常に美なる現象、或は郭公の如き、深玄なる聯想を惹起する聲に醒まされて、觀念は再び靈界に近く立戻ることを證せり、是れ蓋し奧妙ある渠が哲學的思想より胚胎せるものにあらずして何ぞや

宗教に於ける渠が功蹟

今や吾人は、渠が哲學思想の幾分を窺ふを得たるが故に、更に渠の宗教に對する觀念と事業を驗せんと欲す、是れ予輩が渠を論ずるの最要主眼なり、渠が詩人として、世人に間に其名噴々たるものは、全く自然を記述する事の最も巧妙なりしによる、然りと雖吾人が渠を尊崇する所以のもの、單に自然に記述に對してにあらず、寧ろ渠が宗教に於ける功蹟の偉大なりしによる、デクインシー曰く「吾れ若し玲瓏の眼を以て己が心裡に畫かれたるラルヅラルスの像に向はば、恰もエリヤや聖ポロの前にあるが如く我が能力は壓潰さるゝと、僅く六錢を以て出版者に購はれたる詩が、そも何り故にのりく勢力を有するや、是最も怪むべきの点而もまた吾人が論せんと欲する要点あり、

渠に此奇怪なる威勢を存したりし所以は、思ふに渠が自然に對する一種新警獨得なるものあればなり、如何なる渠は斷篇小詩も、餘他の人ももれせる詩と比して、一種辨別すべき奇怪なるを光備ふればなり、この奇怪なる光あるかデクインシーの能力を壓潰したるものなれ、吾人もこの光の何たるかを究知して、これを詳細に確説せんは、もとより易々の業にはあらど、さはれ、彼の羅馬の詩人として有名なるヴァージルの言「自然に對するに科學的智識を以てするは、是れ其眞理と發見するに最一の法にあらずして、寧ろ自然より受くる默示ムスレインシオンによる、且其自然に存する靈は平和なる精神によつて認知せらるるが、吾人はその大に至言あるを知ると共に、この「誰か己か母の墓おぼくまの邊に、植物を採集するを欲せんや」と罵倒したるラルヅラルスが其詩「詩人の碑」に於て同義意味事を陳べたるを見るに當て、吾人は、渠が自然の靈と融化し、以て盡きざる默示を

常に受けたりといふを憚らざるなり、
宗教と文學とが最密接なる關係を有するは大なる事實あり、英國に於ては中古時代基督教は外界に物象より全然隔離してありき、然るに近世精神の漸く輝き初むるに及んで再び外界の物象に接近し來りぬ、故にかのチョーサーより以來英國詩人の間には、凡て見ふる物体より見へざる直覺力を得んとする現象あり、例せば彼のウイザーの秀逸なる詩句の中に「彼女(詩神)は全き自然の美が、多くの智者に授くるより、小なる自然をもて優るめ、ぐみを我にそ、ぐ」と云へるが如く、
ラルヅワルスが好んでウイザーの詩を引用せるも亦此故なふん、吾人はラ氏の詩によりて渠が、自然は唯に實象の集合体のみならず又一種表記すへかざる神秘的情感を注入するものたるを確信し、且是を實驗せしを疑はざるあり、彼の唯心論者の立法宗あるプラトーン曰く「哲學者の種々此抽象的眞理を參禪靜思して而して始めて理會する吾人の周邊にある測識すへうらざる實象は、吾人か純清なる狂熱を以てそれば直覺的にれざるげかれを認むることを得」と、而してプラトーンは更に此純清なる狂熱の場合を四となせり、曰く預言者が點示を受くる時の狂熱、曰く天の怒を避けんとて専心以て哀願祈禱を捧ぐる時の狂熱、曰く詩人の考察によりて遇然明識の其胸中に起る時、曰く己の鬱勃たる愛情う起因とありて不言不語の際だ情人の心裡に一種の明識か起る時之ありと、實に右の場合に於ける狂熱、遂に人をして複雑なる理性より解脱して全然神性に充たしめ、以前の己より踰れたる高尚なる別人とならしむる程に、心内の能力を高揚發揮せしむるは疑ふべからざるの事實あり、ラルヅワルスは右の四場合に加ふるに最も必須なる一事を以てしたりき。

渠は云へり、自然に對する靜思も亦人をして靈境に導くの一の場合にして、即ち人をして萬物の神髓を窺はしめ、遂に恍惚の中天上の妙境に達し以て彼の預言者が默示を悟りて得たる同じき驚喜を味ふことを得と、凡そ此の如き奇微玄妙なる説を確めんには、先づ其主因的證據を辨知せざんばならず、彼の神託を公言する預言者の如きは彼が之を受けたることを明證すべし、若しまた言語に於て表はさるるか彼は少くもヒントにより、そぶりによりて吾人に其證據を與ふべし、又勢力ある祈禱は靈界を吾人に接近せしむるを得、されど其行爲によきて眞に靈感を受けたる新人物たるを證せざんばならず、考察(詩人の)技術も靈感を受けん、されど考察者技藝者——如何なる術を執るものも——は其思想に畫ける構造物を吾人の目前に表出し得る程に自然的能力を有せざんばならず、戀愛も天を啓き得ん、然れども情人が吾人を索ひて *Positives* の面前に至らば、彼は彼れ個人的情熱う眞宇宙六合を動かすに足る愛の一片なるふとを感觸せしめざんばあふざるなり、ラルヅワルスに於ても尚ほ然り、渠にして若し『海にも陸にもなき一種高妙の光』『思想を歡喜の絶頂に高揚せしむる其實在者』の實體を吾人に表示或は認識せしむるなくんば、如何に渠か人類に新らしき智識を齎したりと云ふも到底實證なきの空論たらんのみ、雖然渠の宣告するものは單に一個人の空想よりも數層超越したるものありて存ず、渠の宣言は人間以外の威力を有つ恰も神の聲が渠を潜りて吾人の耳朶に達するもの、如し、是れ全く彼の非凡なる觀察力と人間通有の資格(吾人の本性は元來神秘的眞理の門戸に達するの資格を備ふ)とより生じたる結果たる

に過ぎず、即ち換言すれば渠は自然に達する靜思によりて、何人も靈界に遊び天上の妙境を味ふと得るよとを身躬ら率先して實驗表明せしなり、予輩は以上の如く、人間の本體をして遠く高絶の別界に遊ばしむる底の力あるものを宗教の力となす、ヲ氏は實に自然によりて此宗教的動力を發見したりしなり、故に吾人は渠を稱えて自然宗教の開祖と云ふ、請ふ暫く吾人をして自然宗教の開祖としての渠の功蹟に就て述ぶるところあらしめよ、

吾人は屢初代先祖の本能が變形して宗教的容觀を体するを視る、或点より觀察すれば默示は巫術の變形したるものと云ふを得べく、又食欲の愛情に、不思議を疑ふ本性か哲學に、畏避の本性の祈禱に、各變形したるものとも謂ふべし、ヲ氏の自然教も一般人間が有する本能の變形したる結果に外なざるあり、此点に於て渠の功蹟は尙ほ恰も釋迦孔子か、一種族の道德指南車として成切したるものと敢て異ならず、唯に異なざるのみならず渠は近世的頭腦には數層倍の勢力を有するなり、何と云へば渠は、直接人心に無効となり來れる基督教神學を生ける宗教に轉じ、且久しく世人に忘れ、自然の威力を鬼神の力に歸したる修の醇朴なる祖先の本能を改善して再び喚起したればなり、而して又自然は畢竟動植物を以て修飾せられたる洞窟たるべしと信じたる者をして、忽然心奥より湧出する不斷の賞讃と、深酷ある同情を以て自然に對せしめ、更に至誠より自然を崇拜するに至らしめしなり、

凡て時れ古今を問はず、人が始めて新しき宗教的眞理を自覺したるは何時なるかを明示せんば、實に至難の事なり、雖然吾人は、基督教徒か遵奉する訓誡か基督降世以前人心間に受けられしと

同感性を以て、ヲ氏以前已に業に、自然教に於ける所謂アルツアルスの格言か受用されありしと明言するを得ん、即ち『山上垂訓』の精髓(實際に認用されてありしと)が當時人類に甚だ斬新ありし如く、必づや渠が『チンダル院邊の詩』の精髓を實際に應用せしむるは最も新奇なりしからむ、新奇ありしといへども、もとよれ道德思想以外のものにあらざりて、却て不完全なる過去の道德思想の顯著なる此固有の特質(ヲ氏の特性)と融化し以て完全の域に至りしものたるや明かり、是れ自然の理のみ、こゝに渠は巧妙凱切ある情を以て、自然に對して靜思默考する時は、その愛情祈禱より由て以て得る如く、超絶したる別世界に門戸を開き、一種の默示を直接に受くることを表明せりしなり、於此ての渠の名聲一時に高く、苟も高潔を望んで道義を重するの士は、皆渴望隨喜以て渠に來らざるはあきに至りぬ、その哲學者として有名なるジョン、ステュアート、ミルの如きは其自傳に謂て曰く、『アルツアルスの詩は殆んど予の心狀に醫藥れ用をなせり、是れ全く梁の詩が單に外形の美を説くにあらずして、美に鼓舞せられて、感情に色どられたる思想の有様を畫くによる、實に渠の詩は予が感情の栽培者なり』と賞揚せり、それ如斯旭日東天に赫々たるが如く、渠が名聲は西歐の天地に響き渡りぬ、吾人が渠を傳ふる所以のもの、此点に於て蓋し負ふところ大なるものなればなり

吾人の靈性にのくばり偉大の勢力を有する彼は、緑り深きライダル山の礎、水清き湖水の傍ら、久しく靜なる晩年を送り、千八百五十年四月廿三日正午の時鐘と共に平和の眠りに就きぬ、肉はグラスミルれ土に葬られしも、靈や長へに故園の花に舞ひ、禽鳥と共に歌ふらむ、嗚呼此詩聖

も、亦た終に不死の魔力を有せざりしあり。

理想論

冰堂 高見 之 通

諸 言

理想論又之を罵倒鍛と云ふ、何となれば事々物々天下皆我が理想と異あるを以てあり、理想と異なるを以て憤懣の念と生じ、憤懣の念は一種の不平とあり、不平は駆て厭世觀に落ち入りしめ、厭世觀は遂に一旦破裂するや、大河を千仞の谿谷に決する如く、細大となく罵倒に罵倒して、よし人は耳を掩ふて奔るども、或ひは嘲けつて狂とするも、固より以て關する處ろにあらず、落花言はず流水悠々たり、而も情緒の纏綿あり、花は紅にして柳は綠なり、尙ほ眞言阿觀の道理を舍む、我が思ふ國家は天外億里の月世界にあり、我思ふ戀は萬里雲中の樓閣に梳る、獨り得々理想の世界に帝王の冠を戴き、理想の戀愛と紅閨に眠り、仰で星羅け紛々を厭ひ、伏して大塊の汚泥に悲む、元來我は哲學者にあらず、古今の所謂聖賢に識なく、東西の濟々たる知名を窺はず、井底の蛙獨り横臥して喃々乎蚯蚓に耳語するのみ

我が理想と世の所謂る道

天下載籍多し、誰れが萬年れ遺訓を爲ともものぞ、一篇の論策幸に死后百年に殘れば、學者徒々に之に註解を加へ、數重に意味を屈折し、以て後世の惑を至と、得々當代の學者と稱するもの、解題序文の講釋に歲月を費し、沈思熟慮を忘れて符會憶測を巧みにすること比々皆然り、而りれと

も之れ讀書の虫に過ぎざるのみ、見よ二千年前の希臘羅馬の盛時は歐人が理想する天下にして、三代の平和は支那人の夢みる處、高天原は日本人が來世の極樂にして、茫々たる宇宙の一世界なる此地球上の變遷も、只千有年の歴史を繰り返せしものことせば、寧ろ不可思議の靈智を具備する人間の奥も知れて、其の小なるに驚かざる可らず

試みに思へ、地球上十六億の人民生活し、父母は出來る宛け多くの子を生み、僧侶は一生懸命に墳墓の掃除をせし、所謂文明國に於て電線電話架設せられ、鐵道又縱横に布かれ、所在金色燦然たる社寺宮殿の建築成り、人間は山海の珍味に飽き、以て春夏秋冬を送り、愛らしき稚兒の美しき少年となり、勇壯なる軍人とあつて、義務を果し、一死以て國に殉る是等は即ち現今物質的精神的状态なるが、是れ果して十六億の人民を載る地球に對して、毅然として我は即ち人間なりと稱するの面目立ち得るや、よし寛大なる地球は之を以て満足するも、彼の幾億萬里の外に常に地上の萬物を養育し且つ保持する太陽に對して申譯け立ち得るや否や、太陽は亦寛裕以て吾人萬物を照らして敢て其の責を問はずとも、見よ、幾億の星は宇宙に散亂して太陽系の外無數の系統を作り我々を注視するにあらずや、之に對して萬物の靈長と自負する人間の申譯け立つる否や、最後に亦た此の星羅を適當に配置し、太陽系の存在を容る、地球の附屬を任す、人間萬物の生育を命ずる宇宙其れものに(或ひは宇宙の精靈)對して何を以てり得々として我を人は人間なりと云ふことを得べきや、而るも天下は皆瑣々たる小事に奔走して此の無限に大なる宇宙に感謝を拂ひしものなく亦不可思議なる大精靈をして善しと言はしめたる程の行爲あるな、見

よ、此を古今東西に求めて聖賢の論ぜる道あるものを研究せば只是れ春夏秋冬の理を經とし人事の動かす可ふざる因果の理を緯とし以て獨り天道を知るに得たるのみにして、亦偶々物理天文學者の如き宇宙の研究に時を費すものありしならんも、一人は此の宇宙の精靈と人間の關係及び責任を説破せしものなし、故に我は天下皆眼識小なりと笑ふなり乃ち我輩止むを得ず理想論を吐く可ふざるに至れるあり、

世の哲學者、哲學者らしき者、又哲學者らしきもの、弟子達、下つては此等弟子達の著述に隨喜の涙を流さるもの、所謂理想論あるものを見るに只理想、文字を或ひは心理上より或ひは哲學上より又時に倫理の点より觀察し、定議定理の議論に時日を送り、未だ以て大理想を腦中に描き長廣舌を振つて論出せるものなし、我が輩理想の定義を論ずるものにあらず、正さに我輩の腦中に描ける所見を吐露せんとす、我輩の所謂理想とは何ぞ、

人間精神培養の極所は宇宙のエネルギーと對等な点に迄登らしむることを得るものとするあり、他の所謂道ある者を見るに天地陰陽の氣之を受けて人間の精靈とあると即ち茫々無限ある天と人間生存の大根本要素たる地球の間に離る可らざる一種無形の關係あり、此の氣宿りて人間となること、然かれども、若し夫れ一夜瞑目して我が是の魂魄を彌々益々擴大ならしめ、水中石を投して波紋の進む如く益々擴大ならしめよ、憐々として被勞すれば亦更らに次の夜も之を試みよ、遂には魂魄は其の大無限に擴がりて、地球を包み、萬星を網羅して、不可思議底所に到らん、人間の精靈の受くる所、何ぞ區々地球の如き小あるものを以て根本要素とせん、正に是れ宇宙の

精氣の命ずる所即ち人間となつて顯はれ來れるなり、大なる哉人や、手を擧ぐれば幾千の星は或は金剛石の如く或は眞珠の如く、金色あり、銀色あり、燦然目も眩する計りにして、赫々たる太陽は爛々たる風を送りて我が胸を暖むるに足り、雲樹、嵐草、雷の鼓、耳を喜ばしめ目を樂しむへ、男神は我れに教を授け女神は我れに乳汁を與ふ、吐けは萬里の虹空に横はり、吸はば甘露億斛霞とあつて腹を充さん、此れ正に人の本性の發揮せるものにして、宇宙の大エネルギー人間に宿れる以上は研磨精鍊怠らされは遂には此れ大エネルギーを自由自在に支配して死す迄少しも倦まず勞せざるに至らん、

人間は活動する、時計の針の如く、只機關的にして、一の精靈の存するを認めざるの人に對しては勿論辨解の必要もなきが、苟くも精靈は存するを認むる以上には、何人か此の不思議なる靈魂の奈邊より來れるかと確むるを願はざるべき、是に付て宗教家の辨ずる所に於ても多くの説あり、世界を司る一の上帝ありて、精神は此上帝の賜はる所と云ふよりして、死生は上帝の意にありと云ふの論を起し、亦萬物に通つて一の眞理あり、禽獸虫魚に至る迄皆此の眞理によりて活動すると云ふ説よりして萬物の資格問題起り乃ち因果説を以て根據とするものあり、然れども要するに此等の説によつて自箇の本性を悟り、人間活動の原則を確定するは只自覺の程度の如何に外かざるのみ、人間の本性を以て狹隘なる道理によつて成るものとすも、科學より得たる一の原則に過ぎずとするも、進んでは上帝の賜とするも、又萬法に通する眞理とするも、獨り自覺にあるのみ、故に我輩の論ずる宇宙の大精靈を以て人間本性の由來と説くも皆自覺によつて初め

て其境に入るあり、

一の議論の確認は自覺に外からざれども抑も人間の思想の發達するは物質的進歩と精神的進歩の相互の提携によるなり、物質界と精神界の兩學說が一致して此の地球の一の遊星に過ぎざることを斷定せし迄は物質界の範圍甚だ狭まり従て哲學者が論ずる自然說の如き一種の空論視せられしが、物質界の進歩は顯著とちり新世界は發見、引力說の認定せらるゝに至るや、從來の狹隘なる空想哲學者は大々的に勃興して天地陰陽の說に感服せしもの亦地上萬物を通ずる因果說の如きは爰に一新生面を開らざる可らざるに於ても尙ほ保守頑固なる學者強て附會を巧みにし益社會の進歩と抵抗を敢てするに至れり、且今日迄著々勃興せし、しかく幾多の發明も、しかく幾多の物質的進歩も、尙此の地球を以て漠大なりと云ふ觀念が、彼の十六億人民の複雑なる社會的現象によつて一層眩惑の度を高め、不可測、無量、無邊と云ふ形容詞の地球に冠せらるゝ故に、從來隠れたる物質上の原則の漸々發見せらるゝを看過せず、而も超然として世の學者の糟粕を味はざるの士は當然宇宙の大精靈に着眼し來る固より疑を容れざるの理ありん

思ふに十九世紀の歴史は狹隘なる地方的關係に過ぎざりき、佛國革命後ちに於ける各國基礎の建立、實業の發達、交通運輸の進歩、幾多の發明の如き、皆自國は利益よりの創設にして何等全地球の爲めに一視同仁の点より本づける計畫あるものかし即ち地方的企業の少しく發達せしものに過ぎざるなり此等の歴史に隨喜の涙を流すの士にはとても我輩の宇宙論は容れられざらんも新二十世紀の今日彼の十七世紀の暗黒時代より今后三百年の將來に追想し來れば、世界の局面

目を追ふて縮少し天下は遂に地方的利益を基礎とせる企業を容るさず、計畫せらるべき凡ての者は全世界共有主義に出づべきことは凡ての學者の預言する所にして果して然らば箇人として地上に立つ權能は實に今日想像すべからざる程大なるものとなり、従て箇人の理想とする所は區々地方的のものとならず、本性を自覺するに於ても亦廣大なる宇宙の真理と同化せしめんとするは自然に趨勢たるべきあり、然れども翻て慎重なる世界人文の進歩は一躍是の境遇に入るを容るさず、少くも東西兩洋の大思想の衝突及び英人の夢想せる亞非利加の開拓、露人の念頭を去らざる北方亞細亞の大掃除、米國の怠らざる南洋の設備、及び南米勢力の確定、是等は少くも今后起るべき目覺しき問題にして、百年の后も是等の問題全く落着を告げ、人種異同の調和、あらゆる世界蒙昧の開拓効成りて初めて世界平和條件確立せられ以て人民は頭腦世界的となりて宇宙論も乃ち物質的の力を借らずして公々然と濶歩することを得るに至らん、吾人は敢て從來の理想は偏少を笑ふものにあらず、何となれば世は斯くは如くにして發達せざる可らざるの理を含めばかり、我輩の大聲之を天下に訴ふる所以は哀い哉未だ是に於て理想を定め是を以て預言を敢てするものあらざればあり、

我輩最後に説のざる可らざるものは空想と理想の區別なり、人苟くも一冊の哲學書を繙く、或ひは一回にても僧侶の説教を聞けば直ちに一種の空想胸中に湧出するを知る、即ち直ちに自分勝手の所謂想像を描きて以て我こそは大理想を有するものなれと揚々たるもの多し、然れども是れ理想にあらずして空想なり、理想にあらざる可らざるものは其の觀念に伴ふ確信と實功と

及び理想に依つて立つ安心あり、是我輩の少しく辨ぜんを欲するものあり、學者のプリンスブルを描出する或ひは歸納的なるものあり或ひは演繹的なるものあり、其の何れの道を取るも主義の文明に於ては關する所にあふざれとも、只我輩の言ふ所は是の主義の如何に健全に維持せざるゝ力にあり、十年研究功成りて燦然たる光明を天れ一方に認め、大理想の到着を感ずるも、何等の實功なく、強固なる維持の氣力なく、一篇の考として胸中に貯ふるのみとせば之れ空想に過ぎずして到底理想にあふざるなり、況んや道德論理の上に於て神聖なる理想を口にしつつ、行爲禽獸に及ぶに於てをや、今日の所謂、字引學者、腐儒と人に蔑視せらるゝもの實に是の点に着眼せざるを以てなり、見よ東都禁闕の下に堂々門戸を張るものにてし其言ふ所深遠なる哲理に出づるも、眼前の小利に兩眼を眩惑せられ、汲々榮華に醜靨して十年持論の維持に勤むるものなき、嘲笑の念に堪えざるが、要するに確信と安心の眞意を解せざるにあるのみ、然らば何によつて此の確信力を得るやと云ふに、是れ全く精神的修養にして、固より字義の辨じ得る所にあふざるなり、理想に關係ある確信力の修養に就て少しく所見を述べんに、精神的修養には種々の道あり古今の人物の行動言語を以て端を開くものあり英雄崇拜是れなり、先祖に遺訓を本にするものあり幕府徳川の武士の如きは是れあり、宗教を以て本とするあり佛徒耶徒の如きは是れなり、即ち是等の徒は務めて其の格言教義に背のざる様にし造次頓沛一舉手一投足も之に鑑みて苟くもせざるあり、而して此等教義の眞意を解するには誰れも人間は煩惱止む時を知らざるもの故務めて雜念を散下洋更草木の眠るとき靜かに室の一隅に危坐し炳たる刀劍倒まに喉下に逼り以て怠慢を防ぎ后方三

尺燈火微かに燃え刻一刻精神の波瀾靜まりて殆ど腦中一物を殘さざるるとき着々先哲の遺訓を解拆して人世現時の有様に對比し以て自個の立脚地を確定する者あり時に若し夫れ雲間杜鵑血を吐て過ぐれば亦以て偉大の一物腹中に宿るを覺へん或ひは山間幽邃の所に身を置きて溪聲松風に耳を洗ひ、所謂自然の美音に接して横はる人生の大問題を決せんとするものあり、兎も角修養鍛錬とは克己を本として苦心經營の結果大自在を得るの道を云ふものにして筆紙の辨する所にあふざ實行する人に於て初めて了解するを得るあり、是の修養たる單に想像のみ逞く其實行を忘れて省みざる士の知る所にあふざ、今日の學者卓拔ある見識を備へて獨り不平呻吟の聲を漏らし所謂青天を背にして理想の天地に大活動を試むることを知らざるは此修養なき故なり故に敢て天下の學者に訴ふ主義あり綱領ある玲瓏千古に通徹する大學者たらんと欲せば古人の糖粕に汲々たらず時に悠然として氣を山川に養ふの概あふんことを

思想軟弱の時代にては先哲の遺訓に従ふ可なぐんも機熟し意定まるに於ては正さに自箇獨立の一
大理想を卓然として製作せざる可らざるなり、父より出でし子なれとも元來父にあらざるなり釋
尊大慈悲の光りに照らされたる佛徒なれとも本より釋尊にあふざるなり正さに自ら卓立せる大理
想を出さざる可らず是の理想たる幾多の修養より得る不屈不撓の覺悟によりて初めて確立するこ
とを得るあり是に於てか初めて理想の理想たる處成立せん、我輩不敏密に深夜泣て自家立脚の
甚だ軟弱あると胸中に描く處徒らに粗大にして實行の之に伴はざるを悲み終夜轉輾眠ること能は
ざるあり然れども年と共に意定まり氣平かに思慮熟するとき立脚の地確固不拔の機到りて我が輩

の理想の下に一度天下に呼び得るには幾多思想變遷の難關に打ち克たざるべからざる思ひ轉た茫
香の念に堪えざるものあり噫、

天 地 人

天の蒼々として極限なき、地の悠々として長へある、人心の微妙にして幽玄ある之を以て人は天
地人と並稱す

宇宙は宏大無邊にして限なきか、幽玄ある人心も遂に推測し能はざる程不可思議なる大きさか、然
れとも宇宙の創造されたるは、初め活動せる熱塊の混濁たる中より成り、其の中の恒星太陽を中
心として引力作用によりて我地球の存在するものなりと云ふ説あり、然り必ず然らん、然れども
其の以前は如何にと問ふは之れ詭辨に過ぎずして、兎も角宇宙は斯くの如くにして生れ、地球は
斯くの如くにして存在するあり、筒様に生れたる宇宙は將たして今死せる宇宙か、生ける宇宙の、
生けるものは死せざる可らず、然らば今日の宇宙は既に死せる宇宙か、否な、活ける地球、活け
る人間、凡て現に精神を有す、死せる宇宙は精靈を有せず而りも冷かあり、觸れよ、凡ての物は
温かならん、宇宙は尙死せず、嚴としてライフを有し、其の精靈は潑刺として寸時も休まざるな
り、見よ流星の蜿蜒して空を横ぎり、既成の星羅は上下東西に馳せ違ふを。

然して此の活動せる宇宙は無邊にして永久死滅の期來らざるの、思ふに然らず、宇宙の精靈は遂
には活動の氣を失なふに至らざる可からざるあり、恒星、遊星、衛星は皆其の形を消滅し、光ある
ものは闇黒に歸し、萬物を戴くものは其の性を亡ぼし、即ち宇宙は死せるに至らん、生と活と死

と、此の三あるものは体ありらざる可らず、体なくして生活死を兼ねるものあり、而して体あつ
て無限あるものなし、即ち宇宙は有限なり、其の宇宙の外はと問はれ我は笑つて止まんのみ、我
は宇宙の限あるを知りて、宇宙外の天地は固より議論の外にあり、即ち換言せば宇宙は限りあり、
故に体あり、故に死あり、故に精靈を有す、精靈は尙死せず、人間此の精靈に感づて生れ、且つ
活動しつゝあるなり、

生ける宇宙、一青天一の天闊するもれなり、玲瓏として遙か扶搖の寥々を聞く、見よ羽衣を翻へ
ず天人の舞、聞けや天籟清淨の樂、

死せる宇宙、一白衣の老仙、形ち枯木の如く、眼爛の如きもの、勿焉として雲乘し來り、黄金の
披を上段に冠りてヒマラヤ山上より打ち下口せば、地球は微塵の烟となつて滅するるときと、宇
宙が死出の旅路に登るときなれ、

胡蝶舞ひ、百花香豊くに、温帯の山水如何に明美なるかよ、屹然として天を突く北極の氷山や、
駱駝椰子樹下に眠る大砂漠、豈に地球は一幅の圖書にあらずや、

一夜一冊の地誌を繙いて、如何に奇々怪々れ念に打たれしよ、世に千態萬狀と云ふ語ありせば、
地上表面の現象程變化多きものはありらん、

試みに思へ、富士山頭より四十五度の傾斜を以て吹き下す青嵐を吸ふて、膽を東海の濱に洗ひ、
和歌の浦の月の夜に、うしま立の歌を詠じつゝ、流笛一聲、玄海は波を蹴て、高麗海峡を横ぎり、
鷄林を蹂躪して長白山下に虎を狩り、進で鴨綠を渡りて、萬里の長城を乗り越え、北京に到着し、

百兩を投げ打つて、ごびの砂漠に一夜露營の夢を結び、再び白水を下り、運河に乗って、黄河を出で、勃海の旭色麗らるるの朝、馬上黄海の濱を傳ふて、揚子江上南清の豪傑と古今を談じ、舟を洞庭に浮べ、琵琶を西安に都府に彈ト、孤劔西藏に入り、ヒマラヤ山を躍り越えて、緬甸を平げ、印度には椰子樹下に古きモーガル帝國を忍べよ、東、中央トルキスタンを初めハビロンの古城、ユダヤの舊都、何れか斷腸の種ならざらん、化石を薪とする西藏の蠻民と、鰐魚の腹を肥す印度の老幼を對比せよ、八億の人民を載する東洋の天地 趣味津々、

歐羅巴は人口三億六千面積三百八十萬、

俄國。曠漠所謂無何有の平野、涯際なき森林の中に丸太作の小屋あり、弓矢鐵砲立ち並び、爐火に近く奇怪の老獵夫野狐の皮を剝ぐ、彼れの半生は獵と盜、

土國。君斯垣丁堡之指顧の内に亞細亞と接し、炎熱夕照と共に消え去れば、黒海、地中海を吹き渡る涼風陣々袂を拂ふ、藤椅子に倚りて月の明りに土國の史を繙けは、何んぞ知らん一時天下に威を揮ひし阿士曼帝國の后ちからんとは、

希臘。握飯大の帝國何等無限の趣味を有するや、ホーマー詩集アレキサンダーは雄國、只胸躍る計りあり、去りながら今や溝渠理せず、道路修めず、盜賊山間に徘徊すとよ、寧ろ憫殺、水陸の交界參老錯雜、全國概ね山脈縱横、氣候温暖、小麥、綿、煙草を産す、

伊國。長靴に似たる國。形も既に滑稽あり、歴史豈に滑稽ならざらん、神聖なる宗教が如何に政客の道具とありしりよ、天下を蹂躪せし國は如何に屢他國の爲めに弄ばれしかよ、ベズビヤ山

は盛りに烟を吐き、慘毒を流布し、ポー河は往々氾濫して低原を浸し、氣候温和なれども時には亞非利加の熱風に雜草枯るゝあり、産物は美は人物を怠惰にして沃地空しく荒廢に歸せしむ、十八世紀の史上各國の爲めに弄ばれて所在内亂の蜂起となり、帝國成るや亦軍備を徒らに擴張して天下政治家の物笑となる徹頭徹尾滑稽なる伊太利、

佛國。之に反して愉快あるは佛國なり、ピレニースとアルプス兩連山の大きき一對の下駄に立ち上りて、温和ある氣候、豊饒ある土地、夥多かる物産を含み人民活潑にして彈力強く、亦堅忍の氣象に富み加ふるに節儉にして清洒なり、巴里は殿堂の如し、而かも活潑ある政界、大革命の歴史、流血の鮮美なる化して黄金となり、金剛石となりて、之等殿堂を飾れるを知らずや、

璵璠。平々凡々たる地勢のみ、只山川の形より論ずれば自然の境界内のに其の統治の範圍を有すれとも(即ちカーペンカン連山、サープ河、アドリヤチック海及びアルプス連山を以て)一國の統治の完成せざるは山川の境界にあらずして、正さに人種天賦の思想の一致にあり、余は世界史を繙く毎に、榮枯盛衰世の常とは云へ最も酷烈に余が胸中を寸裂せしむるは波蘭分割にあり、墺太利汝は如何に善き獲物を捕へて其れ鮮血を吸收せしよ、天網恢恢たり汝も分割は早晚免れざる運命ならん、然り西方日耳曼種族に屬するものはウキナより南獨逸に通ずるダニユーブ平原は地續きを以て一國を作らしめよ、東方のストラボニツクに屬する者は之を全く露國に合せしめ其の中央線はブタベストを通ずるダニユーブ河からしめよ、言ふ勿れカーペンカン連山ありて交通不便なりと、交通の便否は少くも前世紀の夢にして二十世紀の問題にあらず、而くも况んやブタベ

ストより鐵路一線はガリシヤに通ト一線はウイナヲ經てワルソーに至るにあらずや、歐洲の平和の爲めに此の分割を決行せしめよ、嗚呼絶世の豪傑一度起つて、如何に天に唾せば已れに歸るかの大模範を示すものあらば亦如何に和樂なる家族的一人種を腕力にて分割せんとするものあるべき必ずや平和の神は天誅を蒙るべきかを知らしめば實に多謝崇拜するに足らん、

獨國。嚴格なる日耳曼我は汝を愛して措く能はざるあり、此の代表者たる普國歷朝の王を見よ殊にフレデリック大王の勇氣の凜烈侵す可らざるものある最も尊敬の念に堪えざらむ、而かも現今の獨を作りたる比宰相の風采を見よ、奇偉颯爽思はず襟を正さしむ、殺伐なる北方獨逸の低地より中央及び南部の底知れざる深き森林しりも朝旭に夕照に神々しく蠱々繁茂せる南方漸く高く奇石儼然として各聯邦の相犯さざる風致を帶ぶる、無數の製造物は深玄なる學理と永久の目的と確實なる機關によりて産出さるゝ、人民一般馬鈴薯を以て甘んずる、務めよや獨國、汝の前途は悠々たり、神聖なれ、嚴格なれ、確然され、永久の勝利は汝の手に歸せん、聯邦の士よ、同胞離れざる厚き同情と、密接なる結合を以て靜かに毎夜膝つき神に感謝の意を拂へよ、

英國。ユニオンジャック天下到ると所翻らざる所なく、其の本島小なれども其領地は雄大に、其の本島産物少けれとも其の領地は豊かに、歐洲の一方に横はれとも致る所の要害は領地の内に含まる、人民の獨立不羈なる嘗て旗を卷て降りしとなく、介然として各大州の制度と異にし、保守なる法律に依て立ち嚴肅なる國會に於て法を制定し、一日も休まず、一刻も怠らず、着々として進歩し、箇人の利害を圖るよりも一國として能く活動す、國民として善良なる國民たるを失はず、殊に人

民の獨立にして人の鼻息を窺はざる、國會の神聖にして一句一句の演説も謹慎にして而かも審美的ある、實に是の点を以て鑑むべきものとす、

亞非利加。

一部は砂漠、一部は森林、小供れなせる馬鹿らしき築山に似たるは亞非利加あり、然れども誰れかナイルの川源に立つて旅行のデートと姓名を木に刻めるものある、將たアルベルトニアンザの湖水に涼を納れしもの誰れぞや、サハラ大砂漠を東西に横斷せしもの幾人ぞ、スタマレーが大部隊を率ゐてコンゴ河を遡れる日記は悲慘酷烈を極む、其の遙かに中央亞非利加に入りてピクトリヤに至れる大旅行は如何に内地の亂暴にして野蠻なるかを充分に齎らし歸りぬ、

蠻族の人を食ひ、蛇を味ひ、樹枝に棲息する、毒虫猛獸の無數なる、鬱樹の日光を蔽ふ、固より人間外の天地なり、若夫れ蝗虫の雲の如く天日を暗うして來襲する、鰐魚の游泳して巧みに人を拉し去る、獅子の吼ゆるや山岳に轟き一喝狐狸を裂きて生血れ岩角に滴々たる、象の群を奪つて過れば、蟻軍の連綿として百里に渡れる、亦猿猴の奇怪なる種族の大家族を作つて跳躍する、亞非利加は大なる化物屋敷あり、而かも是等の獸類と日夜競争する屋敷れ主人公ある黒奴蠻人の一層不思議なる化物たるを想像せば戦慄其の極を越えて啞然たるに至らん、

然れども二世紀の后ちは、サハラの大砂漠は諸所より河流の導かれ彼處此處に森林の翠深く、よし水運の通せざるあるも高架鐵道の設けられて四方自由な交通成り、亦中央部の密林は殆かも我北海道開拓當時の如く着々切り開かれて、却て猛獸保護法の議案は出づるに至るを思ひ又如何に

ピラミッドの旅客をして易々平然としてアルベルト湖上に船を浮べ得るに至るを思へば手を拍て機械的進歩は前途を祝せざるべからざるなり

北亞米利加。

太平洋の波と大西洋の波と相接する所一大軍艦の浮べるあり、之を北米號と云ふ、船首は遙かに北斗を指し、船尾は遠く熱帯に逼る、莊子は所謂鰭の化して軍艦となれるもの即ち之あり、是の軍艦や實にコロンプス氏によりて製造されたり、ロッキーマウンテンは其れ左舷をなし、アリゲニー連山其の右舷をなす、左舷の船首に近く煙筒あり之をアラスカセントエリヤス火山とせ、甲板はミシシッピー河の平原にして二條の鐵路運動の迅速を助け、而して此の甲板上に産物は優に軍艦修繕を償ふに足る、儲て馬は昔歐洲より運ばれ、煙草、馬鈴薯は南米より、小麦、綿、甘蔗、米其他の諸果物は歐洲より積込まれたり、乗組員は重にも海國英人よりなり、其他事務員としては西班牙亞非利加土人の混種あり、料理人ボーイとしては此の軍艦材料を軍輸せる黒奴五百萬を其の儘特別の慈恵を以て使用せらるゝと云ふ、

此の軍艦中特に大浴場あり、西方ロッキーマウンテン州の北西隅にあり、エルローストーン湖と名づく理髪を洗ふ大瀑布あり、浴后休息の洞谷あり、大沸泉の噴出は手拭を晒らすに最も妙、水兵の演習后はナイアガラに行きて命の洗濯を爲すべく、亦飲料に供すべし、敢てボーイを呼ばずともロッキーマウンテンには大鹽湖のあるあり、大西洋沿岸には大なる酒保の無數にあり、如何なるものも調達するに能はざるものなし、ワシントン店ニューヨーク舗、フライデルフイア商會の如

き著名なるものあり、是の一切完美されたる大軍艦は初めは英國の所有なりしが、后ち軍艦乗組員ストライキの結果其の共有物となり、日進月歩遂に十九世紀の後半に於て文明てふ大波濤の内にお上下して今や正さに全速力を以て奔りつゝあり、然れども悲しき哉、是の船深遠なる歴史なく、爲めに安上りの健造物の感なくんばあらず、能く熟視すれば何となく調子外れの處あり、是れ即ち北米の北米たる所以にして而るも歐洲人士の尙甚だ重きを置かざる所以なり、我れは北米（固よりカナダ、メキシコ眼中になし）に告げん徒らに五重塔然たる縦のみに長き建築物を造り以て得意となす勿れ、寧ろ汝の釘を締めよ、其の前途多望なる戦場に出でんとするには尙一層深く自重勉學せよ、地震の爲めに崩れ易き土地を以て家屋の基礎とする勿れ、幽玄ある學理の上に安泰に置けしめよ、征略的方面に走りて徒らに失敗を招かんよりは寧ろ國民の統一に務めて各州の團結を強固にせよ略奪は汝の本分にあらずるべし、正さに平和は汝の綱領にあらずや、自由は第一の主眼にあらずや、汝戦闘艦たるなれ、寧ろ世界平和の巡洋艦として天下を警戒せよ、然は世の最後の裁判に神の最愛の子たぐん、

南亞米利加。

蝶の如き南米よ、アンデス山脈と云ふ堅き背骨を有しアマゾン、ラブラダ河等の小骨數多なる蝶の如き南亞米利加よ、地圖に於て見るときも、何となく扁平にして肉僅なる蝶の如き亞米利加よ、我は悲しい哉君と談ずる寸暇なきを、何となれば筆を取つて論ずるには余りに價値の少ければあり、試みに言はん、北方アリゾナの平原は雨節には青草繁茂牛馬往來するも乾節には青物

枯れて牛馬皆逃れ去る、殆かも淺草の夜見世にある最低價の廻はり燈籠の如し、中央アマゾンの平原は密樹繁茂地を隠し天を蔽ひ喬木灌木雜然として並び生ト、蔓草之を纏ふて錯亂の狂体手の附くべきなし、奇妙なる鳥嘯り、滑稽なる猿群をあり、鱷魚は河流に逍遙す、殆うも古道具店にある油繪の如し、更らにラブラダの草原牛馬の群を畜して土人之を狩獵することを以て業とする、市街を離れし牧場に遊ぶの感あり、抑揚なく、波瀾なく、頓挫なく、只鯨の遊泳する如し寧ろ看過するに過ぎざるなり

以上は地球上の形況あり

更らに冬は六花枯木に咲きて梅香を慕ひ來る鶯聲を聞き、春は百花爛熳として錦雲千里霞か雲の、グライトサンライトの燦として而かも青嵐の活氣ある、夏は桐の綠樹に午眠を驚かし秋は天晴れ氣澄みて草間に虫聲の唧々たる、

旭の神嚴ある、日中の赫々たる、晩照の天地を彩どり、水に映つて金波の漣漣たる亦暮色の模糊として白帆を罩むる、夜は闇に流星を見、月に尸聲を聞く、

此の千態萬狀限りなき變化ある地球は半徑僅か千六百二十四里にして、日に自ら一回轉しつゝ、六十五萬里の速度を以て走るなり、若し地球を離れて此の轉走する有様を見れば實に奇妙の感に打たるゝならん、然れども顧みれば一大恒星太陽系の内に多幸多福なるは我が地球あり、熱騰せる遊星思ふも恐ろしき地獄なり、獨り我が地球は此の多趣多味ある遊星として存在するは宇宙の大エネルギーの最も注意して分けられたるものにあらずして何ぞ、其れ責や大なり、地球たるもの正

さに寸刻も休息なく只是れ戦々として義務を全せざる可らず、誰れか地球を死物と云ふ、否な活ける地球、活潑なる遊星、趣味多き、世界造化の恩惠深き大塊、多謝を萬物の靈長として我は生れたることを、花や月や人の爲めにあらざりて誰れの爲めにせん、悲しむ勿れ、訴ふる勿れ、冤するあり、放心なる勿れ、靜りに、嚴かに、神聖に、活潑に、地上の我は動かざる可からざるあり。

いでや筆硯を新たにいて人間に就て説くん、

可笑しき角笛の吹ふる、や凡て遊べる牛羊は竹柵の中に包まれ、天幕の中には一家相集りて晚食を喫し、偕て明日は何處の旅の空、年中定住なく只、生れて死するのみあるは遊牧の民からずや、

(太古時代)

曉星に起さ、薄暮に歸る、農業の耕作に勉勵し、村より村に傳はる田植の歌、小麦刈る音頭、豊年萬歳帝王は何と云ふ名か知らず、我は只年貢米を收むるのみ、嘗て他人に對する權利義務の關係あきは實にアグリカルチュアは民(埃及時代)

城下を襲ふ雲霞の大軍、戦さの前途に何ぞ女々しく妻子に未練の涙を殘さんや、草鞋引き締めて勇ましく戦場の露を消ゆれば後の哀れは詩人の筆となりて萬世に傳ふ、又傍に政界の名士漸く南船北馬の興味を覺えて稍く時世の潮流に波瀾を起し來る(希羅時代)

月下湖上に船を浮べて只一對の梅櫻、微笑せる騎士、羞々美人胸に綻ぶ戀衣の詮すべきなき風情かれども、信仰深き清淨潔白の精神は頭腦淡然として主君の爲めに遙かパレスチン遠征の途に登

る勇ましきは(中世紀の半面)

近世紀は異人種の調和ステートの健立、商業の發達、新世界の發見、領土の占先、學藝美術の進歩、現世紀は奈翁の荒せる百千萬斛の鮮血全く洗ひ去られて爰に圓轉滑脱ある外交手腕の絶妙となり遂に吾人が熟知する如き有様の儘にて哀れ第十九世紀の晩鐘は第六報トぬ、

偕て二十世紀前半の歴史は一度述べたる如く東西兩洋思想の大衝突三億六千萬其數少かりと雖とも勇氣凜烈野心勃勃たる白哲と、八億よし大半は凡べて眠れるにせよ、宏大なる大多數と開闢の歴史を共にせる黃色とが印度洋上に火花を散らす活劇、テースタメントと一切經の大撞着、之の問題の爲め前世紀の豫言者が遣せる如く何れか一方に決するべく必死となつて戦はん、然れども思へ、羅紗の洋服綿衣れ羽織、鍊瓦の建築板葺れ屋根、平らたき皿、底深き茶碗、油繪の妙、墨畫の絶、咄幾何の差違ある、

衝突か、調和の、余は爰に永く未來の夢に耽る能はざれども、二十世紀の天地に於て起らざるべからざる問題たる疑なし、勿論余は遂には所謂世界は平和の極に達すべきを知れども、世間一派の急進を好んで一足飛に理想の天地を現實せしめんと好むものにあらざる、主義なき運動は漠然として効を納むるゝと能はざるを知れども理想に駆られて思想潮流れ大勢に反抗して迄も無謀れ舉に出づるおこを喜ばざるなり、斯れ如きの徒は却て自家の理想を破壊するものにして、潜める理想の表には現實の淘汰あり、隠れたる目的の裏らには手段の横はることを了知するの士は實に着實溫和なる眞の理想家と云つべき也、故に我輩先きに宇宙論を呈出して、地球を豆大の小とし、

世界平和の止む可らざるを諷するも、決して革命を起し鮮血を流して迄も是の理想的天地を現實せしめんと欲するものにあらず、何と云へば心中深く信ずる所天下の道理之に歸すべきを思へばなり、即ち我輩亦特に未來の夢を説くも決して我輩の理想と衝突するなく、却て平和に近づく進歩の階段たるや疑なきを信ずればなり、

以上昔物語、未來の夢を貪りぬ、眼を轉じて埃及以來六千五百年れ複雑なる今日の狀態を見よ、一枚の新紙を開けは上流名士の國事の奔走、官吏の任免、論說、批評、攻撃、辨解、雜錄、小説、詩歌、特に雜報に於ては世界百方面皆之れ惡鬼公行實に多樣多面、喜、怒、哀、樂、痴情、戀愛、疑心、詐偽、中傷、離間寧ろ口を濯ぎ耳を洗ふて天外に飛び去るに若くざるなり、而かも此の多樣多面も男女の二種よりなり、其の二種も一の心の發動より起るを思へば實に人心微妙の感に打ぬれざるべからず、尙一層心に就て考ふるに是の心たる元來至善至美にして所謂虛無淡々を本性とし、其の罪惡は社會の狀態に只僅か汚されたるのみにして若し後悔其の罪を天に謝せば本原の至美に還る易々たることを思へば寧ろ不思議の念に堪えざらむ、

然れども思へ、社會の事情は多樣多面なりと雖ども之を大なる宇宙の眞理に照らせば一杯の薩汗に過ぎざるなり、一杯の薩汗に過ぎざるを以て、之を誤れば社會を玩弄する大惡人となり、之を正しく觀ずれば天地を小とし萬民を愛する大哲人となる、正さに其の間一髪を容れず、正邪道の分かる、所、其端微にして知る可らざるなり、故に小智小罪を犯し大智大罪を犯すとは夫れ之を言ふなり、豈に慎まざる可んや、

是に依て見れば複雑なる社會の現象の起る所以は主たる人心發動の如何と、之を誘引する社會の狀態とに外ならずあり、人心の起原及び之が修養の道に就ては既に説けり、社會の狀態の日に益腐敗して刻々下底に沈淪せんとする是れ如何なる理ぞや、余少しく之に論及して天下に訴ふる所あふんとす、

夫れ如何なる人と雖とも上は帝王より下は乞食に至る迄一度は死せざる可ざるあり、是れ事實によつて明らかなるのみならず亦自然の理の然らざるものあり、花は夏に散り、葉は冬に枯る、喬木も遂に朽ちざる可ならず、之を禽獸虫魚に徴するも然り、人生亦然り、自然の道理は生あるものは滅せざる可ならず、然るに死と共に形体用と滅し、魂魄宇宙に歸ると以て現世的關係と全く所謂幽明を異にするなり、即ち父子兄弟夫婦朋友の精神的、肉体的情緒の關係を斷たざる可ならず、是を以て生れて人情の動物たる人間は最も恐るべきものは死あることと了知す、活くる爲めに動くこと云ふは死を免のれんが爲めに活くと云ふことに去て、人事狀態の多様ある正さに死と云ふ恐を防がんが爲めなり、世の哲學者たるもの最も慎重なる研究を要すべくして又最も安堵すべき説明を人民に與へ以て人心の歸着する所を決定せざる可らず、然して今日の大墮落を起せし所以は實に過去哲學者、思想家、教育者あらゆる之等形而上に關する學者が死と云ふ問題に付て社會に請求せし反動の以て今日の現象を呈するに至りしなり、我輩絶叫するを憚からず、今日の腐敗は當然其責を哲學者に歸せざる可ならず、何を以て之を云ふ、乞ふ辨せしめよ、恐ろしきもの、内、最も恐ろしきものは實に死あり、死の神の若し永久に襲はざるものならば世に

恐ろしきものはあらずあり、白刃は頭上に閃めくも、洪水の氾濫として家を浸すも、火炎天を焔し黒烟地を巻いて來るも、死と云ふもの、あるがれ何れ理あつて恐れんや、然れども人間此の世に存在する實に複雑なる倫理的關係の中にあるを以て恐るべき死と雖も顧みること能はざるときあり、父母の恩、君臣の義、兄弟の愛、朋友の情として、死も鴻毛より輕せざる可らざることあり、然り正さに然らざる可らざるあり、父祖傳來の國恩を思へば、死を顧みるに違あらざるあり、世の倫理學者の此の点に就て論ずるや甚だ善し、然れども彼等の巧妙なる辨を弄して區々たる瑣事に大義名分を揚言し、死を恐れざること極端に至らしむに於ては滔々たる天下の亂實に是に基因するなり、凡そ東西南洋に行はるゝもの其他特殊の教義を有する宗教に於て見るに、靈魂不滅を基礎として教の爲めに死するものは來世至樂の域に達すると云ふに於ては各教皆一に於る所なり故に迷信深き老幼男女は惑溺の甚だしき、天命は重すべきを忘れて一死以て教の爲めに殉ることを希ふ、乃ち一二野心の徒輩宗教の名義を借りて良民を煽動し百萬の生靈をして戰場に露と消せしめたる實に歴史の了然として隠すべからざる事實あり、歐洲中世紀の大事業は重にも宗教の源因にして十字軍の如きは最も悲慘の極に達せり、宗教革命に於ける近世紀の波瀾は全く宗教を爲めかりしかり、元より耶教主義は眞理の至極を顯はすも之を利用せる者の甚だしき幾千萬の人民をして空しく戰場に屠りざるにあらずや、十九世紀の初めに行はれたる佛國革命の如きは之れ過激なる哲學者の筆鋒駆て以て彼を至せしかり、回々教に至つては論ずるの價値なきもの、回教とは人を殺して楽しむものなりて主義にして南方歐洲、北方亞非利加に死屍枕山を

築きしことを思へば、如何に宗教の天命を没却せしむを知るに足らん、佛教に於て根本主義は隱世的趣味を帯ぶるを以て歐州に如き大破裂なかりしも對耶教に對する過去近來の暴動は思ひ半ばに過ぐるものあらん、支那に於ける戦争の如き、我國に於ても石山合戦或ひは長崎の虚殺の如きは宗教の人命を犠牲に供せし例證とすべきものあり、亦儒道に於ける大撞着即ち天下第一の徳望家を以て王とせよと云ふ論と累代の君恩を忘れざる臣の本分ありと云ふ説は王朝の交代に際して必ず衝突を起し滲澹たる悲劇を演せしめたり、其他幾多の哲學者、空想家下ては慷慨家の如き區々たる怨恨を深遠なる學理に包みて良民を煽動し血を流せし例收擧に遑あらず、今日社會黨の勃興は全く哲學者の責にして半盜半俠の社會に横行するは實に文學者の罪にあり、固より慷慨の氣を吐くもの世の潮流に鑑み眞に民を愛するもれ、みにして、之を奉ずるもの亦誠實の信仰に出づ、るならずは世界の腐敗は立るに治することを得んも此如きは古來甚く少く至善眞美のプリンスブルの裏には勃々たる野望の躍るを如何せん、是の弊の及ぶ所限りなく一波は一波を起し玉石混然相共に奈落の底に墜ち去るあり、嗚呼遺訓は亂世の基となり、教義は戦争の源因となり、死を恐れざる迷信は今日腐敗の起点となるに於ては世の學者何の顔色あつて恬然治平天下と叫ぶを得ん、大義名分を論じ博愛信仰を説くもの互に綱領を張つて世の秩序維持の爲めに勞する所固より多とするに足る、然うれども苟くも人世最終の問題たる死を説くに至ては今少く慎重に公平にあらんことを希ふものなり、殊に戀愛を根本要素とする小説家の好んで死と云ふ問題を弄び讀者の愛顧を招き年少の男女を知らず識らずの中に同化する結果恐るべき弊を殘す故深く慎みて眞に勸

善の意を以て筆を取らざるべからざるあり、

元來人の死を惜むは之れ卑怯未練の然らむる所にあらざるあり、萬物の長たる人間の此の世に出づる正さに壽命を全ふて人の人たる義務を盡さんが爲めあり、人の死を惜むは自然の命する所にして然らざる可らざるの理あつて存するなり、然るを徒らに感情を挑發して死を輕せしむるに至つては實に人間を没却し、宇宙の眞理を蔑視する甚だしきもれと云ふへし、死を輕んじて當るべき事件に就ては天の定むる所、人の自ら識別し得る智の範圍の中に存す、故に人間各自少しく自重の念を増し、輕擧を避け、暴動を慎み、壽命を全ふせしめて死することの甚く罪深く人間の本分を滅却する最悪の行爲なることを自覺するに至らば、今日の恐るべき社會の現象も、或は紛亂を回復し、萬民枕を高ふして寝ることを得るに至らんか、宇宙の精靈は健全あり、地球は常に活潑に回轉しつゝあり、又社會は一方には機械的進歩の日に隠れたる天の秘密を開きて文明の途に向ひ天下均一の利を得せしめ、他方には道徳の發達從來の誤解僻見を捨て、人權の程度天理に適應するに至らば幾千年來學者の夢想せる天地人一貫の理確立するを得んか、

村

春三月、花の霞る、時に嵐の吹渡れば、落花紛々狼籍して敷けるが如く、正さに心揚々立て舞ふが如し、一天晴朗の日なりき、某村に於て春期大懇親會は開かれぬ、場所は最も勝景の地を撰んで櫻ヶ岡と定まりぬ、幔幕は櫻樹の間を縫ふて坪數約一千、

宴會は夕景より催されたり、晚鐘報じて雀鳥啼に歸れば暮雲金色漸く薄らぎ、片破の月眞白に花を照らして夜色朦朧なり、樹間花燈籠は吊られ、急に架けられたる電燈は光はテールフルの白布演壇の飾に映じていとし、神聖の色を帯びぬ、馬車止まり、腕車來り、徒步肩相摩して集まるもの二千、男女老幼美装を凝らして午后七時悉く定め席に着きぬ、拍手喝采座は一隅に起るや、全員之に應じて響き耳も聳する計りなり、乃ちフロックコートフロックコートの辨士静かに花瓶の後ろより顯はれて演壇に立てり、彼は此地の村會議長にして最も公平廉直の名高く而も辨説の功妙を以て聞ゆ、彼は一杯の水に喉を濡し静りにハンカチフを取り出して口邊を拭ひ、徐ろに語り出せり、滿座寂然耳を傾けり

曰、我村は諸君も知る如く人口約三千、戸數六百余、村としては恥うらぬ村あり、土地豊沃にして殊に年來の豊作物甚だ善く、互ひに大平を歌ふて呼謂鼓腹擊壤の民あり、實に好摸範の村と云ふへし、然れども我村の最特長たるものは其の土地の豊饒にあらず、住民相互の徳義心の厚きにあり、思ふに今より三百年前即ち二十世紀當時は、如何に世界全土に渡る大戦争は最も恐ろしき活劇の演せられしかよ、當時の豫言者は其の戦争は永久に續くべしと叫ひしことの實際となり、廿一世紀に於ては各國間の平和條約結ばれて、決して人は獵の外には武器を持たざることとなり又、吾人の知る如く各國は平均に區分せられ、各々自治の制度とあり、土地は固より共有となりて、互に相侵さず、所謂平和の極に達するものとありぬ、血と云ふものは醫學者の研究の外は決して見ることを得ざるものとあり、其の色すとも知らざるものあるに至りぬ、即ちあ

らゆる當時の哲學者は二十一世紀を以て實に將來にも過去にも見ざる幸福ある世界と叫べり、然れども其の世紀の終りに於て法律經濟等人事的の秩序の上に撞着起れり、即ち二十二世紀に於て此等の状態に適當なる制度文物の作制とあり、二十二世紀の此の事業の確立せらるゝや、亦當時の學者曰く二十二世紀こそ即ち神の好ませ給ふ世界と揚言せり然れども二世紀間永く殺伐の氣止み、凡ての豪傑が劍を捨て、此の平和なる世界に住すること、あるや彼等の頭腦炎ゆるが如き彼等の頭腦は一刻も休むこと能はず眼は機械の進歩に轉して奇々妙々の發明とあり、人間の歩行を止め、人の眼を催ほさしめ、衣服を通して懷中の物を採り、千里を離れて事物の動作を察し得ることとあるや悪人の種尽ざる世の中、即ち此の機械を利用して二十二世紀の終りに機械的戦争の有様とありぬ、今や二十三世紀、此の大問題を解くざれば人は平和の極と云ふこと能はざるに至れり、思ふに此の問題たる機械を以て制する能はざるなり、一の機械を以て之を防げば又他の機械出で、終に止まることなきに至らん、只人民は徳義を了知して相侵さず機械の發明をなく完全に世の公益に用ゆることを自覺せしむるれば外他に道なりらん、余は思ふ今後幾百年を経て如何に社會の状態は變ずるも其徳義心の滅せざる限りは、決して平和を害することなくらん、結局の平和は公德を重んずるにあるのみ、如何に無謀なる學者と雖も徳義を滅却して迄も主義を貫かんとするものあらざるべし、然るに我村は二十世紀以來社會の進運と少しも遅れず、改革すべきは改革し、設置すべき機械は既に完美して今日に來れり而して未だ此村に一の機械を弄して惡事を犯せるものなく公德を害せるものなく、最も平和に圓滿に互ひに隣人相恤れみ、緩急相助

けて天に命する社會の進運を少しも妨げざるは實に我村の最も誇るべき處なり、(此の時滿場喝采湧くか如し)我々は年に一回春期大會を開き、相互に見ゆるとき、此の神聖なる會場に集まるに際して一点惡事の犯せるものありとせんり、何れ顔色あつて此の會に出席するを得ん、然れども幸ひに年々相會するもの減することなく益々盛大の途に趣き最も愉快に最も和樂に語ることを得るは實に幸福の極と言はざる可らず、希くは尙將來も櫻の花の常に美麗なるが如く月の光りの常に澄める如く年々歳々徳を研き心を養ひ平和の村の名に恥ぢざらんことをと
即ち靜のに壇を降れば再び喝采の響き山岳も崩るゝ計りなり、神聖なる音學の調べに和して、年々謳はるゝ平和の曲は、

樂しき我村

平和の神の守りて

庭の櫻の花片も

小川の水のいづくにも

清き平和の宿るあり

清き平和の宿るあり

樂しき我が家

平和の神の守りて

夕爐邊のまとぬにも

朝稻刈る田の面にも

清き平和の宿るあり

清き平和の宿るあり

殊に撰ばれたる愛童、愛女の聲朗らかに歌終れば中央少く高き處には「永久の平和」てふ題にて面白き數番の舞蹈は演せられぬ、村會議長巧みにして大喝采を博しぬ、

樂隊は席を賑はしぬ、晚餐は初まれり、山海の珍珠は運ばれたり、談笑は聲は此處彼處に起りて往事を談し將來を語り、汚はしき話は少しも口邊に登らず、やがて三々伍々手を提ひて樹間を逍遙し月下清談湧くが如し既に刻移り更蘭くるや全員再び席に歸りて萬歳を三唱し各々歸途に着きぬ、

余又此の席に招うれ實に欣羨の念に堪はず厚く禮を述べて歸途に登り車上酔迴りて思はず眠りに落ちぬ、風破障を拂ふて我に歸れば机上ペンを躍して理想論を艸しつゝあり内にて勞れて夢を貪りしなりき、嗚呼我は亦二十世紀の濁世界に浮泛する我あり、平和の夢は指折るも遠し、二十三世紀の後か、照る月は同じ咲く花は等し、されども濁りに染まぬ花はある、さやけき影の何處も汚れたり、痛歎痛歎願くは此世は我の夢にして、夢みし夢は實なふんふとを、

戀 愛

戀、神聖なる戀、愛らしき戀、密よりも甘き戀、我は吾が理想に浮ぶ戀を説くべうらず、濁れる我をして、汚れたる我をして神聖なる戀を説かぬよ、世は濁れり、人は濁れり、我も濁れり、而かれども戀愛は神聖なり、そだてよ、ラブの女神は愛のピアノを彈するよ、目を上げよ美の神は香しき薔薇の匂を、あらゆる萬民の胸に振り撒きつゝあるよ、

十六億と云ふ勿れ之を分ては男女のみ、之を繋ぐものは戀を離れて何かある、愛らしき稚兒の、綠美はしき髪を母の懷ろに埋めて眠るとき、既に奇麗なる花、紅き繪、實に最も喜ぶものにあらず。

小學に通ふに到るや、嚴として男女の區別あり、男は勇ましく活潑に、袴袖共に矩かく、女は柔和に従順に衣服亦優美あり、年二八、男子は將來國家の有材として勉學怠らず、女子は未來の婦人として貞節最も慎む、嗚呼是の時に於て正さに戀の女神は最も活潑なる少年と最も愛ふべき少女をして他日の夫たり妻たるべき社會存立の至大要素たる戀愛なるものを賦與するなり、思へ、千々に胸は裂くる計り花に月に玉の緒の亂れ綻びて胡蝶は花に狂ふ如く、一縷の香を手頼りにて喜び勇み舞ひ躍り時には悲觀禁ざる能はず或ひは自ら天に訴へ或は自ら甲斐なきを恨み、燈下感慨腸斷つが如き青年の愛と、深窓の下 文見るに物憂く、水莖は運びも思ふ儘ならず、月下は杜鵑、秋風の尸聲、傳ふよしなく、獨り轉帳する少女の戀、氣をげにも哀れかるは、ラブにあらずや夫婦としては一家和樂に、幾人の子女あり、夫は勤勉に、婦は貞操に、家庭は嚴肅、而かも瑞雲軒を回る、老ては子を監督し、孫を撫育し、老夫婦相携て名所を訪舊跡を尋ね、寺院に參詣怠りなく、偏へに來世の佛果を祈る、

合掌して故人となり夫の墓に詣で、朝夕の念佛の間にも、戀は清く淡く、幽界は良人を思ふ、幾くもなくして共に地下千丈塔婆の陰に隠れ、青苔滑らるに、紀念は松樹年古りて、末代永く子孫の祭を受け蓮臺の上相對して尙子孫の安寧を祈る、一世を通つて戀愛は徹頭徹尾神聖なり、然るに世には戀愛を以て神聖とせざるものあり、何となれば戀愛は肉慾的關係を免れざればありと、然り天下何物も溺るゝに於て汚れざるものあらん、神に溺るゝものは神を汚すものなり、讀書に溺るゝものは讀書を汚すものなり、道理に溺るゝものは道理を汚すものなり、戀愛に溺るゝものは固より戀愛を汚すものなり、肉体的關係の溺れて淫に流るゝに於ては固より全々惡まざる可らず、然れども一般の學者の言は其れ溺るゝと否とに關せず、絶對的に此の關係の合むを以て戀愛を不神聖かりと否定せんと欲す、余思ふ之れ暴論は暴なるものにあらずやと、夫れ神聖なる戀愛の中には肉体的關係をも含むものなり、世人は何を論據として此の關係を神聖なると云ふや、固より不義の關係は罪惡の極点にして、破廉は最大なるものなれども、道理の容るす關係、即ち戀愛の成立して、神之を容し父母之を容るし、先祖之を容るせる關係は嚴として神聖なり、只ゞ天下慾念に駆られ溺るゝもの多きを以て世間の患を防ぐ爲め之を神聖からずと言ひしのみ、理を推し來れば此の肉体的關係は人世成立は最大要素たり之をば不神聖と云へば天下何物か神聖なる、而して亦世の學者ラブ神聖を説くもの、多くは彼等の論據を固むる爲むに此の關係をば議論外に措のんとせれども、余は斷言す此關係は最大なる戀愛の要素にして而るも至高神聖なるものなりと、神聖なるとざるものを犯す罪固より小なり、神聖なるものを汚すに於ては罪亦從て大なり、戀愛の肉体的關係は神聖なり、故に苟も汚すものは最大の罪惡に問はる若し神聖なるとせば之を犯とも路傍の犬を撲ちしと同一、姦淫の如き之を重罪に問はるゝの理あり、即ち最大の罪とある故に此を嚴格に保持する初めて神聖となるあり、天下滔々此れ理を明かにせず、一二の議論に迷はざれて戀愛を根本より蔑視せんとす、誤れりと言はざる可らざるなり

戀愛は其の無形の關係に於ても有形の關係に於ても共に神聖あり亦之と社會の鏡に照らして上下の階級を熟察せよ、

朝に星を戴きて勞働に出で、夕に月はを踏んで歛を荷ふて歸る、妻晚餐を備へて待つ、更蘭くる迄夫の衣服の縫れを修繕す(下等社會)、商業繁昌一家多忙あるとき夫は應接に遑なく妻は一家の取締に汲々亦時に家業を助け、殊に最も小兒の養育に心を勞す(中等社會)、夫は議場の草案に夜めて心を慰め、横笛を取て庭上を散步すれば琴瑟を弾じて窓下に和す、(上流社會)、分に應下て形を異にするも神聖にして靄然たるものは戀愛にあらずや、然れとも戀愛は慎まざる可らず、人之に依て立ち、之に依て破る、英雄末路の悔恨に泣くも戀の源因となれるもの數ふ可らず、成効せる諸豪に於ても半面の歴史は戀愛文學あり、然れとも彼等は理性の能く、情を制せしを以てあり、炎々たる情火を制して能く位置体面を保持するは獨り理情のあるを以てあり、嗚呼戀愛は神聖なり慎まざる可らず、感情的あり故に克己の要あり、豈苟にすべけんや

以上余の所見の一端に過ぎず他日稿を改めて亦誌友の教を乞はんとするもの多々あり、余元來不文拙筆にして文意と反する所多し、然れども讀者幸ひに眞意を了知せられれば幸甚只ゞ貴重なる頁を過大に費せしを謝す (完)

老子管窺(續)

月

聲稿

倫 理 觀

人類の智的欲望は、孜孜厭くなきの渴求を以て、萬有は神秘、宇宙の謎語を解釋せむとして息むなしと雖も、求むるところは、畢竟満足の感情たらざるを得ず、又外界よりの印象が來すところの喜樂悲哀は感情の、人心を左右するは實に大なるものあり、孟浪たる感情欲望は、自然界到るところに現はる、活動なり、文化漸く進みて、人々宇宙は廣大雜多あるを觀察し、之を以て畢竟唯一の觀念の現象に外ならずとするに至るも、是れ現象の連貫を説明せむがために一するにあらずして、寧ろ此唯一觀念を以て、現象界に苦樂を下す本原ありとするなり、蓋し普遍的な法則に遵ふ存在及び生々の外に、此等存在及び生々を享受するところの苦樂の感情は伴隨するは、單にこれを偶然的副果なりとすべきにあらず、事物の必然的連貫は、喜樂悲哀の世界を建設する基礎たり、故に人は其生涯の境遇が、其心情をして或は光明からしめ、或は暗黒ならしむるによりて、或は幸福圓滿の樂天觀をあり、或は悲痛慘憺の厭世觀をなす、是の如きは全く現實の世界にして若し幸福を産出せざれば、何等の意味をも有せずと窈かに假定し、一は此期望と満足し、一は失望の境に陥りたるに由りたるあり、獨人生の享受のみあらず、又其活動の作法も是の如くに觀せらる、之を以て戎馬倥傯の裡に顯はる、哲學は、單に宇宙の神秘或は天地の根元などを抽象し、沈着なる態度を以て考察すること能はざるが故に、現實の社會に陶鑄し、敝々として人事處世の紛紜に關聯せしむ、則ちその哲學の世態に所感して起りしものと云はざるべからず、周の末葉に當り、王室式微を極め、諸侯強梁して世は刈薦と紊れ亂て、先王の典章將に地に委ねんとするときに當り、これを汙穢するに孔老は二聖出でたり、これ恰も西歐獨逸に於て、腥風血雨三十年、ウエストファリアの詛盟に漸く露天の光を見るに至りしも、歷年の疲弊、爲めに人心

の沈顔せるを憂ひて、ライプニッツ氏樂天主義の哲學を唱導して、この積弊を救濟せしか如し、孔子は倫常亂れ、綱紀廢れ、人心皆蓬々たるを見て、天下に生靈をして虚理空論に走らず、諄々論々、専ら實行的實利的に事を行はしめんことを、政治上倫理上に於ては、實に千古を透徹したる卓見なりと雖ども、一方よりこれを見れば、哲理の遙に老子は高遠深邃あるに及ばざるが如し、而して孔老二聖のされる手段の相反し、且つ餘弊の如何なりかは、前既に之を略述せり、老子は其學說の重きを政治脩身の上に置きしも、孔子に比して遙に抽象的に説明せり、然れども尙ほ支那的思想の圏環を措するを得ざりき、

夫れ人々の所謂美惡は、これ皆其情の反影あり、故に情に適ふを美とみ、情に逆ふを惡となす、且つ善不善に至りても亦然り、されど其美とするところのもの未だ必しも美ならず、惡とするところのもの未だ必しも惡ならず、善不善に至りても亦然り、此の如き者は何をや、情然らしむるあり、夫れ人の情は各異り、故に殊異雜駁の情を以て外境に感ず、即ち渾沌として好惡相纏ひ、旁礴として美醜相交り、窅然として主綱なし、嗚呼將た誰う河漢の溯源を正すを得んや、老聃曰く、唯性に復るにあるのみと、これ蓋し情の生ずるところ、必ず性に胚胎するの故にて、聖人情を化して性に復り、以て大同に至る所以と云ふ、有無の連環相生するは情性あり、情性相因る猶ほ難易の相成るが如し、故に老子の倫理の眼目は所謂復歸說ありと云ふべし、

曰く、天下皆美の美たるを知る、これ惡のみ、皆善れ善たるを知る、これ惡れみ、故に有無相生し、難易相成し、長短相形はれ、高下相傾き、音聲相和し、前後相隨ふ、これを以て、聖人無爲の事を處し、不言の教を行ふ、萬物作りて辭せず、生して有せず、爲て恃まず、功成て居らず、夫れたゞ居らず、これを以て去らず、

現象界は喜怒哀樂の世界あり、吾人の特性は思惟し意欲し、而して苦樂を感ずるにあり、故に吾人の道德的價値は苦樂の感情を離れずと雖ども、道德律は內的命令にして、單に最大幸福に達するの方便にあらず、後天的處世法にあらずして、先天良心の命令なり、故に隆々として大道の盛あるや、嚙々切々、不識的に仁義其中に布延して天闕なく、大道頹廢して後、人々皆内外の分、榮辱の竟を辨せざるに至るなり、

曰く、大道すたれて仁義あり、智慧出て、大偽あり、六親和せずして孝慈あり、國家昏亂えて忠臣あり、

堯は固より不孝にあらざるあり、而かも尙ほ獨舜を稱するは瞽叟なければあり、伊尹周公固より不忠にあらざるなり、而うも尙ほ獨逢龍比干を稱するは桀紂なければあり、涸澤の魚相啗し、沫を以て相濡すに溼を以てず、寧ろ江湖に相忘れんに如かざるあり、

曰く、天地は仁ならず、萬物を以て芻狗とみず、聖人は仁ならず、百姓を以て芻狗となす、天地の間は、それ橐籥の如きか、虚にして屈せず、動て愈出つれば、多言數々窮す、中を守るに如らず、

復歸の方法に付て曰く

虚に致ること極れば、靜を守ること篤し、萬物並び作る、吾以て其復を觀る、それ物の芸々

は、各其根に歸る、根に歸るを靜といふ、靜あるを命に復るといふ、命に復るを常といふ、常を知るを明といふ、常を知らざれば、妄作して凶し、常を知れば容る、容るれば乃ち公なり、公あれば乃ち王あり、王あれば乃ち天なり、天あれば乃ち道なり、道は乃ち久し、身を没るまで殆のらず、

孔子は仁義禮樂を以て天下を陶鑄し、而して老子はこれを絶棄す、故に或者以爲らく同しの際らずと、易曰く、形而上これを道といふ、形而下之を器といふと、孔子の後世を慮るや深し、こゝを以て人に示すに器を以てして其道を晦暝し、中人以下とて其器を守り、道のために眩されずして君子となるを失はざらしむ、而して中人以上ふれより以て上達す、老子は則ち然らず、道を明にするに志し、人心を開くに急なり、故に人に示すに道を以てして器を薄ふす、唯學者惟た器のみ知るときは、則ち道隱る、故に仁義を絶ち、禮樂を棄つ、道を明にするを以て道いふべのらず、言ふへきは皆其似たる者あり、達者似に因て眞を識り、昧者似を執て偽に陥る、こゝを以て後世老子の言を執りて天下を亂るものあり、而してこれを孔子に求むる者、常に其從入るところをさき

に苦む、二聖の皆己を得ざる所なり、これを全うすれば必ずかれを略するなり、
曰く、聖をたち智を棄つれば、民の利百倍す、仁をたち義を棄つれば、民孝慈に復る、巧をたち利を棄つれば、盜賊あることなし、此三つのものは、以爲らく文にして足らずと、故に屬するところあり、素を見樸を抱き、私を少くし欲を寡からしむ、

學を絶ては憂なま、唯と阿と相去る幾何ぞ、善と惡と相去ることいかに、

天下各其分に安すれば、則ち争はずして自ら治る、故に走馬を御けて田に糞し、其欲する者と以て人に示す、固に罪あるなり、而して其足るを足れりとせざるものは、其禍又甚ま、欲する所必ず得るもの、其咎最も大あり、匹夫身に一もあれば患必ず之に及び、侯王にしてこれをあまざば、戎馬自ら起らん、

曰く、罪は欲より大かるはかし、禍は足を知らざるより大なるはかし、咎は得を欲するより大なるはなし、故に足を知るの足は常に足るなり、

ストア哲學の道義論は、老子の觀察と酷似せり、即ちストア學派の大道を説て曰く、天地萬有を通して大法あり、乃ち合理勢力、理にしてこれを道といふ、此道は萬有を離れて存することなく、萬物皆この道に従ふ、而して有覺的に従ふことを得るものは獨人類あるのみ、故に人間は天然に従ふ生活をなさざる可ならず、斯くして理に従うて、理性に反對するものを制抑するを德行といふ、富貴利達等々總て外界に屬する快苦は毫も價値なし、要するに金錢名譽地位其他肉体的快樂に頓着せずして、只誠心誠意内心より確信を以て、理性即ち本然の性に従ふこと、これ至善なるものにして乃ち德行なり、而して情と競争してこれを制し、不動心を得るあり、これに於て人始めて安心立命の地を得るものとあす、換言すればストア哲學は本來我心に具はれる道を守り、自然に従うて從容自得する不動心を養ひ、外界の事物に頓着せず、こゝに安心立命の地を求めざるべからずと説けり、其ストア哲學は理想的人物と、老子の理想的人物と酷似せるものあり、曰く、智者は言はず、言者は知らず、其免を塞き其門を閉つ、其銳を挫き其紛を解く、其光を和

一其塵を同うす、これを玄同といふ、得て親むべからず、得て疏すべからず、得て利すべからず、得て害すべからず、得て貴むべからず、得て賤むべからず、故に天下貴となり、(未完)

所感を陳べて文科諸賢の教を乞ふ

B C 生

予は文學には門外漢にして元と文學の何物たるを解する能はず且文章に於ても日常所用のものさへ碌に書く能はずと雖世の文學者達の所作を見るふとは深くこれを好み、常に現今我國の文學あるものに就て疑を抱けり、而て諸氏の謂はるゝ如く文學は其時代の精神を寫すものなりとせば我國の爲め大に寒心せざる能はざるものあり、仍て今其疑問とする所を述べて大方の教を乞はんとす

文學者レ任務は崇高なる理想と高邁なる見識と雄大なる氣魂と忠誠なる熱情とを以て時世に媚ぶるなく名利に馳するなく毅然として一世に卓立し或は自然を歌ひ或は文明を批評し以て人間と社會とを善美れ域に誘導し良好の發達をなさしむるに在りと御自身等の謂はるゝを聞けり、然れども我文學者達は果してかゝる善良なる教育を吾人に施しつゝあるや否や、不肖は杞憂す、夫の所謂宣言の美にして實行のこれに伴はざる時弊に陥れるなきやと

抑日本民族は如何なる種族なるか、極めて氣早にして魂氣弱く小才利きて雄大は風なく輕卒にして自重は態度なき所謂島人根性の國民なり、試に思へ彼れ支那民族の思想は孔子の道にて組立てられ歐米人の腦味噌は基督の教理もて作らる而て我日本人の頭は何に依りて作られしや、先つこ

れを歴史に照すに畏こけれども 天孫降臨の詔勅を拜讀せば三千年の昔に於て兎も角も一種の國民的精神ありしことを知る而して其の今日迄の發達を遂ぐる間に於て佛敎儒敎及び西洋文明の輸入は大に日本民族の國民性に影響せり、凡そ他の勝れる處を探て己れの物とするは人間社會の開明進歩に大切あるものとにして大に獎勵すべき事あり、去りかゝ其間に於て日本人が誠に頼み甲斐なき小國民たることを表明せる事實あり、徳川氏の代程朱學盛に流行して孔子の思想が日本人の頭を支配せし時に當てや一も二もかく全くの支那崇拜にて自ら東夷の臣と稱する人さへ出づるに至り少數の國學者が慨然として唱へ一國粹論もこれを如何ともする能はざりき、然るに三十年前西洋の文明に接するに及んで豹變して西洋崇拜となり漢學者も國學者も支那を糞味噌に誹り豚尾國と嘲る點に於て相一致し甚しきはこれ迄支那文明を採用したりしを恥ぢて日本其物を賤しむる迄に至りぬ(今日もこの類の徒あり自ら毛唐としくして蒙古人種と別物なるが如く装ひ得ることて外交の好手段と謂へり) 思ふに社會急變は時に際しては過激の議論も現はるゝもの、且元來五のものを捨て、十に就くは尤の話し、西洋は思想は實際孔子の道より上等なりとするも昨日まで支那に師事せし日本が他の外國たる西洋を師匠に取りたることを忘れ何ぞや自分一人でえくくなりし面持し西洋を笠に着て支那に對し(否孔子の道に對し)いばり散らす様を見れば日本人は到底誰れかの弟子とありて其支配を受くるは人間の本分と心得居るものゝ如し、世界の一人類としては兎も角も苟も獨立の國民としての定見果して那邊にありある、これが若し他國同志の事かば予は呵々として咲笑せんとすあり、これ只一例に過ぎずと雖、元來人真似が先天的の本領にて

何に限らず他人の糟を嘗めて鬼の首取つた積りたる淺間しき根性抑は何處より來れりかあすか、畢竟釋迦孔子基督等の如き世界一方の文明社會を支配すべき大聖の出てこころの致すところなり、今うゝる浮薄なる國民の腦髓を確乎不拔からしむるもの果して誰の任ぞ賢明文學者諸氏にあらすして誰ぞや、予不肖と雖聖賢は百年二百年千年にして漸く出づるを知る者如何に日本此人あき只一人の聖賢を待つこと三千歳の長きに亘ればとて世間數多の文學者をして悉くソクラテスルーテル ロック若くは王陽明たれと望むにあらざると雖或は恐る諸氏の平生を以て見るにかゝる大覺悟を以て智徳の修養に従事せるの士甚だ鮮きを、これ予が疑問の一なり

露西亞の大文學者トルストイ氏は予が敬慕せる人の一人あり博愛の眞意を祖述するを以て本分とし人道を説きては白哲人種が半開未開の異人種を虐待壓倒するは文明の敵なりと曰ひ露國の外交方針に妨げありとて政府の譴責に遇ふては『予は世界人類の一人あり特に露國政府に對して義務を負はず』と絶叫せり何ぞ夫れ壯あるや、何れの國に在りても眞理を主張して世敗を矯めんとせばこの大決心なかるへうかす夫の平凡大臣や老耄將軍の頌徳的傳記經歷等を書くを以て事とする文學者とは固より同日の論にあらず、知りず我文壇にトルストイ在りや否やよれ其二

松村介石氏は文章に演説に例を史乘に取るに當り必ずこれを我國史上の人物に取らずして支那及び歐米の歴史に取り會て其故を告て曰はく日本の歴史上には世界的國民の鑑となすべき偉人なしと予はこの言に服する者なり、夫の大閥の如き日本史上の人として、或は最大の人たらん然れとも其兵を朝鮮に出すや征戰の困難に逢て夙に師を罷めんの志ありしも中道に逝去せしたため僅に根氣

無し汚名を免れし者これを世界的大々的偉人ありとして壯に謳歌する如きは大國民を啓導するの道にあらず、尙これに他の數輩を加へて世界百傑傳中に收め小供に類する人物を世界百傑の中に加ふるに至りては予は作者の常識すら問はざるを得ずこれ其三

凡そ自國を歌ふもの極めて其聲を大にするは以て國民自重尊大の風を養ふべく又極めて悲觀的に自國の微小を慨歎するは國民をして奮發興起せしむる所以にして二つあから可なりと雖其用大に思はざるへかゞざるのあり、強ちに或は豐大閥を寰宇無双の大遠征家ありと稱揚して歴山帖木兒れ壯舉を語るもの少きは如何、或は蒙古の來寇を寫してはこれを史上最大の入寇とかし彼のモスコを燒きたる露國の慘憺を寫さず、數百の戰艦を指して海を蔽ふと謂ふは尙可なるモクザルキセスの希臘侵入を知らざるもれ、如きは如何、富士山を世界第一の高嶺なる如く謳歌してヒマラヤ アルプスの莊峻を紹介せざるは如何、奈良の大佛大坂城計り大建物れ如くに歎稱して何故に萬里長城スエズ運河の工事を追稱せざる、若し夫れ近江八景海島三景の如き箱庭的風景を自然の絶勝ありと騒がは大陸の山河腹を抱へて笑はん、山陽れ詩や貫之れ歌が大々傑作ありと謂は、白樂天ゲーテの徒は跣足で遁げ出すへし、世界的大國民の文學者としてその言ある抑正氣の沙汰ありや否やよれ其四

小説の出づる日に月に益々多し而て其中雄大あるもれ果して何にかある高尚なるもの果して何にかある優麗あるもの果して何にかある、作者常に曰く小説は世教の要具ありと、君子は曰ふ今の小説本には重税を課せんと、予は寧ろこの課税案に賛成するものあり、さればとて今日の小説家

に悉く大傑作を望むにあらざ、只思へらく放蕩息子や墮落娘は醜行を寫し又は小細工人の傳記を講談するが小説家の能事にあらざるべし如何これ其五

文學者の中には又所謂漢學者國學者あり、漢學者が朱子に註に對ふこと馬車馬の向一天ある如く唐宋以前の文章を讀むも清れ新聞を讀み能はざる如き輩は數百年前に入用なりし人元より論するに足らざるのみ、國學者と稱する輩が死文法に汲々として活文法を知らざる如き進歩も創造も棚に上げ源氏物語大明神枕草紙大權現を念し南無妙古今集狂となりて進歩せる思想を數百年前に引き戻さんとする如き陋國學者も亦同穴の狐のみ、茲に於てか漢文廢止及び羅馬字會の如き不條理淺薄なる議論に向てさへ秣序ある反駁を試むる能はず、宜なるのな彼等は井中の蛙、しかも其痴なるものなり何を以てり云ふグーテ曰はく外國語を知て始めて自國の國語を知ると然り實に彼の國學者實に未だ日本語を知らざるなり況んや漢學者の漢學に於けるをや、これ等の人に依り東洋文學の未だ隠れたるを世界文壇に耀如たらしめんと望むは木に依りて魚を索むか如けん如何これ其六

文章の講釋を謂ふもの亦國受漢學の學者に多しとす御自分の御慰みは唐宋一天張も源氏枕草紙醉眠毛御隨意かれと今人或は西洋の粹を汲み東西折衷は新機軸を出すものあれば則ち古雅からず趣味無しとし或は慷慨悲言するもれば無骨無風流としてこれを斥け只管らに八大家文章範範の模型に入れんとし若くは源氏草紙以下乃舊套を墨守せしめんとす曰はく彼は直譯文あり曰はく雜誌口調ありとこれ或は慎むべしと讓歩するも少なくともうりけり盡し何人にも解らぬより實用丈

けにて増しあふすや、此れ如くなれば知れず改進進歩何に依りて得んとはする、人情を歌ふこと平安朝の如くあふざれば審美あふざるか世態を論し風教を口にせるよりも草廬に世を遁るゝを可かりとするや、抑亦文學とは何時も角も世は大平なり若くは古は美なり今は澆季なりなど此み歌ふべきものありや、筆を弄するも事にこそ依れ此の如くかれは取りも直さず世を愚にするもの、さては世教の上に無益有害れ仕事あふすやこれ其七

書生を論じ併せて校風振起策に及ぶ

冠木堂主人

をも書生とは如何なるものなるは余輩今爰に縷述せずと雖も諸子は皆既に知悉せらるゝ所なるべし、然れども一言にして之を蔽へは自己の所信を守りて天下に施し學を講道脩め身を以て國家に許しその大任に當るべきものを是を之れ書生と稱すべきあり、故に書生たるものは身非禮の境に游ばず、耳非禮を聞かず、目非禮を見ず、口非禮を言はず、知れば必ず行ひ以て知行の本體に終始して社會の儀表とあり社會の先覺者たるべからず、苟も社會に感化せられ社會に誘惑せられ世潮混濁の渦中に浮沈すべきものにあふざるなり、是を以て時れ今古を論せず洋の東西を問はず凡そ社會の活動して活氣ある時世は是れ必ず書生の勢力社會を壓し天下を誘掖せる時代たり、之れに反して書生が社會の勢力に壓せられ天下に誘掖せらるゝ時は是れ社會が腐敗墮落して暗黒界裡に彷徨せる時代なり、概して之れを言へば書生が勢力を有せざる社會は腐敗墮落の社會にして書生が勢力を有する社會は進歩開明の社會たるあり、試に看よ我邦文化文政の際に當り

て日本の社會は如何に腐敗せしか、如何に墮落せしう、幕府の威權は強弩の末となり、武士道は全く其の光明を失ひ、道義地を拂うて空しく、天下は徒に泰平を謳歌して謠曲游藝を事とし西鶴春水の徒吻りに歡待せられて淫猥風をなし卑褻俗をふしし時に在りては書生は青表紙と呼ばれ穀潰しと嘲られて笑殺せられしにあらざるや、翻て書生が我が社會に貴重せられし時にありては我が國家は將に進歩開明に向はむとせし時たり、國民は浦賀の砲聲に三百年の迷夢を驚醒せられて狼狽爲す所を知らず國家の危機焦眉に迫り上下騒然たる際に當りて之れが原動力となり幕府をして大政を返還せしめ施設經營に任に當りたるもの吉田松陰橋本左内西郷南州佐久間象山藤田東湖等を首とし總へて天下の書生の力に外ならざりしあり、斯く維新前後にありては書生は社會の先覺者となり天下を率ゐて開明の域に進ましめしあり、彼等が巷間に天下を論じ國家を談せしもの之れを廟堂に用ゐしむるの大勢力を有し大氣格を具備せしあり、然らば今日は如何我が社會は會生を容れ書生は社會の指導者たるを得べきの、余輩は思ふて此に及べば痛嘆大息以て國家の前途を憂へずんばあふざるなり、社會が書生を視るに市井の無賴漢を以てし書生とは無職にして唯に父兄の財囊を絞り游飲之れ事とするものとかい書生生活より轉じて衣食の途を求めんと欲すれば書生上がりと稱へて社會も之れを嫌ひ銀行も之れを厭ひ天下を擧げて之れを指揮するにあふざるや、是れ畢竟社會腐敗の現象たるに相違なしと雖も書生たるもの亦其れ性格を有せず其の神聖を維持する能はずして社會の爲めに壓せられ而るも書生自か自ら自らを卑ふするの致す所たらざるばあふざるなり、今日の書生の如く士氣なく士風なく性格あきはあふざるべし、漫りに天下を論じ國家

を談じ豪飲放吟屢々狹斜巷に出入りて磊落と誇り試験の爲めは醜醜し成績は爲めに致々する如きは其に語るに足らずとなり自から以て維新前後の先達に比し他日國政を料理せんかと、嚶言を吐くものにあらずんば他は即ち卒業免狀を握り早くホムを形造り衣食の途に安んぜんを欲し教師の追從敬薄に頸筋を腫かし試験前には青瓢筆の如くありて教師の講義を寸分違はず暗誦せんと力むる蓄音機の如きものに外からざるあり、彼等にして國政に與るを得べくんば沐猴も冠して朝に立つを得べく犬馬も社會を組織するを得べし、後者の如きは一身の利潤を計ぐんとするもれ固より取るに足らざる愚物なり、此れ如きの書生豈能く其の品性を保持し社會に貴重せられ社會の先覺者たるを得んや、

夫れ天下の學生は滔々として皆斯の如し是を以て余輩は高等の學府たる四高校の健兒に望みを屬し諸子の力に俟つもれあるや一二にして足らざるなり、四高校は北陸幾多の學府中最最高の學府たり善美の校風を養ひ以て少くとも北陸幾多書生の好模範たらざるべからざるあり、然り而して此校果して如何なる校風ある、若し之れありとするも余輩は良好にして天下に則かしむるに足るものありとは決して思惟する能はざるなり、故に余輩は今諸子に望むに善美の校風を振起せられん事を以てするなり、余輩は尤も諸子を敬し尤も諸子を愛するが故に、又諸子に對して囑望の多大なるを共に諸子に責むるや益大ある所以なり、我れ豈好んで言をあすものからんや時世は急寔に止むを得ざるもれあればあり、

凡そ一國には一種の氣風特質即ち國風なるものあり、一家には一家の家風あり、箇人には其人特

殊の氣質あり、而うも之れあるが爲めに他に對峙して以て各國各自の品性を維持し其れ地位を保全し得るあり、天下の事小大とかく皆然らざるあり故に又學に學風あり校に校風ありて存ざるなり、由來四高校の校風なるものは果して如何、既往幾年天下嗤笑の學府となりば奈何、默考追想仔細に之れを窮極すれば惡又醜又醜を加ふるあるのみ、然れども之れ固より既往の事責を現時の諸子に歸すものにあらざるあり、唯諸子は不幸にして之の醜惡なる歴史の後繼者たりしもの否寧ろ幸にして四高校に遊ぶもの校風を改善し士氣を振興し以て既往の汚名を雪ぎ將來精美の歴史を創始して後進百萬の青衿の爲めに好摸範たらざるべからざるなり、家貧うして良妻の貞操益顯はれ國危うして忠臣は義烈彌壯なるは青史明うに之を表す四高校既往の醜歴史は又當に諸子の爲めに幸なるあらんや、思ふに今や四高校は漸く其れ光明を發輝せんとす此の際に當りて又益努めざるべからず、某校の如く特種の遊技に發達せりて決して賞すべきにあらず、又所謂欽拳政略盛んありとて喜ぶべきにあらず一技一事の顯著あるは即ち之れ他技他事の幼稚なるを表明するに外ならず、總じて完美の發達を來すに當りては特殊に一事一技の顯著あるものあるべきの理あり、退歩の時に當りても亦然り、知らず今や四高校は一も特殊に顯著なるものあり之れ果して進歩か將た退歩の退歩ならば逆行せよ進歩なれば猛進せよ、

一國國風の由來する所や遠し、一は人種の先天的に固有し來れる天性に因り、一は氣候風土の感化により、他は政治文學乃至宗教上より影響し來り幾多の星霜を経て發達伸長し來りしもの、一朝にして之れを變せんとする決して容易の業にあらず必ずや一大革命を斷行せざんはあるべから

ず、四高校に於ける校風の如きも亦之れと相類す即ち毎歲校に入るの新進は各地特殊の校風に養成せられたるの諸子各自の異なる所あるや必せり一旦にして之れを替へしむるは固より困難なるものありと雖も是等新進の士は中學に於て概して尤も愉快に尤も淡泊に尤も神聖にその生活を送り來りしものなれば強制的に善美の校風に化せしめんと欲せば蓋し意外に好果を收め得るや疑ひなく、之れを爲さんと欲せば須らく寄宿舎の完美に待つの外なし而して新入學生は一年間は強制的に入舎せしめざるべからず而のも寄宿舎は全く自治制たらしむるべし、押へんと欲せば益昇らんとするは物の性なり校則を以て押ゆるが如きは尤も非なり不規不律は徒は學生をして相互に相制せしむべし之れ最良れ手段たり寄宿舎制に就ては尙ほ言はんと欲する所あるも四高校は不幸にして此の強制的寄宿舎を行ふ能はざれば今暫らく之れを措かん、詮ずるに諸子は學校に於けるの脩養は勿論一日も之れを忽にすべきにあらず然れとも教鞭を執るの士は古來より技藝の師たるもれ多く人師たるべき高德の士鮮きを忘るべからず之れを思うて校に昇り退いては校舎以外に己れ自う其の靈性を鍛冶するに努めざるべからず、縦令人師其人に乏しと雖も智を進め學を達するに於ては學校内に於ける教師を以て足れりとすと雖も靈性の鍛冶に至りては學生自かく脩養の功を積まざるべからず、各自脩養の功を積み靈性鍛冶の効を致さば校風は自う振起すべく士氣は自う發揚すべし、それ工夫如何に至りては愈々多々なるべし、覆載は廣くして極まりなし市塵熱鬧の俗裏か脱し杖を郊外に曳かんの造化自然の妙接するもの觸るゝもの皆優たり雅たり宏たり壯たり以て師とあすべく以て友とあすべし日積苦學の鬱煩は忽然として融和し去り光風霽月の襟

懐たらずんばあらず、或は静夜登山を企て以て天地の大を知り其の歡を壯にすべく健脚以て遠征を行ひ鉄腕以て短躬を操縦する皆是れ靈性鍛冶の一端たらずんばあざざるなり、或は書窓に端坐して英雄の傳記を読み聖哲の至言を味ひ鉛肝服膺して以て知行の本體に達はざるを勉め名教義理に協はざるの書は荷くも之れを目にすべからず諸子幸に思を是に致さば校風何ぞ振起せざるを憂へんや、士氣何ぞ衰へたるを悲まんや、請ふ諸子それ之れを勗めよ、妄言多謝々々、

雜 錄

年 の 始

浦 井 恒 堂

本年初刷の北辰雜誌を出すに當り聊か年の始に就きて述へむとす勿論先頃の誌上に北條校長か曆法に關して講述せられたるか是はむねと天文學上より論せられたるをれば今余は専ら歴史的に新年の變遷に就きて述へむとす

十二月三十一日夜半時辰儀か十二點を報すると同時に舊年を送り新年を迎ふるてふことは海の東西を論せず一般の俗とかり何人も之に對して異議を唱ふべきにあらざれど歴史を調ふる時は思の外的事實を發見するものにて此俗は西洋にても比較的に新しき事にて英國の如きは今より僅か二百五十年前に於ては此風行はれず三月二十五日を以て年の始と定め居たりしに一千七百五十二年英國政府の一篇の布告を發し爾來二月一日を以て年の始と定むること並ひに同年三月二十五日

を直に四月六日と改稱すべき旨を命じ此命令に依り今日の如き制とあり來れるものあり然るに當時此政府の命令は甚しき非難攻撃を喚起し一時全國騷然たる有様を呈出せりといふ其非難は種々の點より來たりしもけにて或は一月一日を以て新年となすの理由を解せず單に政府か奇を好みて舊慣を破壊する者と考へしもあり或は三月二十五日を四月六日と改めしため空しく十一日の子と損失したりと考へて返却せむことを絶叫するあり就きては次回の議員撰舉に於て此十一日を返却し舊制に復せむことを豫約せし交補者は意外の多數を以て當撰したりとの奇譚あり又頑固なる宗教家は論して曰く抑も三月二十五日のインカーネーションの祭(拉丁のイン及びカルニシユ即ち肉より出で基督か人間の形となりて現はれし日)は基督的年の始となすに最も適當なるに拘はれず之を廢して異數的の制を用ひんとするは暴狀極まれり我等ハ法王グレゴリイ十三世の歡を得んうために我々の年を變更する能はずと如此有様ありしを以て此命令發布の後と雖も約十年計は三様の曆法並ひ行はれしこと恰も我邦に於て所謂新曆舊曆並ひ用ひられし如く政府命令の如く一月一日を以て年の始となすれば法をニュースタイルと呼び舊法をオールドスタイルといひ依然此法を用ひて得意を催すれ輩少からざりきこと

されど當時に於て英國人民を擧げてインカーネーション祭(三月二十五日)を以て年の始とあし居りしにあらず英蘭の農民は九月二十九日ミケルマス祭(セントミケル忌日)を以て年の始とする習慣なりきこれ其頃は恰も秋獲を終はりたるごきにて地主へ年貢を納め諸種の支拂を爲す等も便かしたためとす蘇蘭は英蘭に比して氣候も寒冷にて收穫の期も遅るゝにより十一月十一日マルサン

マス(セントマルチンの忌日)を以て年の始とせり又米國なる英國殖民地にては一般に四月一日を以て年の始とせり

されは年の始は全く人民の便宜上より定まり決りて一定の意義あるにあらず之を古史に徴するに猶太教徒は一種の太陰曆を用ひ年の始は秋分後最初の新月なり故に恰も基督教徒の行ふイースター祭(耶蘇焼刑後復活して昇天したる祭)か春分後最初の満月の日なるのため毎年日を異にするが如くありき太古の希伯來人は大麥の熟する頃の満月を以てパースオボ(是はモイセスの定むる所にして希伯來人の埃及より逃れたる紀念の祭)を祭を行ひ其日を以て年の始とし新穀を以て神を祀れり若し氣候の工合によりて大麥未だ熟せざる時は一ヶ月を加へ其月の満月に於て此祭を執行し其日を以て新年としき回々教國の新年は毎年移動し例へは一八九五年に於ては中冬亦れとも後十五年を經一九一〇年に至らば中夏となるなり

蓋し我儕の用ふる太陽曆は其源を埃及に發し羅馬のシーサル之を歐州に行ひ後法皇グレゴリーの改正を經て今日に至りたるものにて埃及國は人の知る如く年々ナイル河の洪水ありて最も規則正しく毎年七月下旬に始まり冬至の頃に至り終る故に埃及の僧侶は毎年洪水の始まる時に夫に於ける太陽の位置一定不變ある點に着眼し終に今より數千年の昔に於て太陽が天空を一周するに三百六十五日四分の一の時日を要することを測定し之に基きて年々洪水の始まる七月二十日を以て年の始とし一年を十二月に分ち一月を三十日とし一年の終に五日を加へたり此埃及に於て行はれたる太陽曆は一年を三百六十五日と定めし一日の四分の一を捨て去りたるため四年間一日の差異を

來すを以て四年後れ新年は七月二十日の一日前即ち七月十九日となり八年後の新年は七月十八日とあり一千四百六十一年の後に至り復た七月二十日を新年となる埃及人は此時期を名けて *Sol's Period* としへりされど此新年が狂ひては甚た不便なれば埃及の農夫は毎年洪水の始まる日を以て新年となし居たりといふ此太陽曆カシーザアの採用することより多少の改良を加へられて所謂 *ジュリアンカレンダー* となれり

太古の羅馬人は一年を十月に分らしヌーマ、ホムピリウス王の時改めて十二月とし一年を三百五十五日とせり

月名	日數	月名	日數
Martius	31	September	29
Aprilis	29	October	31
Maius	31	November	29
Junius	29	December	29
Quinctilis (Julius)	31	Januarius	29
Sextilis (Augustus)	29	Februarius	28

マルチウスは羅馬軍神マースの祭此月にあるを以て名く今日の *March* 是より出づ
 アプリリスは拉丁動詞 *aperire* to open より出づ此月樹木芽出て花咲けはあり

マイウスは *Mai* 神は祭此月にあれはあり

ジュニウスはジュノー神の祭此月にあるに因るといひ又羅馬の壯丁(ジュニオル)の名譽のた

め名けたりともいふ

クイクテリスは第五月の意かり後ジュリウス、シーザアは此月に生れたるを以て此月を改めてジュリウスと稱せしめ其より今日のジュライとあれり

セツクスチリスは第六月の意なりアウガス帝シーザルを學び己れの生れたる月なるを以てオーガストと改稱せしめたり

セプテムバア以下デセムバアまでは第七、八、九、十月の意なり

ジャンニユアリウスはジアヌス神は祭此月にあれは、

フェブルアリスはフェブルア神の祭此月にあるを以て名く

羅馬の年の始は今日の三月即ちマルネウスなりし紀元前百五十三年よりはジャンニユアリウスを以て羅馬統領(コンサル)就任することゝあれり今日ジャンニユアリウスを以て新年とあすは實に此制に基くなり

以上の如く羅馬曆に於ては三十一日の月四箇二十九日の月七箇廿八日の月一あり一年三百五十五日と定めたる故是を天文と符合せしめむため毎二年に廿二日の月を廿三日の月とを交るゝ閏月とて附加せり而して此曆法を司りしは大高僧(ポンチフ)の職務なりければ共和政治の腐敗するに至りては高僧等其職務を濫用して猥りに一年の日數を増減し己の友のコンサル在職の時短縮しに年を伸張して不當の閏月を置き之に反して己の嫌惡するコンサル在職の時猥りに年を短縮しければ甚しき紛雜を生ずるに至り收穫の神セルスの祭は中冬に當り秋に於て執行すべきヲイタム

ナリア祭は春に於て行はざるを得ざるに至りシーザアの時に於てはジャンニユアリウス一日を以て就職すべきコンサルは實際既に前年オクトバア十三日を以て上任せり如此有様なりしを以てシーザアの埃及遠征に赴き同地に行はれたる太陽曆を見るや之を採用して羅馬の曆法を改めむと欲し歴山府の學者ソシゲーネスと謀り紀元前四十五年之と斷行し同年フェブルリユアリスの終に一ヶ月クローベンバアの終に二ヶ月の閏月を加へ爲めに紀元前四十五年は四百四十五日といふ驚へき長き年とあれり因て此年を呼ひて *The year of Confusion* といふ

如此してシーザアの採用せる太陽曆は之をジュリアン、カレンダーといふ此曆法に於ては一年を三百六十五日六時間とし毎四年に一日の閏月を置く制なる天文的の一年は三百六十五日五時四十八分五十秒あれば年々十一分餘の差を生ずるを免れず四年間に一日を加へ行きては年月の積るに隨ひて頗る注意すべき差異を生ずべきなり

但しジュリアンカレンダーは從來世に行はれたる曆法の内に於て最も完然なるを以て歐洲一般に行はれしか前述の一年に於ける十一分計の僅少ある差異も漸次積りて一千六百年代に至りては既に十日の差を見るに至れりされと今日とは違ひて未だ科學の發達せざりし時代あるを以て之に對する非難は主として宗教界より現はれ彼等は宗教的祭日を定むるに當りて季節を失するの不都合を鳴らし基督教徒總會ある毎に曆法改正の議出しの種々の事情のため容易に行はれざりき終に法王グレゴリイ十三世の時改正を斷行することゝあり一千五百八十二年二月二十四日を以て *Inter Gravissimas* とする告示を發し同年の十月四日を改めて直に十月十五日と稱すべき事並ひに將來

に於て同様の異算を生せざらむむかため毎世紀の終れ數か四百を以て剩餘なく除き得る年に限りて閏年とす(一六〇〇年二〇〇〇年二四〇〇年の如し)其他の年は之を平年とすへきことを命ぜり(例せば昨一九〇〇年は四を以て除し得れば閏年にあるへき筈なれとも世紀の終なるを以て此法によりて平年ありき)此法に依れば天文曆と通用曆との間に五千年間に於て一日の差異を生ずるに過ぎずといへは殆んど遺憾なき者といはざるへからず不幸にして此布告に訪へる改正理由書は甚だ不完全のものありければ一時種々の物議を招きしこと前の英國の條に於て述たるが如し此法王の命令の期定の時日に於て實行せられしはた、以太利西班牙葡萄牙の三國のみならず佛國にては二月遅れ同年十二月十日を改めて十二月二十日として改正法を採り瑞西國の内舊教を奉ずる聯邦及び西班牙領和蘭に於ては翌年改正を行ひ波蘭は一五八六年匈牙利は一五八七年を以て實行せり獨逸の内にては舊教徒は早くより新曆を用ひたれども新教徒は頑として舊制を守りしるば有名の哲學者ライブニッツは深く之を憾み懇ろに改正の利益を説き専ら渠の力により一六九九年に至り始めて全獨逸が新曆を用ふるに至れり同年丁抹和蘭之に倣ひ一七〇一年瑞西の新教徒一七五二年英國之を採用し一七五三年瑞典に行はるゝに至りグレゴリオの發令以來約二年の後始めて西歐洲一般に行はるゝ事となれり今日に於ては獨り露國のみ依然としてジュリアンカレンダーを行ひ一五八二年の頃は十日の差異ありしか今や十三日の差を見るに至れり故に露人より外國に向け書狀を發するときは其日附は次の如くせざるへからず

April 13 或は June 27
July 9

佛國大革命に當りて曆法も亦た一大革命を蒙り一七九三年佛國議會は耶蘇教を廢止すると同時にリバブリカン・カレンダーあるものを發布し共和政治の宣言せられたる一七九二年九月廿一日の翌日を以て共和國第一年第一月一日を定め一年を三百六十五日之を十二月に分ち一月を三十日とす因て平年には五日閏年には六日れ剩餘を生ずるを以て之を年の終に置きて Jours complémentaires (補足の日即ち閏日)といひ或は革命時代に横行せる下等勢働者(サンスキュロート)の名譽の爲めに Sansculotides といひ名け第一と Fete du Génie(天才の祭)第二日を Fete du Travail(勢働の祭)第三日を Fete des Actions(勤勉の祭)第四日を Fete des Récompenses(報酬の祭)第五日を Fete de l'opinion(輿論の祭)といひ閏年に於ける第六日を Fete de la Révolution(革命の祭)といひ毎四年を Franciade の名け其第三年を閏年とす是は希臘のオリムピアッドを學びしあり月は從來の稱號を廢し其月固有の現象を以て名とす即ち年の始(我九月より十月) Vendémiaire(葡萄酒の月)に始まり Fructidor(我八月より九月にして菓月)を以て終る酒月露月霜月雪月雨月風月芽月花月牧月收月暑月菓月これなり又古希臘の曆法を學ひて一月を十日宛の Decades に分ち第一デカードの第一日(Primidi)第二日と呼び第十日(Decadi)に終り此日を以て休息とす

此共和曆は共和曆第十四年(一八〇五年)に至り奈翁に因り廢止せられたる後一八七一年普佛戰爭の後巴理に於て社會黨の蜂起するや再び共和曆を行はむとせしむるとも實行せられずして止みき我邦にて太陽曆採用となりしは明治五年十一月九日の事にて同年十二月三日を改めて明治六年一月一日とせり當時發せられたる

勅語に曰く

朕惟ふに我邦通行の曆たる太陰の朔望を以て月と立て太陽の躔度に合す故に二三年間必ず閏月を置かざるを得と置閏は前後時に季候の早晚あり終に進歩の差を生るに至る殊に中下の段に掲ぐる所の如きは率ね妄誕無稽に屬し人知の開達を妨るもの少しとせと蓋し太陽曆は太陽の躔度に從て月と立つ日子多少の異ありと雖も季候早晚の變あり四歲毎に一日の閏を置き七千年の後僅に一日の差を生するに過ぎず之を太陰曆に比すれば最も精密にして其便不便も固より論を俟たざるあり自今舊を廢し太陽曆を用ひ天下永世之を遵行せしめん百官有司其れ斯旨を体せよ

同時發布布告(太政官)

一 今般太陰曆を廢し太陽曆御頒行相成候に付來る十二月三日を以て明治六年一月一日と被定候事
一 一ヶ年三百六十五日十二月に分ち四年毎に一日の閏を置候事

一 時刻の儀是迄晝夜長短に隨ひ十二時に相分ち候處今後改て時辰儀時刻晝夜平分二十四時に定め子の刻より午刻迄を十二時に分ち午前幾時と稱し午刻より子刻迄を十二時に分ち午後何時と稱し候事

一時鐘の儀來る一月一日より右時刻に可改事

一 諸祭典等舊曆月日を新曆月日に相當し施行可致事

されど右の改正にてはジュリアンカレンダーの制なりしを以て更に明治三十二年五月十日の勅令出ることなれり勅令に曰く

神武天皇即位紀元數の四を以て整除し得べき年を閏年とせ但し紀元數より六百六十を減して百を以て整除し得べきもの、中更に四を以て其數を整除し得ざる年は平年とす
是に於て言ひ現し方こそ違へグレゴリアンカレンダーの實行せらるゝ事となれり

元元木阿彌考

紫

影

一たび勢を得て時めきたる者の、久しかたらずして、其擬勢を失ひ、はりあき元のさまに立ち還る、なごやうの事を、世の諺に元の木阿彌とぞいふなる、此語の起源につきて、くさくさの説ともあり、具原氏の諺草(元祿十四年刊)に曰く、「筒井陽舜坊順昭大和國郡川城主 信長と同時の人二十八歳にて病死す、此時其子伊賀守定次後統 順慶わづかに一歳也、順昭遺言して、三年の間は、卒去をうくし置くへしとありければ、木阿彌といふ盲人、其形順昭に似たる故、他國より使者來る時は、かの盲人をほのぐらさ所におき、順昭は病中の躰にもてあし、相見せしむ、定次三歳の時始て裘を發す、こゝに至て木阿彌なりし事を諸人知れり、今俗の諺にもこの木阿彌といふ事、是より起れり」とし、文末に新考の二字を註して、稍其發明を誇るもの、如し、この説、小説的に面白けれど、其出處も定かからず、且はこれより以前の書に木阿彌といはずして、木庵木椀などいへるもあれば、あたゝく信を措き難し、

寛永頃の刊本七人比丘尼に

此頃都にて世を榮は、御身と妾が如く、夫婦めでたかりしを、其男何との思はれけん、浮世れ

あだなる事を、あけくれ歎き、後世の營みとのみ、深く思ひ入れ、たびく女にいとまを乞ひ、終には髻切り侍りけり、餘り道心深く侍りしまし、一切の五穀をくらはし、五穀といへるは、鋤鍬のさきにおりし虫れらをつき切り侍り出でくる五穀なり、然らばもいては、殺生にもなりぬべし、又は冬んばいのあのみとありなば、工夫の障ともなるべし、まうのみならず、おんざん大師は、一飯の米は又油一杯の辛苦によると宣へり、此れ如きれもろくの業ある五穀をかんトきし、徒らに暮らさんよりは、只木食をと思ひあて、木實蓋の實ばかりにて、月日を送られければ、世の中にもてあし侍る事、斜めに過ぎ侍りしかば、後には木食の御坊とも、又は木阿彌佛陀と申しける。しか侍る故に、この事天下にかくれなくありつるが、何ぞのしつらん、心も弱り、年老いぬるに従ひてやらん、木食も懈怠かちにすなり侍りし時、此木阿彌馴れにし妻きいて、眞は末世の佛にて侍るもれをと思ひ、此御坊を折々毎にどぶらひ、こまやかに次第々々に度重なりて、時々ふるごこのつれづれをも語り、袖元しほりしが、餘りの親しみ深くなるまゝに、過去宿障のいまだはてやふぬにて、終にはもろく、見にくくなると、沙汰せし事あらはれて、既に夫婦けりたらひ二度ありしれば、入々嘲り、京洛中れ物ざたにて侍り、たゞ元の木阿彌とは、これより申しならはせしぞうし、

これも誠草と共に、おもしろき説なれども、作物語中れ枝話なるからに、うけふれず、寛永拾五年刊行の清水物語には、今時の人の學文するは、生れ付の直る程磨きたるもれなき故に、本のもあんにてこそ候へ」とあり、順慶あんは木庵あるべし、西鶴山松等元祿以後の書にて、大抵元

の木阿彌とれみ見ゆ、中江藤樹の翁問答に、「俗儒は訓詁ばかりを耳に聞きおほえ、口にいふまでにて、迹の精義をさへ辨へざれば、まして心をとめて師とするふとは、夢にも見ざる故に、四書五經をよむと雖、訓詁を記誦して、口耳のうざりとあすばかりにて、心はもとの木椀に、自滿れ垢のしみつきたるものなれば、益はあくて、却てあしくなり候事、尤にて候」とあり、あんに元の木椀といへるが、恐らくは此諺の本義なるべし、黒に朱に蒔繪のかたうはしく、取る人の顔ももうつるべうり塗り磨きたる椀も、月日ふるまゝに添はげ、木地あふはれて、再び元の木椀とあるにたとへたるにあらぬや、之より先にいでし犬筑波集に、

今ぞたふとき御成なりけり

箔はげて本れ木にある古佛

れ句あり、こは諺を用ひたるものと明かに断定し難けれど、集中往々諺の心をうすめて作れる句ども見れば、これもやがて其類にて、元の木佛とやうの諺を、下にこめたるにはあふぬか、果して然らば、これも元の木椀と等しく、紫磨黄金乃膚の色たふとく、渴仰の眼に眩ゆかり一三世は諸佛も、箔剥げ粉落ち、埋め木節穴の痕、ありくをがまれて、淺ましき御姿とありはて給ふにて、木椀と同じ心なり、但元の木佛といふ諺を、そのまゝ用ひたる例は、未だ見當らず、或はこれも亦木椀と聊轉して、かく句中に取り入れしにや、いづれにもあれ、此諺の本義は、必ず此に説明せる如くにて、諺草七人比丘尼の説は、諺によりて後に附會せし話柄とおぼしく、彼の彌次郎兵衛北八御宿明石入道之墓、さては尾張名所の一つなる數にも香の物の類なるべし、

カント倫理學主義

K

N

生

カント先づ吾人が普通に善行と稱する者に就きて之が哲學的の意義を定然んとせり、
問、如何なる行爲が善行なりや、

答、善行とは善意 good Willより一てなせる行爲是れあり絶對的に善と稱すべき者は唯善意あるのみ才智、藝能、勇氣等の如き天賦の美質も富貴、官位等の如き人間の幸福と又節制、克己、深慮等の如き普通に美德と稱するものも之れに伴ふ善意を以てせざれば皆大惡を本たふざるはなし、

問、然らば則ち善意とは如何なる者なりや、

答、カントは大に幸福主義を嫌ひ極端なる嚴肅主義を主張して曰く善意とは善き結果を生ずることが能く目的に適するところ其結果如何のために善なるにあらざる善意唯善意なり

更に之を説明せば善意とは義務に従ふ意志あり義務に従ふと云ふとは是れ義務なりと知りて義務に従ふの謂なり義務のために義務を爲すなり各人が本來の嗜好より不知不識の中になせる事はいりに義務に合ふも善行と稱するを得ざるあり例之生は人の義務なれども生はこれ義務なりと知りたるにあらず單に死を恐るゝ情よりして生を欲するは善意にあらず、

是故にカントは説く如くせば善き天性善き習慣を有する人は善行を爲すこと少く聖人は善人と稱するを得ざるに至らむさればとてカントは聖人は尙ふに足らずと云ひにあらざるカント

は口早に道徳的善 moral good に就きて論せしかり善き天性善き習慣は花の美なるが如く月の清きが如く今の倫理學者は之れを稱して自然的善 natural good と云ふ後者の前者より尙ふべきは勿論あり、

問、然らば義務よりなせる行爲とは如何なる者なりや、

答、義務よりなせる行爲とは其結果如何を顧みず唯動うすべからざる普遍法を尊敬し之れに由りてなせる行爲なり故に義務とは此の普遍法に對する畏敬の念なり、

問、普遍法とはいのなる者なりや、

答、普遍法とは吾人が道理によりて人はのくあらざるべからずと自覺する一般不變の理法にして一身の利害より來れる者と大に異なりされはこそ吾人が之れに對して深く義務即ち畏敬の念を有するなれ一身の利害より來れる者に對して吾人は inclination を有することあるへけれどもかくの如き畏敬の念を持つることあるべし、

故にカントは吾人に教へて曰く、
汝の行爲が萬人に對して普遍法となりうるが如くに行へ、

瑣 談

武 藤 元 信

鳥津氏の藤原氏と稱せられし事

種々の事情によりて、他の姓氏を稱せるもの、鎌倉以後尠からざりき。鳥津氏は有名ある舊家な

り。なほ近衛家の許を得て、藤原氏と稱せられし事あり。慶長十一年、呂宋の船舶の彼損したるを、新造してあたへられし書に

日本國薩州刺史藤原義弘、謹復書于呂宋國王即敝洛黎時君迎足下(以下略)

丙午正月

藤原義弘

とあるが如き、一證とあすに足れり、上野公園なる東照公御社の前に、島津家より献ぐれし銅燈籠には

慶安四年四月十七日

薩广侍從 藤原光久

とあり。又日光ある大猷院御靈屋の前に、同家より献ぐれし石燈籠には

承應二癸巳年四月廿日

薩广少將 源朝臣光久

とあり。此間の年月を數ふれば、二箇年なり。此二箇年の間に、更に源氏と改められしこと、疑ふべくもあらず。かこれ、この燈籠どもを見しは、明治二十六年の夏なりき。今も猶ほ儼存せるあらん。

二 一條禪閣の御名乗

往年桃華葉葉の書入本を借覽せしに、卷末に寛文四甲辰年三月云々とあるまでにて、氏名もかければ、何人の書入れしものなる、しりが、けれど、其考證は極めて正確にて、有職故實の方には精しき人とみえたり。其書入の中にかねよし公の御説云々、かねよし公以前云々、かく二所まで假名にて、かねよしと書けり。その折はうけがたくおもひしに、其後松雲公御夜話追加といふ書を

みれば、左れ一條あり

一條禪閣兼良公の御名乗、カチラと讀と唱申候由、田中左源太申上候旨、當時の一條様へ御尋之處、左様之事も有之哉、あなただの御家にては、御代々カチヨシと御讀來り之旨被仰候由、御意に御座候

らゝる證據もあれ、かねよしとよむべきにや。松雲公とは松雲院とて、前田綱紀卿の梵諡なり。この御夜話追加といふは、近臣中村典膳が筆記にかゝれり。

三 津田永忠の功業

かのがしれる岡山の人は、いづれも津田永忠を稱してはいはく、永忠鞠躬して藩主を輔け、文武を勸めて志氣を振はし、田地を開きて窮民を救ひ、其他國に報いし功績、極めて多し。凡そ二百年が間國內の福祉、永忠の餘澤にいてざるはなし。其功優に熊澤氏れ上にあり。さるに其名の世に顯はれぬは惜むべしと、一人の口より出づるか如し、おのれこれをさゝておもふに、そは其事業の周匝にて、至らぬくまなく、一二を指していひがたきにやとて、世を隔で境を隔でながら、其人をしのびざりき。其後山陽道を過ぎし程に、後樂園に遊びければ、さしにまされる名園なり。殊にその園は永忠が奉行して開きしと聞けば、一木一草も皆昔をしのぶ料とあり、寶永四年二月五日にうせにし永忠も、今猶ほその園にたゝすめる心地せらる。歐陽永叔が流風餘韻、渴然被於江漢之間、至今人猶思之といへる言葉も、數百年の後ある此人のためにいひてにはあらどくとまで疑はる。園内に碑あり。池田侯の撰文を刻めり。左に鈔出す

(前略)君歷仕二世、在職五十年。替翼功績、不遑枚舉、設社會、以備凶荒、頒節儉條法、以救藩士之窮。牧馬造船、以修軍備。每郡興鄉校、置岡山閑谷兩齋、開墾幸島福浦沖倉田等、及疏鑿倉安川、得地大約二千四百四十五町。晚致仕老于閑谷、專督學以終焉(中略)維時明治十八年八月、車駕西巡過備前、余陪焉。駕經上道郡江竝村、江竝村即沖也、長堤亘數里、平田數萬頃、茫茫連天、其土肥、其稼豐、具民殷富、因憶二百有餘年之前、此茫茫者、蕪葭叢生、魚鼈所群游、今變爲鷄鳴狗吠相聞之境者、果誰功耶。駕進幸岡山學校、駐後樂園三日、茂樹嘉葩、怪巖奇石、鶴舞魚躍、庭園泉池之設、最怡天顏焉。而經營之者、其復誰耶、既而駕沿倉安川、經和氣郡伊里中村。村北即閑谷也。有旨使侍從長德大寺實則臨視、余亦隨行焉。講堂聖廟巍然聳于潤松高翠之中、啾啾之音與水声鳥語相和。而經營之者、其後誰耶。皆莫非永忠之功業也。(下略)

四 西山山莊の沿革

常陸國久慈郡譽田村大字新宿字西山は、源光圀卿の薨妻の地にて、元祿三年始て工事をかこし、翌年五月に至りて落成せり、同じし十三年十二月のくれさせ給ひしまで、こゝにすみ給へり。後十六年を経て、享保元年といふに、綱條卿これをとりよばち、更に恵日庵といふ梵宇を建立し、其本堂には光圀卿の御像を安置し、僧を置きて守らせられしが、文化十四年八月回祿にかゝり、寶庫以外一切焼失せり(これは大田郡奉行山口頼母并に新宿村役人の届書によれり)今の山莊は文政三年九月の再建にて、その規模はすべて元祿年中の圖面によれりといふ。たゞその守衛は、

横山清入といふものに命せられ、かの恵日庵は、大田村蓮華寺に移されたりと、水戸の先達はくたりき。

西山々莊の概況は、おのれさきにかまきし東遊囊といふ紀行にあれば、極めて疎略なれど、左に抄録せ

(上略)ゆきくゝて大田の里につきぬ。そこより西山はほごちうきよし、かねてきゝつれば、たしやまはいづりたよのととへば、かにーやまにやととひかへしぬるに、いまさら卿の御徳の程におどろかれて、いにし年兵庫に遊ひけるととき、男女をいはず、老少をわたりたず、あたこにも、敬詞もて楠氏を呼べりし事におもひあはせらる。此里をいでたちて、野の細道づたひにゆけば、譽田村のさのひに源氏川とていと細き川あり。そこにわたせる橋を、桃源こなんいふなる。卿がうゑさせ給ひ、桃の木はとたづぬるに、一もともみえぬすさましき心地せらる。そのうたはふにたてるいし文は、守山侯のかき給へるにて、いたく卿の御徳をたゞへ給へり。これよりあまたの山道のまがりくねりたるをわけゆくに、こゝかしこの山のたゞづまひいづれもけはしくたず、芝生青みわたりて、赤松あまた生立てり。その幹れをくある、くねりたる、いづれもやううはりてをのし。雪のつらにふりかゝりたらん朝、又むらぎにたらん夕などのゆかきに、卿が雪の夜、とみに歸らせ給ひけるは、このわたりに御心と、めさせ給ひしにもやとさへおもひつゞけらる。なほわけゆけば、紅蓮池とて長く狭き池あり。こゝに紅なる蓮をうゑ給へりとぞ。この池にわたせる橋をわたりて、とびいしづた

ひに登りもてゆけば、つきあけ門といふがあり。そは柱をなぐべたて、其わはひに竹のあみ戸をいれ、上のうたにくるゝをつけて、下より支木もてさしあげたるにて、他所にははみぬものあり。これちん西山の表門なりける。そこに入りて、やゝ平かある處を飛石づたひにゆけば、茅葺の家あり。つたりづらはひかゝりたるさま、えもいはず物さびてみゆ。西山の御住居とはみれなりけり。館守のあかいにて内にいるに、御坐の間といふはたゝみ十ひら、其次の間は十一ひら、御臺所、御納戸など、それに似つうはしく作りおせり。御學問所とてあかいするに、いりてみれば、たゝみ三ひらしき、圓き窓一つあけたり、いとく質素にて樵人のすみ家かとおぼゆべかりなるに、むねのふれてなん。あはれ、さる大名だちの三葉四葉の殿づくり、こがねをのはへ、珠をつたね、華奢をきはめ給ひけん世にあたり、東照公の御孫にて、しかも三十五萬石をうるしめし、三家の内にかすまへられ給ひし卿が御學問所は、さばかり質素にたはしましゝの。ろもく卿が交を修め、武を勵み、國を治め、民を撫て給ひし御いさをはさるものにて、覇府の勢いと猛く、洪水の堤を破りたらんやうなりしほどにしも、むねと大義名分を明にせさせ給ひしは、中流の砥柱こそいふべけれ。ことにうくれさせ給ひし後にいたりても、水戸の學風とて、天天下をなびかしたるは、今の御世のひらけそめし助とさへかれりどよ。さる御志老いてますく、壯かりしは、この御學問所にて養はせ給ひしにもやとおもへば、たふと一息はよれ常なり。あゝをいで、御庭づたひに御文庫にいたり、外よりみるふ、いとさゝやうにて、何はかりの書かいるべきとちんみゆる。け

だしかたへさらずみ給ふをのみいれおせ給ひけるにや。このわたりにたゞずみてあたりをみめくせせば、山うちかこみていさかおかなるに、いくもとゝもえしらぬ常磐木と、技さしのはしてしけりあひたるが、をりふ吹くる風にひゞきて、物の音あはするにいとよう覺えたり。其中に幹にこけむせる梅の物さひたるは、いくとせのへにけん。御住居にむゝへる心字白蓮池は、水いと青くたゝへたり。こはかの紅蓮池にむかへて、白きをうる給へりとか。この池の形の心もなるは、さるへき御心ありてつくせ給ひけるにこそ。げに入たぐんものは、まめあるも、あだなるも、よきも、あゝきも、心よりいでこぬちんあき。心なるかな、心あるかな。伯夷の傳をよみて、御世繼をさだめさせ給ひしも御心なり。彰考館をおこして、史籍を撰はせ給ひしも御心なり。武備をこゝのへて、大船をつくらせ給ひしも御心なり。うしこき人にへりくたりて、そがいさめをさかせ給ひしも御心なりあき、えうあきことまでおもひつゝ、池の南をみれば、觀月山とてひきゝ山あり。芝うるはしく生ひて、むしろあききたらんやうにみゆ。卿はつねに顯基中納言の罪おくてといはれしをしのび給ひしよゝき、つれば、この名もさる心はへよりおほせ給ひしにや。又其南なる櫻谷は、櫻こと多うらねど、木立世の常ならず、卿が櫻をめでさせ給ひしこと大方からぬよしは、雨を侵して小幡にゆかせ給ひしにても知らるべし。花の盛りなり頃、こゝにたゞずませ給ひけんおもうげさへたもひやふれてうちまもらる(下略)

木石子の觀たる戀愛

木 石 子

誰か木石を冷めぬと云ふか、木も摩れば火を發する檜あり、石も打てば火を發する燧あり、木の臥し石の横はれるいかで次序あふんや、

●さる詩聖の歌ひし如く、戀愛は星の如く天のものにして、之を地に下さんとするは謬なるか、將たまた戀愛は地れものにして、奴胤の如く機よくて土さば雲井さして高く天まで上るべきものか二ながら是あり、何とされど戀愛は最大の想化寧ろ醇化の上に立つもれなればなり

●戀愛は譬へは精釀の老酒の如きが仰くと數杯陶然として樂むべきのみ、鬱金馨しと雖も祭に灌して敬虔すべきものにあらず、芳烈美ありと雖も量を過して癡狂すべきものにもあらず。到底戀愛は醇あるべきもれなり、神聖なるものにもあらず、勿論卑猥なるものにもあらず、

●戀愛や歌ふは大平樂の極なり、その醇ある昇平の頌あり、その猥ある亡國の音なり

●心澄みたる時我に戀かくしてすがくしきを覺え、念濃くなる時我に戀ありて温さを覺ゆ

●我に戀なき時身は枯佛に似てよく寂に堪へ我に戀ある時木石思あるに似て殆んど情に禁えず

●戀愛の柔らき海棠雨に惱み、戀愛の弱き阿芙蓉露に臥す

●戀愛の渾然たる、曙光霞の中にあり、戀愛の惘然たる靄暮色を籠めて蒼し

●人に戀なければ悍にして或は御し難のらん、人に戀愛あれば懦にして多くは興し易し。

●望むらくば、人の愛の戀に於ける、猶その花に於けるが如くあふんと、花を送りて怨みず迎て笑ます、花の愛程葛藟かくして、且つ麗しきはあらと、花の愛ほど不變にして、且つ自然ある

ものはあらず、

●宇宙の萬象は、悉く牽引と反撥との兩性の力によりて働かれつゝあるなり、之れを古のある哲學者の如く、原子のラブとヘトレッジに歸せるも妨ぐ、而して人をもと、せる社會的現象は名譽、利得、戀愛、これのケースなりと云ふも不可なきか、莫遮大なるか否戀愛や

●凡ての情の、戀愛に變せる傾向あるは、猶凡てれイネルギーが、熱に變する傾向あるが如く、戀愛ミのユチヨアルなるは、磁氣電氣の感應に似たらざるや、

●戀愛の問題のXは、到底未知の値あり、數學や理化學にて所詮解き得べきものに非るなり、もし解き得るものありとせば、そはメルヘンにでもありそうなる、茶碗や、土瓶や、榎の木や、榎の木と思慕の如きもれなればし、

●世には腑甲斐なき戀愛のみぞ多り、不健全の戀愛のみぞ多る、自覺心なき戀愛のみぞ多かる、即ち戀愛かゝる戀愛と、黃白車服の解釋し得る茶碗や榎の木、の似非戀愛のみぞ多かる、このくてこそ、世人の口より響く戀愛ある語が、丈夫れ耳にこちたく聴くる、はむべなるを、

●佳人と才子との間の戀愛にのみ、同情を寄すべきもの、あゝる戀愛は、鳥の鶉にかゝり、賈の利に眩むと一般あると多きを忘るべからず、

●世路崎嶇として行路難し、人生は冒險あるかな、執着の葛蘿手足を纏ひて荆棘衣袂を捉へ、昏迷の冥霧四方に塞きて氷雪腰を没す戀愛は人生中の最大冒險なるかな

●戀愛は物の憐を知る始め、戀愛ほど憐なるものはあらと、さればかたみに袖を絞らぬべく、

先づ心することを、誠に戀愛を知れる人こそいふべけれ

●戀愛は知るべし、すべのらず、戀愛は戒むべし、嫌ふべきにもあらず、

●痘痕をも慮て見るは、戀愛の惑なり、刀瘡をも可愛ゆしと思ふは、戀愛の眞あり。

●彼の人にしてふれはと驚くるは、戀愛あるのみ。彼の奴にはさもあらんと覺ゆるは、色あるかな、

●戀愛に狂ふものを憫め、之を責むるに嚴ある勿れ、色に耽らんとする者を憎め、之を罰するに寛なる勿れ、

●戀愛は爲めに痴を演ず、恕して而して之を惜み、義によりて戀愛を捨つ、領して而して之を悲む、

●字を知る、もと憂愁を知る爲めにあらず、劍を學ぶ、もと癩瘡を求むる爲めにあらず、戀に魅せらるゝの初め、遂に傷心の種を得んとするにあらず、

●人生意氣に感ず功名誰かまた論ぜん、敢て六尺の軀を以て柳眉に付せんと、止みなんく、こゝまでも戀愛にイナグエトせる人、

●諺に詩を言、繪を言あれども、戀を言といふを聞かず、詩歌繪畫は大なる想化醇化に依ると多きを以て、時に或は浮誇虚誕に馳するは固より其所かふんも、獨り戀愛は二者と等しく大なる想化醇化の上に立でども、徹頭徹尾シンシアあるべきものなればあり、彼の間々戀愛に偽ありと云ふは、木石子の所謂茶碗や椀の木の戀を志したるの痴人、媚を買ふて覺らざる自棄糞ならんぞみ、

んぞみ、

●己れを戀はざるものに、戀ふが如く待遇せらるゝは、無上の不見識なり、翻弄せらるゝあり、椰掬せらるゝなり、彼の黄金を以て翻弄椰掬を買ひて、施々然たる痴漢は、なる程粹の骨頂なるかな

●戀愛の羈絆は夫れゴルヂアンソットからんか。快劍一揮之を両断し去るの時。白虹室を脱し鋒尖紫電閃き六花霏び、而して春風實に刀背よりして生ず、

●おはれ、我由なき戀愛に多く言を費しけるかを、戀愛てふとは、あるべくは男三十迄かくてありあん、女のとば我關り知らず。

木石子嵐や吹ける、霰や降れる、音立てけるよ、おあうしまし、

文 苑

冬の夜がた

久摩志呂古宇(舊稿)

霜の翠は霜に褪せ残りの色は常磐樹のわれは顔ある其ばかりにて茂りし林もおしかべて疲せはてつ雪氣を誘ふ風につれてさや／＼と鳴るもいさ／＼身にしみてあはれは勝る冬の空九十九折ある路よぢて登り行けば雲の往來も近き深山音づるものは賤が妻木の斧の音峰の嵐の猿の聲それ等の外にまた音もあきに暮れ行くまゝに空には片われ月れ影物凄く斯る寂しき山里も世の憂きよりはあ

かくに住よしとにや嶮に生ひし松を其まゝ柱にして引結びたる庵の内柴折り焚きて爐を圍みたるは翁と童にてそが向に座せるは今宵山路に行きくれて一夜の宿を乞ひし旅人あるべしめぐりありきたる國々れさままたこのころの都のさま世の成行おと物語るに翁のしきりに耳をかたむけ打ちうちつけるは如何に曆日なき山中に浮世に遠く住ひし身ふりとは云へ聞てそゝるに昔の事おご思ひ出でふれてあるべし

築山の木影鐵燈籠の光さびしけあるあたりに結べる庵更闌けて天地の間そよこの音もなければ落葉の音さへさだりなるに松風の音清くあすかに漏れくるは齡は古稀ばうりの翁二人心靜に釜かくるなりけり裏の表が流儀のほどは知らねども袂さばきも世の常にはあふでいみづく今此庵に不時の災起りてよし奈落の底に陥るとも動ぜざるべき面影三十年の昔さては時世のよしあしおどれもむろに物語りつゝ空を渡る雁の聲を聞きては料紙をとりて筆をばしふせかたみに示しあひては昔ながらの鐘のごとき高聲に笑ふれや年も彌生の春のころには劔太刀取りて戦のちまたに天晴武夫の花を咲かす英雄の幾春秋まきて冬の空にしまりぬれば置く朝霜のそれおどねども鬢にも雪のつもり來たるに今骸骨を乞ふ浮世の事にたづさはぬ身のあがき夜徒然なるまゝに會せるなるべし

日は既に足柄函根の山にうくれ晝の間より吹きそさみたる風は漸う雪も打まぢり更け行くまゝにいよゝはげしくこぼすごとく降りまては田畑のあぜも埋もれば吹雪は社頭の燈火にふきつけふきつけ空もとゝるさ礮打つ荒波の音れどろくしく千鳥の鳴く聲もいと物凄き小絢綾浦の雪の夜夜毎の嵐に破れくづをれたる海人が苫屋板戸より漏るゝ火影もほの暗き處に爐圍みて女どもの二人三人まとひせるふは己う夫はふかぢの身の上を氣づかひつゝ語りあへるにて斯る雪吹のあれすさむ夜は陸にあるものさへ寒きは更ありいと物凄きに板一枚の下は底ひに知らぬ大海原の水や空ある沖合に漕ぎ出でゝ風に冷に雪に凍り浪に弄ばれて漁する身のいのに苦くらましるにても漁はありやあゝやとく歸りませかかしあごさまとにこゝろ惱ましさらぬぐに永き冬の夜の物を思へは千秋のごとく覺ゆるにこそ

さはれ同じ大磯の里同じ雪吹の夜あれども夏をむねにて殊更海に近く建てふれゝ高樓の内は如何なるべき眩ゆき斗り照りうゝやける燈火の underwear 重ね火桶あまた打あらべては冬とは云へど暑き斗りあるに酒なき汲みかはしつゝ年の暮近き師走をも知ふずおもしろげに何やらんあらぬ事まで物語り笑ひさゝめき雨戸に入れし玻璃の間より海面を眺めては漁する身の苦しきも知ふが彼の漁火の見へつかくれつする様の面白さよなぞ云ひ興ずるげに口にてこそ唯一言に見ゆつゝあくれつと云へはその見ゆる時かの木の葉の如き舟は峻しき岨の上にのぼりたらんごころくるゝ時は千仞の淵に轉ぶかと思はれ若し一度逆巻く浪に堪へうねて舟の覆らんう忽にして生死流轉の八苦海屍は相抱きて濤に漂ひ魂は相伴うて海若の堂に至るべくやがて恨多き白骨をわたつみの底に留むるの外なきものをあはれ浮世はあばかり人を弄ぶものによ

出づると見し今宵六日の片われ月はうくれぬ吹きすさみたる風は霜夜に凍りて死し果て大路行く人の蹠音もこだえ野ら犬の長鳴れ聲もかすうなるに杖一本に浮世を渡るめしひの笛物さびしくあ

はれに聞えーがやがて行き合ひし二人互に寄りそひて杖取りのほは凍りたる小石を下駄にてかち打たゞきつゝ物語さふは師走の空の寒さにみいりはありやなしやなぞもいつもながらのかちと言われらの者のさちかくあはれになしき心の内は吾等の思ひやりかぬる處なるべしされは眼ありとて浮世のうるはしき處のみ見ゆるにもあらず徳義てふもの全く地に落ちて人はさながら怨の餓鬼道にも陥入りたゞんごとき云ひ甲斐もなき有様はむゝろめしひの見えぬこそなかりにうらやましきふしもあるかれ

外は疎なる冬木立落葉の上に霜白く月は冴えて窓打つ風噴水に落つる水の音も身にしみてさむきにこゝは暖爐たきこめし室の内電氣燈の下ある「テーブル」を打うこみ家のやうらの打つせひ若きものは來らん「クリスマス」の夜の樂いき空想を抱き童兒だちはうれしき送り物に其日を指折りうぞへてまちつかたみにかもしろき事ども物語りやがて話にもうみたる頃娘はたちて「ピアノ」に向へば妹は「ヴァイオリン」を手にし彈するは「クリスマスソング」の曲興そひて兄の「ソロ」も加はりまとぬせるもの、謠ひ出せば母の膝の上ある赤兒もまはりかねし舌にて共にうたふあどけなさ枝吹きかす風の聲も打きえては電氣の光の綠色の窓のけしきつめし毛氈に影たたるさながら淺みせりに霞みわたりし空に春の日のうらゝかなるごとく彌生の野邊にすみれたんは、あどけ咲きみだれたらんとし打ちつてふ人々は長閑けき春の心をあふはし謠ふ聲の妙なるは谷の戸いでし鶯の梅の梢に囀づるが如くあかゝに葉もあき木梢に凧さむき冬の夜とも覺えず實にたのしきは「ホーム」のまじおなりけり

旅寐のうき事は雨につけ風につけ故郷思ひいでる春の花秋の月何れも郷思をひく媒なりましてや美しかりし野邊もいづれ尾花いづれ茅萱とも見ゆき難くたゞ一色に打ちわたり木々の落葉は朝夕に雨の如く人目も艸も枯れ果て、殘る淋しき軒れ松のみ技吹きあらず雪嵐にねざめがちある頃は物のあはれも一しほかりさはれ學の窓の業の忙はしきときはさもあらねど月に冴えたる鐘の音に夢やぶぶられたる時永き夜ねふれぬまゝに思ひいでるは都の空の事どものみされは嬉しくも親しき友れ訪づれし時はたゞく故郷のこと共のみうたみに語り合ひやがて來らん初春れ事ども思ひ出で、はすぎにし年の歳の市の賑なりし事としの初日影は大磯の里にて見たる事どもより夜をあのしし歌留多の會の面白かりしとまでさばかりの事あふねども都のおとゝ云へばいと戀しくて興あるこそげに旅ある人の情ありけれかくてぞせめて旅寐の憂きを忘れ語さふ内れみは都に歸りたらんごとき心地せられていとゞゆるしく友のあすれ學課に迫られて別れ行く時などは何となく都を去る如き心地して残りをしきは吾のみかは友の次の休みをかたく契りて行くものを星の記章もいとゞのやき白き四筋のまだあたらしありし亥のとし師走半文顯り得てほのぐらき孤燈の下こゝちよくたばしる藪の音き聞きつゝものせる

空や水の記

山

咲

鹿に汚れたる岩木をあどにして心もなうき南湖の里に歸りぬ、波の聲は我にむのひて古ながりの音に語られ、颯々たる松籟、飛びかふ鷗、さては霞がくれにゆく片帆をば、たちちね、はるか

ふれ外りに再びなつりしき寐ざめの友となりぬ。

我家は高砂といへる緑翠滴るばかりある松林のはともにより、左は磯うつ浪の音高くどよめき、遠く烟れる、山薄く草わさやかなる漁村、はるかに小磯にはあまで、あはき黒繪にも似たり、これとはうたへにて、我が前は烏帽子がいはやとゼウス神の頭に似たる姥鳥とをわづのに、さしはさみて狂瀾怒濤のあはひに葬られむありさま、彼を沈める小女子が思ひこせばこれは血汐にもゆる詩人の堪へがたき煩ひにやあふむ、うゝる眺のはては、たゞ暗黒なる海原にして荒波は未はるかに、雲の山つむう雲の如き大島をぞ、杳渺として心細げに見ゆるやどあはれあり、家はことそぎたる萱が軒端をれども、父きみの意をこめて作りたまひしあれば、エムラガ村莊にのみあつること、いと心地よし、秋の嵐には白波れしぶきに洗はれつべさうばらがさしたる狭き庭の砂ちに、眺をさへぎらむ木もあらで、あきたには、見きれぬ磯艸の咲きこぼれ、あきたには、妹がすさびある松葉牡丹の三つ三つ句へる、はかなき白露の宿りみもあらず、いでや心の限り自然と語らばむ、我の幼きよも海を好む心に波の響はさながも慈母のみ聲の如くと思はれ、また果なき心の迷に、天地のもの心もちたらむように覺えてより、深き大海の心を戀る我胸よ、いかばかりか波の歌におどり立ちけむ、我に湧きたつ潮の思ひなくとも、我が想像の翼靜のる海藻の影にはせしめよ、我が情の波を味ふまで深からしめよ、荒ぶる波の聲は狂ひたつ情の調、いくちの骨美はしき玉保てる底ひは静けき悟の極みあらずや、あゝはあり難きは大海の神秘ある哉。我がつきにし夜、近きしるべの海人をぞ、つきよく訪ひく、聞ききれぬ言は、飾らざる語、無可有の郷はわが前

にひろげられぬ、げに紅の塵にけられし胸には寶丹のむ心地すべし、制裁の清き道德にしばらくれて偽善に溺るゝ人よ、來りて質朴なる人世の意味を味へ、哲學者がそりたる真理の草かどの、目を泄れて、匂へる美しき花はかゝる境にこそ咲のめ、あくる朝父きみと共に波うち際を歩む、こゝは切り立ちて貝拾はむ趣はあけられども、鐵を含めるま砂の美しきこと限りなく、心よきばうりあめ、絶へず歌調ぶる波の聲にあくがれて、す足してゆくに、ちまろくとうのぶが如き水の面白さ、無心の飾りなき幼子れたはふるゝにも似たらむ、波によせられては波のよするにまうせ、物語しつゝたどるに、新らしき砂地のあども空しく波に洗はれがちなり、砂れ上の文字などいへる詩を思ひいで、波さりしあと杖もて歌をさうけげ、波來りて之のみぬ、知らずやナポレオンの覇圖はなほこれ時の大波に洗ひさふれ跡なり、我が弱き心には千萬の人の涙、千萬の人の血汐をいけにへに勝れたる名、まれなる富をうるも好まじからず、願くはつきせぬ理想の光明のかげにして、人生れユートピアに逍遙してまじ、馬入川畔に到りて歸へる、緑なる空、緑なる波の間を鯉つる舟の白帆一つ二つ見えぬ。その夕あづまやに上りて携えたる書よむ、大島のはなをわづくに離るゝ日の光のうち遠き白雲の絶間より、そこともなくさ迷ふ夕暮の色、憂ふるが如き海の面をつゝまむとして力なげなり、うるはしき海べり花よりも淡き白帆、ことごとしこの崖は、沈みいる日にまむかひたれば、岩層の上へはよく明暗濃厚のかげを宿して、靜寂と悲哀とのうち夜の色はあはれんどし、残れる光はかくれむとせり、わづかに残れる光に、紫色の雲、あゝねの色にあや、美しく輝きて、靜かなる夕ぐれの海、あざやかなる夕ぐれの空を浮べ、さびしき

夕ぐれの波は、がすりに我夕暮の悲しき胸にさゝやきて、暗き夜の色によせ、まばゆき光にうへりつ、あゝ夕日のあはれよ、残酷なる英雄、にくむ可き罪人、それらも末路の恐しさは詩人の涙を流さしむるに、あふゆる世の運命を照らして、はうあく沈みいる日の光、思ひ出でらるゝは羊かひし老人が沈みいりし詩のさまあり。そのあしたとく起き、あつちやにて朝日見一が、うしろの山のはをいづるにて、夕日に仰るべくもあらず、たゞ曉露のやう／＼／＼ころびをむるをちこちに断々たる茅舎、あはれ白帆のあふはれそめいさま、沈静なるあはれはありけり、たづさへしロングフェローの詩集ひもごとく、海にちなめるを讀みゆくに、海の秘密といへるあり、海を恐るゝものは海の秘密はさぐれずとか、げに心なき人の胸には海はなにをか語るべき。ある日荒波のしぶき、いさたうくして岩のたゞずまひ危きばかりなり、平なる岩ほれ上にひさりたゞずむ、八重は汐路のめ波を波の澎湃として漲るさま、うざりあき美感をあたふるを覺えたり、ハルトマンの所謂力美 *Das formalschone, zweiter ordnung, oder das pyramische gefellige* ありむか、山輝水映のけしき、雲なき午天の陽光に一しほの白と添へて打見るかぎり一幅の繪にも似たりけり、あゝ大奇る悲しびれある時、もしもくゝる人遠く波高き荒磯岩れ上にありて、泣きつくし、笑ひつくし叫びつくしあば、いかに思ひもはれむ、戀しき限人を思ひ、悲しきあざり物を忍び、平らかなるぬかぎり世をいゝるにも心のまゝあれば、さるにても悟りぬし我が人世のうたがびに水のやうにとぢたる我思はこの大波の聲にぬぐひさられて、深き底ひは望める我が理想の世にやと覺えぬ、やゝしばしく、我を忘れて物思ひに沈めば、はるかなる空に、嵐を叫ぶが如き黒雲の首はけりけ

たるやうあるさまに、驚きて急ぎ家に入りぬ。空も春の曙の如くはれゆきて、雨もつ空も月とくはりぬれば、また波ぎわに走りぬ。風全くをさまりて、閑鷗は淡きみしほに飛ぶはう音もかく、海上只ますみの鏡をうけたるみこし。月光青く蕭然たる孤影を照して、げにこそ千里のほがも忍ばるゝに、遠寺の鐘聲烟霧の外に沈みて、人跡たえたる白砂青松のあたりのうづげさは稍より落つる露の聴くに聲あるばりあり。いろ／＼の想ひ堪へかねて、急ぎ家にもどりて褥ひさかぶりていぬぬ。そのあしたれ夜また前夜のところと逍遙す、この夜月かく輝きいでたる星の光に、黒くみゆる烏帽子がいはやをかすめてとゞ海鳥の聲、まづ悲しびを帯びて、心すみくらく壯絶ある洪濤の聲、清怨更に情怨、魂は水のやうにこりて、我が聯想せまきむねにかぎりあき迄満ちわたりつ。あゝ崇美雄大なる海のすがたよ、あゝはうりがたきは海の神秘あるかあ、ハイネが「我心は海なり」といひ一が如く變幻きはまりあき大海のさまは、詩人の動きやまき心にや似たらむ、時には狂熱にもえ、時には静うに平和のかげをうかべ、小き人世の運命をのたりては人の心にとこしかへある理想の光明を興ふ、あゝはのりがたきは海の心あり、仰いで星空をのぞめば燦爛として銀の細粉を撒きたるが如く、天使のもてる小さき剣れ如し、我れ星をのぞむごとに一種の感應をうくる事なきはあらず、尊嚴あるゴットをおもひやり、さらに變じて小兒的の天使を想像す、これ一種の迷信なるも同時にキルヒマンのいはゆる被理想化形象 *Das dieaisirte Bild eines seen-vollen Bealen* なりやも知れず、のく思ひぬるうちに、たちまちバイロンが「羅馬の夜」を想ひいだしぬ、あはれ血に泣きしバイロン、燦然たる星斗と皎潔月ある魂は、孤獨あるバイロンは身にと

りてはげに親しき友かりけむよ、かく思ふに忽ち堪へがたまなつうき感の起り來るあり、促へんとすれば、己に痕なし、吾靈遠く夫れ樂園を慕うにあらざらむ、わが校の一生かつて劍の露と消えんとせる人ありき、われその人の心を思ふごとに、いたくその人を哀れみ、その境を悲しむ、人はふれをたゞ狂人と呼ぶ、われその是非を知らず、何となく愁思亂れて絲の如くなるに、急き家にうへり、たらちねと語りて、その心を散らす、その夜風雨はけしく、いかづち、たどろろしく鳴りぬ、そのあくる朝、なつおしきたらちね、はららら、さては名残もつきぬ松の風、浪のひびきと袖を分ち、一聲の笛聲とともに、鐵車百里の山河をこびて、再びわれ、越の都の客となりぬ、「波の音にかき亂さるゝ思のな、ふうき心をさとりかねつゝ」

新体詩

白雲微吟

悠悠客

峰千秋の雪に照り

今しも匂ふ彩雲に

遠きみ空の花園の

うなりみちくる心地して

二、

紫あくる東海の

芙蓉の峰の八重雲は

下しまゝけむすめろぎの

尊き筆の匂ひはも

こたろふ風の末遠く

萬里の遠き眺むれば

夢はるかなる敷島に

五百重の雲はかゝりつゝ

三、

星影あはし峰の上

一、

八重の汐路の沖つ波

天の原をや浸すらん

濃紫の朝潮に

さゝるも白し雲の橋

四、

花やりにさそ夕榮に

空は緑の色をうへ

露の玉ちる小松原

霞にけふる遠里や

二、

あゝ此峰ゆほれくそ

あけゆく空にけがれなく

塵の巻の人の夢

永遠の光に醒むるなり

五、

越路の空に風絶えて

我故郷は七重八重

雲にうくれて東に

のぶれる月の光はも

三、

其二、

いたゞき高く一ひらの

笠ぐもかゝる夕まぐれ

み雪の肌清うして

ふりされ見れば玉の鞍
鉄衣雄々しき武夫の

露に星よぶ大刃を佩き

塵の表に立てるうか

四、

文苑

北シベリアの波われて
天風裾にあるゝとも
千蛇ヶ池の龍躍り
迅雷袖に迫るとも

五、

雷鳥静に眠むるとき
峰の天風收まりて
黒百合のすりに匂ふとき

三、

其三、

仰げは高し劔峰
稜威かしこき御前ある
神の宮居はいとさびて
岩に聲なし大汝

一、

露の珠ちる一しづく
末は湛へて靈水の
千仞あゝる白絲は
天つみ神の琴の緒う

四、

天女も舞はん白砂の
千歳が谷の雪にはえ
波にあや織る翠池
龍蛇もひそむ底ひかも
はひ松の影暗うして

二、

昔讚美へし歌枕
世々に調はつきざりし
大宮人の春れ夢
今し何處をめぐるとん
詩神の御聲をうつすてふ
あゝ歌人のあといたえ
峰に收まる千秋の

五、

不朽の韻今やなし

六、

其四、

神代のむのゝ久方の
天のみ柱ふとしくも
つきたてまして千代八千代
聳ゆる峰の高さうな

一、

さればわけの東の
天の戸出づる朝日子に
一片うきて岫を去る
雲れ姿を追はゞやあ

四、

雲のつばさや風の衣
多愛の遊子塵の世を
八千丈の下にして
嵩をたゝき嘯けバ

二、

虹のかけはし鮮に
此の峰にしもかゝるとき
星の都に行かばやあ

五、

匂もふかき天地れ

玉霞

月仙

流星

くしきは神の方にて
天のけり飛ぶ荒鷲の
翼にあまの思ひあり

三、

いさゝを笹れさやぎては、
結ぶよしなき秋の夜の、
夢路はがれていつしりも、
我れひとり立つ風の前。

人の眠りもまどろなる、
夜半に恨の絶えせでや、
うら枯れそめし草叢に、
たえ／＼すだく蟲の聲。

笹原つゞき芦の葉の、
枯れ伏せ上の白露を、
裳裾にわけて辿りつゝ、
ふしめになりて眺むれば。

緑はものゝきさまじき、
汀おどろの古池は、
さゝ波立たぬ静けされ、
星の影をば宿しつゝ。

水は神秘の色にして、

星は無言の影あるに、
さとりもあへぬ凡庸の身の、
心ばのりは結ばれて。

袖にかかしま風の音の、
うしろに耳を過ぐる時、
浮べる星のまたゝきの、
一つ流れて落ちにけり。

古茶鑑賤

誰が手より誰に傳へけむ、
古き茶鑑れ今の世に、
鼎の上やわが庵の、
姿静けく眠る哉。

いつの世いかに榮えつゝ、
錦の褥さては又、

黄金の鼎いづれにぞ、
優に足をやよせにけん、

今假庵のすみぢがら、
光はいよゝ照りろひて、
吐くや韻致は神の世は、
それにもまして濃けく。

そのかみ古きヴァルカンの、
神や鍛へしさればこそ、
技藝のうをりの高うして、
世に珍らしき工なれ。

さてモヴィナスの女神が、
己がつとめと幾しほに、
心づけんむ輝きの、
更に榮ある眺めりな。

あゝ夕月の前にして、
はふゝ櫻の落つる時、
あゝ窓の外のみま竹に、
いさゝ霞のさやぐとま。

櫻炭うやかこのして、
鼎にわかきもゆる頃、
茶鑑に雪のとけ果て、
やがては通ふ松の風。

それやアポロの大神が、
茅葺く軒に出でまして、
天の小琴の玉の籥、
いづれ妙なる調にて。

七つの孔か幾すぢの、

交 苑

緒にわく律の貴きに、
歌はみ空の秘の曲、
迦陵の聲も及びなく。

此世の影も映さなく。

若し世の塵の襲ひなば、
その光に目を雪ぎ、
舉しき聲の迫りなば、
その調に耳すましつゝ。

只日は永きすさびとの。
緋鯉真鯉の躍りつゝ。

緋鯉真鯉

山は幾重の奥にして、
孤つ館の壁しろく。

亞字もゆくりしき欄干に、
袖垂れあくる少女子や。

苔もさびたる庭れ裡、

池は千年の水の色。

清き姿に餘の眼を、
見張り眺むる池れ鯉に。

蔽ふ木立に浮雲の、

いくつ群れなるをのしきの、

尾ひれ腹鱗打ふりて。

あゝ山里の深きぞと、

せめては恨め心慰さ。

神の賜ひの遊ぎく、
争ひありく風情をば。

慰みもかき世に出て、

うき人の香に酔はんより。

水の面に立つや小波は、
笑靨を頬にたのしみて。

塵に汚ん巷にて、

心の底を染めんより。

友を親しむ優しさの、
女心のせまりては。

自然は清き床にして、

平和の枕安らけく。

月の桂男それなりで、
戀しき方もあるらんに。

無心の遊び永へに、

鯉と睦べや離れ亭のうち。

和 歌

交 苑

牧師遊きて、十年を會堂に只、鳶のつら這ひ茂りつゝ、

月仙

だけ高き唐黍烟の夕暮や、雨に歌あり風もさやきて

龍田川觀楓歌中

豐洲漁郎

一人三人立ち舞ひ騒ぐゆふばねを橋の上り寫真とるひと

俳句

柴影

繪踏して其夜の夢のやすかりき
 じうすがに膝のわななく繪踏かな
 家刀自の腹ふくよゝにして蚤飼のな
 よく叱る隣のぢいやうり風
 足音や蟹におくれてやどかりが
 明けてもく若草山や薪能
 女王祿や女車のうちつゞく
 紙子きて三百貫のおひゆるあ
 瘤按摩の賛
 寒月や寶永山のあらはなる
 武士醉歩の圖

長き著にあつあひるねし海鼠哉

閻摩大王鹽辛を食ふた

噛みつぶす鼠の喉へはひりけり

達磨の三贊

尻をひりし尻うごめくや冬籠

とやろく雪おとしまく樾火哉

去年の灯はまだ消え残り初日れ出

鉢植れ梅に春立つ朝あな

自炊して炭に悉しき冬の月

忘れたる菫菜の霜と石の上

新しき絃のうちりや綿屋町

煤拂て其夜餅つく隣哉

此年より頭巾にこもる我世哉

しめりたる靴下をほす火鉢哉

屠蘇の香や床に徐福の圖を愛す

せきどめて椿をひらふ春の水

甲板に故山を望む霞哉

鳩園
孤山
夢人

春寒く暖爐冷えたる客間のな
西風も糸ちいめけりいかのほり
白魚や砂まとりたる賣れ残り
鼓うつ離れ坐敷や夜の梅
子狐のわなにうゝるや残る雪

露

葉

漢文

答某生論讀書

村上 函峯

前日辱來訪。足下不以僕驚下。見問讀書之法。草率間不盡所欲言。聊茲陳說。僕承乏
教官有年矣。雖未能盡其責。而於讀書之法。則不為全無所見也。其果當與否。請足下
擇焉。方今我邦學制。以英獨為經。以和漢為緯。分科為學。殊不置重於漢文。故所課
者二三讀本耳。所習章句訓詁耳。所謂專脩漢文者。亦僅不過下加之古經資講讀。其正文精
義。少有不至者。雖由勢之使然。亦不得讀書法之所致也。邇年百家之學。新鑄之書。日多
一日。施及漢文。解以國字者。不遑枚數。書生以為捷徑。競讀習之。似利實害。如便實
不便。何也。徒務解一字一句。支離紛錯。非庸庸淺陋。則怪妄迂僻。要之一知半解耳。故善解
一字一句者有焉。未有善讀一章者。善讀一章者有焉。未有善讀一篇者。夫讀漢文。
欲通其書義耳。欲通其書義。在解其脈絡。達其肢節。故一切排斥國字譯解之書。徐把白

文。反覆熟讀。參以本註。然後趣味自生。識見亦進。蓋讀書貴於熟與精。先要熟讀。繼以精
思。無讀不通。無思不得。讀而不熟。則目不與字慣。心不與書熟。前所得者。不復記
憶。思而不精。則不中其肯綮。不達其骨髓。雖百遍讀之。無益也。若夫作文。須要多
作。手熟筆慣。自得逕路。不多作。則手與心相乖。識與技不應。然多作而不精思鍛練。則趣
意索然。亦無足觀焉。故讀書之貴於熟與精。作文之貴於多與練。二者不可偏廢也。今之
書生。從事於多岐。讀書不得其法。為少得力。唯以登第得狀為念。其於文不多作。偶
作矣。亦不精思鍛練。不足下雌黃。如是而欲學之進業之成。難矣。足下好漢文。欲以立
出身之基。殊可嘉也。語曰。可與言。而不與之言。失人。僕見足下之可與言。乃言其所
欲言。以盡其所未盡。幸而不棄。更來商論。不宣。

紀翁婆事

荒 缶 疎 狂

翁婆有居室者。一日翁入山采薪。婆臨水洗衣。婆見一桃實隨流來。持而食之味美。乃欲餽翁。望
上流祝曰。願又下一顆。言未畢。復見一顆。婆欣然取之。持以歸舍。置之閣上。頃之翁亦歸
曰。吾欲果餐。婆曰。有一桃實在閣上。可以充不時之求。翁曰。可矣。即就閣索之。不見桃而見
一狗子。翁怪而曰。桃亡狗在何也。婆曰。豈其然乎。亦起視之。如翁言。駭然曰。吾置而坐。坐即
子歸。無狗子竊之間。意桃化為狗耳。狗子澤毛豐美。足以愛翫。請畜之家。翁曰善。翁婆愛之猶
子。養無所不至。一日長一日。無幾大過常狗。人言曰。翁具鉏與竊以騎我。而鑿吾蹠處。

將大獲福、翁曰、汝雖漸長、豈勝令吾騎乎、敢辭、狗曰、第騎、吾將以報恩、翁乃從其言、帶鉏羸而騎、狗馳入山、涉險踰阻、馬且不及也、遂及一丘、蹶然蹉跌、翁乃下鑿土數尺、得金玉無數、滿羸而還、翁婆遽爲富人、愛重其狗倍于昔日、東家有翁婆、懶惰怠業、常苦寒餓、而性貪婪、聞西家致富羨甚、乃往間致富方、西翁曰、是無他、唯從狗言以得金玉已、東翁曰、然則假我以狗乎、西翁諾、東翁乃喜、駕長鉏大羸、操策騎之曰、西家得金不多、慊于吾心、汝令我得十倍于彼、不然吾殺汝矣、揚鞭入山、狗不堪其任、跌而倒、翁下鑿之、牛溲馬矢隨鉏而出、臭穢不可言也、翁大怒、舉鉏擊狗、々斃、乃埋之、栽以一松樹、茫々乎歸、明日西翁請還狗、東翁以實答、西翁恨且哀、遂携婆到埋處、相共奠物祭之、哭泣甚哀、既而將還、冢樹暴長、頃刻大數圍、樹上有聲曰、斬此樹可以造白、翁婆以爲神所命、乃命工爲曰、翁婆相對舂之、米粟自倍從、倉廩充實、東翁聞之、來曰、爾得實白、何喜之如、而其樹吾所種也、子其可專利乎、我向以過殺子狗、故不爭、子能知之、盍且假我也、西翁從其言、東翁乃與婆舂之、米粟皆化、爲蛇、爲蛟、爲蜂蠶、爲蚊蚋、相聚螫翁婆、翁婆大怒投白於爐中焚之、居數日、西翁來求曰、東翁復以實答、西翁撫然曰、子殺我狗、又焚我曰、何其狂暴、吾雖甚恨焉、既往之事、咎之何益、請收其灰以慰吾心也、乃盛一器而還、途遇風、灰飛著樹枝、梢々盡發花、粲然可觀、翁大怪、更試散灰、灰之所著、莫不發花焉、翁謂婆曰、寒樹木著花、實奇觀也、而吾曹獨賞之爲可惜矣、我將供都人之觀也、遂齎灰以入城中、富貴之家、相爭迎之、亦以爲奇觀、遂得巨萬、東翁聞之曰、西家一器之灰、猶得巨萬之金、我有一爐之灰、富擬王侯、可計日而俟也、亦齎其灰、以入城中、揚言售奇術、乃有貴公子、輕裘

肥馬、陪從如雲、聞其揚言、使人召而問、翁誇言渾々、豫要其賞、遂颺一器灰於上風、灰散如霧、人馬皆眯焉、而樹無着一花、公子大怒、讓其欺人、楚撻放之、翁僅免死而還云、

疎狂生曰、翁采薪、婆浣衣、各勤其業也、勤業者得福、固其理也、得福而不奢、居權而不誇人之道也、不獨私寶器而不專利、且以爲鄉党相救之義、西翁則有之、宜矣、其以福終也、疎慵怠業、自取寒餓也、不勤而貪富、破人道也、假而不還、毀人寶器、不義莫大焉、東翁卒以此敗矣、夫此一話兒輩常談、荒唐寓言、雖不足紀、而有勸懲之意存焉、能擴其意、亦足以爲矯世之資矣、其可忽諸、

予幼時在王母膝下常耳此話今及讀此篇不堪今昔之感蓋此篇有寫得逼于真者也(華陵居士妄批)

雜 報

迎新年賀新世紀

しるゝなれや、

金鳥天に翔つて禁闕鎖を開き、乾坤茲に一轉之、
律轉鴻鈞佳氣同、肩摩鼓舞樂融々、
不順更向東郊去、春在千門萬戶中。

見渡せば、彼は激澀として汀の舊苔を洗ひ、風 萬民鼓腹、數杯の椒酒に微醺を帯びて樂み禁せは拂々として新柳の枝を梳り、萬物鮮妍、韶華 ざるもの如く、春衣をかかげに春風に薫らせつ、悠々、慶雲天を掩ひ旗影地に翻る、而に泰平の 嬉笑せる兒女が声は阡陌に滿つるをぞ、樂融融

として何れり年立つけふの心地せざらむ、吾人は元これ、蓬頭垢面、書劔永く他御に漂浪するの客、醇醪凰胎の以て口腹を樂しましむべきなく、晴衣の春風に薫らすべきあしと雖、而も上列宗列祖の御稜威と、聖天子仁慈の下に亦無事馬齡一歳を加ふ、幸福何ぞしのむ一かのみあらず、此麗はしき新年こそ將にこれ、吾人が舞台ともいふべき廿世紀の序幕に當り、剛健有爲の男兒が東亞の花役者として、雄を争ひ豪を競ひ、以て神州男兒が意氣と敏腕とを彼等歐米人種に示すべきの始たり、豈又賀せざるを得んや、

今や年開け、世紀新たなるに際し、吾人其思ひを邦家の前途と、吾人が將來に放てば滿腔の希望濼々と湧出し來り、霸心轉た昂り禁ぜんとして禁ざる能はざるものあり、噫廿世紀は東洋の舞台也、日本人土は舞台なり、然り而して東洋

の舞台は日本人士の濶歩を意味し、日本人士の舞台は吾人が濶歩を意味と、思つて茲に至る、吾人が任や輕のふらず又少しとせざる也、誰う夫れ陸に彼の猛鷲を搏ち、海に彼の蛟龍を屠るものぞ、誰か又ヒマラヤ山頭高く我國旗をうげ、揚子江上遠く我軍艦を逆り行かしむるものぞ!!! 年逝り、年來り、今や皇紀二千五百六十一年、明治卅四歳第二十世紀の新天地は瀾氣悠々の裡に滿面の笑を湛へて來りぬ、自重かれや自愛かれや北辰の諸子、謹んで賀せ、

送武笠先生

冷颯北海の天を掠れて、槎枒たる樹梢黃葉疎かり。世は蕭涼たる秋を送りて、將に枯寂の冬に移らんとするとき、吾人が仰慕して措かざる三諸武笠先生には、駕雲本校を辭して、鳥が啼くあづまの空に去り給ひぬ。

想へば、先生吾が校にあるものと僅かに二歳、其

日月極めて短少ありといふべし。然れども先生が宏博なる學才と、醇潔なる德行とは、夙くも諸生を薰陶化育し、既に吾が校六百の健兒が敬慕遵重の眞情は、集りて先生が一身に繫るに至れり。先生今に於て吾が校を去らるゝも、蓋し教育家として其本分を盡されたるは点に於ては實に遺憾なきに殆のらんか。嗚呼、在校の日、斯の如く短少にして、しかも薰化の効、斯の如く大なるを想へば、先生學徳の深且つ洽ある、測る可らざるものあらざらんや。

先生教鞭を執りて講堂に立たるれば、循々として説き、孜孜として教へ、諸生悉く領するに至りて則ち止む。又退いて寓に在るや、諸生と膝を交へて、或は文學を談し、或は美術を究め、

時に滿腔は抱負を吐露して大に諸生を鑑戒し、今の所謂學者の意氣地なきを慨せられたり。斯の如くにして先生が朗々たる音聲と、涵々れる

風姿とは如何に深く吾人が心に刻まれたるか、而も先生今や東歸せらる。夜雨沈々たる時臥龍山頭の月に對せば、負笈の健兒も亦一掬愁別の涙なからんや。殊に先生がこの北辰會誌雜發達のために捧げられたる熱誠は、吾人會員たるもの、長く忘るべからざる所也。以前のふとはいざ知らず、先生本校に來られし以來、雜誌部一切の事務は殆ど先生一人に手に成れり。本誌をして今日あらしめたるもの、全く先生の力なりといふも、敢て溢美の言にはあらざるべし。頃者、北辰文壇漸く凋落の嘆あるとき、先生また茲に去つて世は長なへに木枯れ聲につゝまれんとす。吁、天何ぞ無情なる。

要するに先生はたゞ五斗米のために其膝を屈するの偽善家にはあらざりき。毎日數時の授業時間を終ふれば以て吾が任終れりとする所謂似而非教育家にはあざりき。先生は教育家の志尙

の如何に高らざるべからざるを知り、また教育家の責任の如何に重きかを悟り、終始掣實に、熱誠に、子弟教養の重任を盡さんことに軫念せらるゝ極めて高潔ある教育家なり。宜なる哉、遠く浦和の父兄諸氏が先生に來り師たらんことを乞ひ求めたるや。而して先生も亦其眞情の厚さに感ずて請を納れ、其蘊蓄する所を傾倒して將に故山の俊髦を薰化せんとする。吾人私情に於ては、實に耐へかたき憾ありと雖も、先生前途の多望なるを思へば反て賀することを禁せざるなり。吾人潔く私情の綿々たるを去て、改めて先生が前途の多幸あるを祈らん。先生希くが自重せられよ。敢て蕪辭を陳べて先生を送る。

新任式を送別式

明治三十三年十一月三十日の日、午下零時二十分武笠先生の送別式に併せて、新教官武藤先生

の新任式を、靜勝館に於て行はる。やがて一同席定まるや、北條校長進みて、武笠先生の送別式に併せて、武藤新任教官の紹介式を行ふ旨を告げ、徐ろに説き起して武笠先生が在任中の功勞を謝し、僅ろに在任二年にして他に轉せらるゝは吾々一同の大に遺憾とする所ありと告げ、次で武笠先生は在任中の謝意を述べ、今後愈々健康を保ち、切磋勉勵、諸子が他日社會に出で大に爲すおらんことを祈ると、いと懇切に諸生を戒められたり。先生が離別の辭終るや玉木薫藏氏は大學豫科生徒總代として送別の辭を朗讀し、一同惻々の情に堪へざるものゝ如くなり。是に於て送別式を終り、佐藤教官の紹介式を行ひたり。おは玉木氏が送別の辭は左の如し。

孤雁空ヲ掠メテ轉々遊子ノ腸ヲ斷ツ時、生等ノ敬愛セル武笠先生ハ去ラザ教鞭ヲ故山ノ巒舍ニ執ラレントス、顧レバ薰陶ノ恩、化育ノ徳

生等ノ先生ニ負フ所實ニ大ナリ。朝ニ越賓ヲ迎ヘ夕ニ吳客ヲ送ルモ、尙人間別離ノ嘆ナキ能ハズ。況ンヤ親シク先生ノ温顔ニ接スル茲ニ數年、焉ンゾ惜別ノ情ニ堪ヘンヤ。然リト雖ル生等豈ニ徒ラニ區々ノ私情ヲ悲シンデ先生這般ノ榮轉ヲ祝セサレンヤ。生等今ニ及ンデ益々先生前途ノ多望ヲ喜バンノミ。別ル、ニ臨ミ將來先生ノ健康ヲ祈ルヤ切ナリ生等感慨胸ニ逼リ復タ云フ所ヲ知ラズ、希クバ牛等ノ微衷ヲ察セラレコトヲ。尙諸生相謀り、法科三年は十二月二十九日に、一部全体(法三を除く)は十二月一日に、特に武笠先生の送別會を開き、先生を想ふの微意を致せり。其他紀念として一同より硯筥一個を賜りし。

迎新任教官

曩きに野田先生去られ、佐藤先生去られて久し

く其後任を欠きたりしが、今や武笠先生の後任として就職せられたる武藤先生と、相前後して西、吉村の兩先生本校に蒞任せられ、此に全く其眞を欠くおきに至れり、吾人は諸先生が其深遠なる蘊蓄を披注して、吾人が鈍才を薰陶せられんことを切望す。吾人不敏と雖もまた敢て諸先生が指導する所に背戾することおきを誓ふ。例によりて、新任教官の略歴を掲ぐ。

故授西英盛先生 は山口高等學校に身を起し去る明治二十九年七月東京帝國大學理科大學物理學科を卒業し、爾來福岡縣尋常中學校傳習館教諭兼同館長心得、福井縣中等校教諭の職に在り三十二年十月本校教授に任せられたり。

講師武藤元信先生 は久しく石川縣師範學校教諭の職に在り、後其職を辭し、三十三年十二月本校に來任せられたり。

柔道教師吉村新六先生 は佐賀縣の人、講道館

出身にして、警視廳第五高等學校、海軍兵學校に桑道教授たりしが、三十三年十一月本校に莅任せられたり。

昨秋乃運動會

この寢言を今に繰返とは、如何はしむれと、一言なくして雜報子の罪のほど畏ろしければ、聊の去秋の運動會につきて書いつけん。

さて十一月の三日といへば、天長の佳節たること勿論なるり、此日はやがて我が校友會に於ける陸上大運動會舉行の當日なり。期に先つこと約二週日、既に運動會各部の委員は確定し、東奔西走一意當日の盛觀を致さんために日も是れ足らざる有様ありき。然るに運動會舉行の前日即ち十一月二日に至り、わが大學豫科に於ける委員諸氏は決然辭任の旨を北條會長に致したり、事の起因は會長の意志と會員一般所希と互に通せざりしに由れるものにて、不幸にも運動

競技者は只醫學部に於ける會員のみにて、大學豫科の會員一同は之に加はらず、圓滿に、壯快に、幾多の健兒が日頃の手腕を觀るを得ざりしは大に遺憾とすべき所なりき。然れども其後双方の意志全く相通じ、會長も會員一同が運動に熱心なるの餘り、圖らずものゝる行違ひの起りし事情を諒とせられ、今後一層体育の獎勵にとむべしと理由されば、會員諸子、益振ひて其体を練れ。

佛語講習會

吾が校に於ける佛語界の氣焔揚らざること久しかりしが、去秋九月有志の士相寄り佐野助教の助力を得、特に校外より佛國人セツセリン氏を聘して講師を囑托し、尙校内同好の士を募りたりしに、會員に加ふるもの六拾有餘名の多きに及び、毎週四時間つゝ講習をなし、互に佛語佛文學の研究に勉めつゝあり。吾人は吾が校

赤門出身の諸先輩は皆之を惜しみ、早くも先生を大に學招致せんとの念あり、先生又進んで大學に鞭を取るの榮譽たるを知られざるにあらずりしと雖、先生を敬慕せる子弟を振り捨て、去るに忍びず、私念私情を抑へ、銳意我校のため子弟のために、盡瘁せられしが、蛟は久しく池中のものたらず、世は益先生の起つべきを促し、乃ち終に先生をして、恩愛の絆な絶つて邦家のため、更に進んで大に盡すのむ止べからざるに至らしめ、入て京都大學に育英に任に當るべく決心せしむるに至りし也

に於ける外國語國界進歩の一現象として、大に慶賀するものなり。唯願くは益々健全強壯に發達して英獨の兩語學界と其盛を競ふの期あふんことと。是れ實に其會員たるもれ、所期すべき所にあらずや。會員諸子、夫れ之をつとめよ。

送戸田先生

先生一昨卅二年其豊富なる學識と俊秀なる才氣とを齎らして、我校に鞭を取られしより茲に三歲霜、諄々として飽らず、よく子弟を誘導開發して至らざるなく、功績夙にあがる、子弟爲めに敬慕措かず、入ては明晰なる講義を悦び、出

噫これ吾子學を先生に受くる者に取ては寔に悲惜措く能はざるもれたりと雖、邦家に取り、先生にたりては、賀すべく慶すべし事たり、然らば吾子は今や訣別に際し、區々たる愛着の私惜を忍んで、先生が榮進の出途を華々しく饒むべき也、

で、は快潤なる談話に親しみ、其校外に於て得たる所、尙に少しとせざる也、底事ぞ、平生今回、我校を辭して京都大學に去るとの飛報は、吾人が耳朶を掠めて、失望惜別の念にたへざらしむ、

是より先、先生の名世に噴々として高く、特に

聞く、先生幼より夙に苦楚嘗て、切磋僇まず、研鑽怠らず其苦學のほど、先哲猶一步を譲るば、

法政會乃誕生

辯論の修養が、立憲政体の發達と共に必要なるは吾人の喩々を要せざる所、同窓の親和交誼が智徳研磨に欠くべからざるものたるや敢て喋々を要せざる所、乃ち昨歲十月中、此會は佩々聲を一部法科の一隅に起せり、集まるもの凡そ垂筆頭更に數尺の名論を醸出し、世の俗學者をして爲めに、顔色あらしめし事も少ならずと云ふ、宜かる哉、先生這回の榮進や、吾子は京都大學が今日以後、先生に倂りて得る所實に少々あらざるを羨むと共に、先生は將に大に成すのを期して、大に慶賀せざるを得ざる也、

噫、思師戸田先生去くる、梅花漸く南窓に綻び、黃鳥將に幽谷を出でむとぞ、無情の花鳥又先生が多望なる出途慶福せむとするもの、如し、吾人豈區々私情のために不吉の涙を漉へんや、冀

を共に、又熱誠を捧げて斯會を維持し、以て一時の茶話會菓子會たがしむるなくんば幸矣、妄言多罪、

寒稽古

雪華繽紛として山野に舞ひ、朔風凜烈として肌を劈りむとす、此の時に當り我柔道部、劍道部は寒稽古を無聲堂下に始む、集まるもの凡てこ

弓術大會

東庭に開く、兼てより準備の十分に整へりしにも係らず、出席者少く、演技者又僅々數名に過ぎざりしは、洵に腹滿たざる心地せらる、然れども、由來這般の會たるや、野次馬連の一時の好奇心にひかされて、ドサクサと冷評的に來ふんよりは、眞摯眞面目の士が熱心に來られん事を望むもの、况數の多少によりて失望落膽をばさものとふんや、只今日の大會により、弓術は如何に優雅にして、如何に多趣味有益のものたるや、同窓諸子の胸臆に未だ十分に覺知せらるや、

此ざるを思ひて、之を悲しむのみ、

北辰會記事

語學部小會概況

校友會各部の委員諸氏へ雜報子よりの御依

國語會

頼時下寒嚴の砌、各部愈御隆盛の段、御同様恐
悦の次第に御座候。然者甚だ差出がまじき次第
に御座候へ共、近來各部共頓と動靜御漏し下さ
れず、爲めに本誌編輯に際し、雜報子は東奔西
馳やうやくにして材料を蒐集する次第にて雜報
子の苦勞も一方うらや、大困りの有様に付何卒
今後は、各部共報告すべき事件生じ候や否や手
取り早く其模様を御記録の上、雜報子の手許ま
で御差出し下さる様偏に願上候、當に雜報子の
苦勞のみあらば随分之を忍ぶべく候へ共、何分
廣大なる校友會の事とて、隅のら隅まで渡りが
たく、ツイ、大切なる報告をも漏らす様の事
おこり候ては洵に不都合の次第と存下候と、幾
重にも御依頼申上候、あつて申す者は雜報子の弱
卒、宮北篤治小島識造に御座候。頓首

新學年と共に多數の新入會員を得たる本會は層
一層れ奮勵と着實眞摯な態度と以て歩武を進め
たり、己に新古今集の合評は略終るとを得て更
に實朝の家集金槐集にうつり文學界は愈進んで
愈たもしらく武笠講師の精勵によりて小説も半
にかよび會員は毎週金曜日の來らんとのおそき
ながこつありさまなりしを惜むつゝ先生舊臘無
據郷里埼玉にのこへるゝに玉る
まうれとも本會は更に藤井教授によりて其後を
繼續せられ偶精緻ある研鑽は稀に予輩の聞いて
珍とぞるにして深く先生に感謝と所也會日は
毎週木曜にして現今瀆本講述せらる
漢文會
秋風來る山嶽江潭は嚇たり唳たるの聲あり梧桐

芭蕉は牽たり悲たるの聲あり宇宙の萬物或は吟
ト或は嘯し一としてたあふざるはなし此の時に
當りて半死の漢文踊躍一番して天下の聽覺を打
破せんとし中秋十月二十有七日文三教室にそが
忠實なるの士は相集りて大聲を放てり厥聲恁麼
に高きう潔きか抑も恁麼に樂しきか悲しきか漢
文團聲なしとなす勿れ鶴九皋に鳴て聲天に聞ゆ
る概あらそんばあらそ時に時辰計は二時を指せ
り
阿部維嵩君登壇本會現時れ状態今後一ヶ年間に
於ける方針希望等を述ぶる

齊の學殖と門下幾多の英俊に至つては世擧げて
小泉君の稱言を疑げざらん而れ共一齊の行跡に
至つては悉く以て矜式するに足るとは保し難し
明石先生 登壇支那學術盛時てふ題目れもとに
激せず逼らざる圓滑の口調を以て支那上下三千
歳を通つて而りも學術盛時は漢にあらず唐にあ
り將た宋にあらそ朝に合從と唱へ夕に連衡を説
き四百餘州四分五裂の春秋戰國時代は正しくこ
れかりと因に例し果に徴し講演時餘の久しきに
度りて聽者一は倦厭を覺えず實に本會の感謝惜
く能はざる所なり (以上瀆稿)

次で小泉孝治君登壇懸河の辨以て能く一齊佐藤
大儒の性行學績を説き遂に其の門下象山の明、
華山の達を稱し語氣加はりて現時の青年擧げて
徒らに道を遠きに慮を大に求むるの傾向あり此
は非の非あるべきものなりと一喝一齊以て鑑
すべしとの一言に局を結むで降壇せり願ふに一

次で登壇されたるは高見之通君あり君は老子上
下二卷れの道德經は是れ老子の格言的玉條にし
て老子か能く世を超へ俗を脱したる所老子獨特
れ長處にして強ち他より脱化一來りしものから
ざるべしと論下之を佛教と對照し儒教と比較し
て老子か虚無以て根本的として所謂開放主義に

到達せるを嘆美し終りに韓非子は是れより化し
來りて其開放主義に反しむしろ閉鎖主義に傾き
たるものと云ふべきを最と快明に論じ去りぬ
最後に村上教授は前々よりの引續きなる漢文の
應用に就て懇切懇懇熱誠に當今の青年が文章を
作ると云ふとに付て輕々視する所あるを嘆ト我
國に於ける文體の變遷沿革に關し縷々陳し玉へ
り時に釣瓶落しと云ふなる夕日西山に暮き西風
颯々窓を打て寒し興味未だ尽さるも日昇限りあ
ると以て散會せり正に午后五時

第二回記事

時一も十一月廿四日枯木寒鳥鳴き金風肌を刺と
の午后第三時第二回例會は我校文三の教室に於
て開るる相會するものは甚だ大數ならずと雖も
もと是れ此道に熱誠あるの士談る所壯絶論する
所は卓犖併せて詩文の添作評論あり席上林木嬰
君の

數萬論言關教化 幾多詩賦壯詞場

休言斯會來明少 贏得弟師情誼香

の一吟を以ても如何に此會が實着精神的にして
其妙味の充實的あるかをトするに足らん駒田定
郎君登壇して孟子れ品性に付て縷々數千言輕明
なる辨と周密ある考證とを以て諸々の方面より
孟子の品性を觀察論斷せらる

村上教授は漢文の應用に就て承前せらるべき筈
なりしも都合上經學れ沿革と云ふ題にて滔々辨
ト去り論じ來る其懇篤熱誠なる吾人常に其眞情
に感泣するものなり時に黃昏暮色蒼然諸行無常
を告ぐるに云ふ遠寺の鐘聲は白山風と共に吾人
を襲へり正に是れ午後五時散會

英語會

十一月第二土曜の午後二時より化學教室に本學
年第二回は英語會を開く傍聽は例の如く教官學
生を合せ八拾餘名當日左のスピーカースは左れ

サブゼクツに付て快辨を弄せらる

Chinese idea about China.	安 信	十二月一日三回月並會を開く武笠講師の送別會 と打合ひたるも猶會する者北條會長を始め教官 生徒を合し五拾有餘名學制一度改正せられて語 學重視せらるゝや直に其の反影本會の上に現は れ會員諸君の熱心となる之れ實に本會の爲慶賀 に堪るる所なり當日の辨士及演題は
Shtakini Suzanne.	横 山	
Theatre.	石 田	
Casadiance.	八 木	
The Minamoto Family.	前 川	Noble Bohemianism 三二大津
To the survivors of the dattle of.		
Bunker's Hill.....	逢 坂	Aunobel Lee 同 小倉
Taste and Genius.	辻	One part of Marley's Ghost. 三一高橋
Higher.	塩 田	My first Japanese dinner 文一鈴木
Centenary cereclation of.	熊 田	The Italian and his bells. 文一堀口
Saved a vase.	轉法輪	The passage of speech patric Henry 法一高木
King James I. of scotland.	茨木教授	The present condition of society in Japan..... 法一堀本
尚ペンランド氏は病氣の爲め欠席せられ本場仕 込の得意ある所を聴くと得るりしは出席員全体 の大に残念とする所。		Figure of chrysanthemum. 法二森岡 Republic and monarchy. 文三廣野 Graecian arts. 文三西川

第三回英語會記事

Energy. 法三鈴木
 Life of William Ewart Gladston. 法三牛塚
 Re-itation from Shakspear's
 Henry VIII.教授杉森
 About Cambridge and Oxford.
 Professor d'Haviland.

獨逸語會

十一月十七日午後二時第二回小會を開く會するもの大約五十人なりき其演者左の如し
 獨法二 桐山誠一 獨法二 笠井仁八
 三、三 有馬章三郎 三、三 加茂貫一郎
 三、二 渥美重三 三、二 降幡積
 三、二 解良幸吉 英法二 櫻井小一
 其他例に依りてユンケル先生中目先生の演説あり閉會四時半
 十二月八日午後二時例會を開く當日は風雪甚しく寒氣に堪ゆべのらず會するも僅かに十六人三

時半散會す演者は

三、三 窪美保定 獨法二 野口淳吉
 獨法二 室木彌二郎
 例に依りてユンケル先生は獨逸語研究に付ての注意及湯目講師は獨逸唱歌ありたり
 二月十六日 卅四年第一回の例會を開く會者七十餘人山崎先生の Die Primordiallehren der Japaner (日本人の原發妄想に付て)、ユンケル先生の外國語に付て、湯目先生の洋行談及三部三年有志者の獨逸唱歌合唱あり盛會ありき猶當日出演者は左の如し
 三、三 丹治善藏 三、三 大河内常一
 三、三 有馬章三郎 獨法二 村野美雄
 文 二 今井正親 三、二 上野道故
 三、二 原田憲治 三、二 菱川恒夫
 三、二 伊藤賢三
 遠足部

秋季遠距離競走概況

噤然たる白山は颯々たる天風を吹き下して尾山城下徒らに閑居せる十萬士女の面を掠めてすさび白雲を飛ばし木葉を捲き將に天地一轉旋して鬼神空に傲嘯し牧馬は野に嘶き壯士脾肉の肥ゆるを嘆き這際劍によるべし秋風來兮

期の逸せしむべりうず將に十一月十八日を下してわが校友會は校を距る十數哩鶴木の山奥に遠距離競走を試みぬその壯舉にして健足家の優にいたりては一高不忍池畔平々たる地に於ける山口高校内海沿岸坦々たる地に於けるの舉と同一視すべきにあらず況んや彼は天日好和に於てし我は秋雨空濛の日あるに於てをや

該日鷄鳴未だ晨を報ぜざるに當りて微雨をついて北條校長磯田教授及駒田森谷の二學生は之が審判として到着地鶴木白山社域に先行し茂木教官出發地(學校靜務館)にありて競走に點驗を

加へて出發刻を印せるかゝを與へ出發せしめたりきうれ用意周到あり壯なるものも勇ふるうも秋風枯木を凌いで坐るに勇士の高名を鳴らす

一等賞 出發八時 到着九時四十二分 沼田 甚次郎
 外套を右肩に上衣を左肩に風に翼を附せし如き勢もて沖を飛んで審判委員の場所を目ざして社前數百石階を物ともせず駈け來りしものはぞ當日桂冠を得たる健脚否な辰章校健脚の牛耳をとるもの

貳等賞 出發八時 到着九時四十四分 河島 重平
 ハンカチーフを口にして弓箭の如く駈け來り滿面笑をたゝえて仙客風に御する様を夢みたりあるもれりし

參等賞 出發八時二十分 到着十時八分 藤原 敏郎
 山桐もてつくれる薩摩下駄を穿ち服裝亦平居と異ならず足輕に步則をとりて平然入り來

りカードをいだしそれ審判を請ひ尙ほも歸途の競走を主張せしは誰う一驚を喫せさうん

- 四等賞 出發八時 到着九時五十三分 林 豊 丈
- 五等賞 出發八時二十分 到着十時十六分二十秒 丹治 善藏
- 六等賞 出發八時二十分 到着十時十六分二十秒 奥田 寛太郎
- 七等賞 出發八時二十分 到着十時十六分廿二秒 甘利 四郎
- 八等賞 出發八時二十分 到着十時十六分廿四秒 川 越 篤
- 九等賞 小川 恂藏

二蝶の相並んで空を擣つてこぶが如く兩子はよそに見る目も靦しきばかり相ひ並び歩調を一にして到着せしとは亦快あるりも俱に之れ出發八時二十分到着十時二十分

- 十等賞 出發九時 到着十一時三十分三秒 角尾 猛次郎
- 十一等賞 出發八時 到着十時五分 大瀬 謹一
- 十二等賞 出發八時二十分 到着十時二十五分廿秒 井上 慶治
- 十三等賞 出發八時二十分 到着十時廿六分四十七秒 白井 邦吉
- 十四等賞 出發八時 到着十時七分三十秒 柳澤 長藏

- 十五等賞 出發八時四十分 到着十時五十一分 吉村 一馬
 - 十六等賞 出發八時四十分 到着十時五十一分卅秒 安藤 淨眼
 - 十七等賞 出發八時四十分 到着十時五十二分 下村 義二郎
 - 十八等賞 出發八時四十分 到着十時五十二分 原 辰 司
 - 十九等賞 出發八時 到着十時十七分三十秒 河合 文吉
- 中途にして道に迷ひ徒らに迂路をとり來つて而のも賞を受くるを得るとはれわも亦健脚なるるかど笑半ばにカードをいだしも笑止
- 二十等賞 出發八時二十分 到着十時二十分 中目 教授
- 靴を穿ち蝙蝠を脇にして泰然澗歩し而のも當日受賞者の一に居られし先生の健脚藤原氏と各對稱せられて一坐の喝采の種となりき
- 午刻審判了りて直に會長は祠前に於て上記の健脚者に授賞典を行はれたり此に於て或は木に或は岩石に意のむかふものに踞坐して快哉行厨を終り各自意にまうして飯路に就く或は松任に途をとるもの或は野々市に迂回するもの或

は月原途に由るもれ三々伍々快談に足の疲れを覺わず晚鐘山を云々きはたる頃何れも着譯せり壯あるるな今日の擧たい惜む當日出技者校友會人數乃十が一にも足らざりしを(小津濱萩稿)

通信

左に委員の許に達したる東京大學在學の友人より通信をかゝく

東京帝國大學通信

國文學科、學校は追々眞面目に相成候、藤岡學士三時間の中一時間は國學史講義之れは狹義の國學即ち神道の義の徳川時代における状態を研究するものに御座候、他の二時間は萬葉集の講義初よりに御座候時々氣焔をはのれ候て面白き方に御座候其他黒川講師の分は最早神樂一時間に終るべく進み來申候、岡田學士の國語學は廣日

通信

本文典と皇國文法との比較(三時間)に御座候又先日より保科學士も講師となられ二年正科一年隨意科の國語學史開講(二時間)generationによりての研究にして耳新しき故面白し、上田博士は國語學は博士の明晰確乎たる口調にて一週二時間つゝけてのレクチュアは之れも耳新しくsemkritic & indo german 語系も手の内の様まで随分盛な講義に御座候併し文部省の局長舊の如くとありし故割合休みの多き方に御座候此他漢文は荀子(重野博士)莊子(根本博士)にして實に起て舞ふへくおもしるし其他隨意聽講する老子(根本博士)書經(同博士)も實に愉快極る講義に御座候正科にも書經(重野博士)あれども根本博士のに障らず語學は佛獨を撰しより其中佛は(三時間)初歩にして german course を暗記するか如くかれども進み方多し獨逸は(二時間)上田整次氏にして

„Aus dem Leben Eines

Tange nichts“ - Eichen dorff.

史學科

史學 (二時間) 年代學支那史籍考

史學研究法 (以上坪井博士)

日本歴史(織田史)(一時間) 田中先生

日本經濟史(二時間) 内田學士

支那史、兩漢三國史 市村講師

古文書 (二時間)星野博士

史學 (隨意)

磯田講師

獨逸文學科

8-9. 9-10. 10-11. 11-12.

易、二時間 老子、一時間、
尙書 一時間(以上根本博士)

東洋哲學

荀子 一時間 孟子 一時間

尙書 一時間(以上重野博士)

漢文の沿革史 重野博士

漢學 別に鹽谷講師の作文なども有之

候

右は中史部の學生には市村講師の支那史(二時間)坪井博士の年學(二時間)年代學(一時間)有之候

Mo. 〇 schiller's Litteratur geschichte.
Di. 〇 〇 〇
Mi. 〇 poetik 〇 goethe's Drama.
Do. 〇 〇 〇
Fr. Debung. 〇 goethe's Drama.
So. schiller's gedichte. 〇

右の如く獨乙語は九時間に御座候上のを説明致候

へは月曜の Schiller の詩と申すは哲學其他の級と合併にて目下氏の Gedanken Gedichte 即 Worte des Glaubens, das verschleierte Bild zu seis など講述やがてゲーテの詩に移るとの候、偕て文學史はレッスングを初め申候初め二三日は同氏の生活など暗誦に御座候ひしが今は其の Hauptwerke に移り氏の Lieder を五六讀み候此次は Litteratur Briefe 第十七十八十九をよむ事に候夫れより例の Haus burgische Dramaturgie にうつるとに候此時間は先生兎角話か横へ這入り二時間と申しても正味少な御座候而一文學書簡にうつればざるおとあからんと存居候水曜の Poetik は純粹の講義にて text book をしに候講義は余り Systematic 見え不申候先は Epos, Drama など of the art に付話られ今は其 aeusere form 即ち phymnus に付ての論に候生等は教室にて筆記されず歸校后参考書ひねくりて判らぬ

處を調へて漸くに清書する位にて時間の不經濟さばかりなし二年以上れ學生は皆即記のまゝに御座候然し此科目は先生の講義中一番興味御座候 Kern の poetik は今大に役立ち申候次に此日の goethe の Drama と S ぶは clavigo に御座候之れは易さう上に allgemein の二年と合併に御座候へは講義もはかどらず眠氣さす位に御座候金曜の in Debung と申は古今集の翻譯に候今卷十九の長歌を譯し居候之には閉口致候元來作文の素養なき上に例の vorspiel を以て充たされたる古今集のことに御座候事なれば中々手にあひ不申随分恐しき譯か出來候併一あがら先生はあらう一六ヶ敷言葉などは説明して何々と譯してしうるへしなと S ばれ吾等は之を zusammen mensetzen せむれば候れば S ぶもの no prakt fische の素養なきには吾等の概歎の外御座さく候先生は又常例とかにて新入學生に各の履歴

をか、せ申候又其日は goethe の Faust 二時間
つゝさて講義あることに候一年期にて Faust を
よむは吾等れ不幸に候講義は先生には得意と見
えて椅子よりおちんとするいくろ度に御座候進
方はぬるくして今漸 Prologim Himmel に御座候
此時間は彌次馬連と見受けられ申候土曜の
ier の Gedichte は月曜の夫れと同様に候、其外
小生は F 先生の Schiller の Ballade (一年) 及
上田先生の maquisse von. O を、居候後のは先
生の一たび御話ありし Heinrich v. Kleist の作にて
小生も先生の御話に動のされて今夏よみ候又現
時獨乙文學科の数は三年一名(佐々木)二年四名
(片山、關、宇佐美(第四高)葉山)に候新入生は
初め多かりしが漸々減り目下四名に御座候第四
出身は僕と金崎君にて他は二名は第二即仙台に
候外に専科一名(永井)有之候竜山君は病氣にて
は年は休學致し度様に申來候又科目の話に候が

獨逸語の時間は以上の通りに御座候か外に英、
佛、羅、哲學等あり哲、英、佛をいはず羅典は
今年より Beck 先生教授に候之れには随分困入
候と、と進むが上に例の先生のおせつから
に御座候へは Daclenston のいひ損ひにても致さ
んか直に御目玉頂戴致す譯に御座候此科にひの
されて France の方御留守とあるやの氣遣御座
候(勿論之れは小生等魯鈍のもの、話に御座候)
英語は Princess と Short Poem. と取交せて
の講義に候如何にも吾々は英語に力とばさ歎
御座候又先生の御話ありし小石川獨乙學院は小
生は勿論通學致す決心にて院長 Haas 氏も一度
訪問致し候しか其後會話なきは生徒多きため二
時間に一度も饒舌れる位とて行くのも考へ
ものなりと或人申し又元の先生 G. Nie 氏も京都
に轉宅し去り且小生は日本橋より通ふ身なれば
當分見合せるとに致候 Haas 氏と Phadon と講義致

るるとに御座候兎に角 Praktische Uebung は
大學にありては先づ元縁に御座候

ische Dramaturgie と Emilia Galotti をよみしのみ
にて此月曜までには是非だせといふ注文にて困

以上は入學の當時認めたまし學科の概略に御座
候失禮に候へ共御送申候間御覽被下度候尙其後
の模様を申上くれ、次の如くに御座候

却中に御座候今度は同 Lessing の Minna von
Barnhelm をよめこの事に候之をばし Natan der
Weise をみ護畢竟今年中は Lessing の大著のみ
をすさず先生の考に御座候 Poetik の講義は

Schiller の詩は十あまりも結了今は其大作 Das
Leid von der Glocke に、り候之れをばは
Kotzebue の Lustspiel "Die deutsche Kleinstädter"
講義のつづに候文學士は Laokoon を舊臘濟を
一冬季休暇中の aufgabe として二問題を科せら
れ候其一是

Sommer そのものたるを判り候勿論色々
其例などは他書よりめかれ居候 Clavigo は不
相變一頁半位に候 Faust は目下 studizimmer
の Faust と pudel herinhalten する處まで進み
候近頃外國語學校(高等學校かも知れ不申)の

「Schakespeare und Voltaire im Urtheil Lessings」
他は

英語教師の一英人と聴講に見え候未だ若人にて
如何なる身分の人にはや馬車をうりて、先生と

「Ausführliche Inhaltsangabe des vierten und fünften Aktes von Lessings's Emilia Galotti nebst kurzer Skizze des vorhergehenden」に御座候休暇
中は小生病氣の爲仕事出來ず辛うして Hamburg

外出の事もある様子に候又 Uebung の時間には
古今集長歌もつまぐなるものにてすみ今は狂言
を一つ二つ譯し候今度は竹取物語を譯す由に候
獨乙語は以上の通に御座候尙困るは佛語と拉丁

に候エツク帥には殆ど閉口仕候之か爲時間を消費され教科書以外に獨文を涉獵する暇となく不思想高等學校の泰平時代を追想致され候以上又過ぎつる日、東京帝國大學法科大學佛法科に在學中なる本校出身の徳田虎稚君より雁信あり、その端に同科に於ける佛人ルイ、プリデー、ル氏擔任の教科目を報ぶ越えなされば、諸君が參考にもと左に大要をかゝる。

La définition du droit

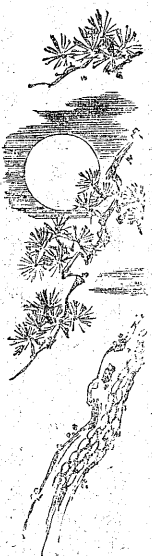
Le droit est un ensemble de règle edictées et sanctionnées par l'autorité sociale ou qui doivent l'être en vue de déterminer les prérogation des êtres humains (ou des Personnes) dans ceux de leurs rapports le coexistence qui ne sont pas purement morale.

A Droit en général.

B. Histoire sommaire des législations et géographie Juridique.

C. Théorie générale des lois.
Cours de Droit civile Français.

- I. Introduction.
- II. Règles générales.
- III. Propriété et Droit réels.
- IV. Droit des obligations.
- V. Droit de famille.
- VI. Droit de succession. (毎週三時間)



附 録

明治卅三年中本部増加書目

洋籍ノ部

第一門 哲學類

ジエームス 論 文

リポー サイコロジィ オフ アツ

ン テンション

ツ(ポー) 意思ノ疾病(フンボルト文庫)

同 人品ノ疾病(同上)

バルドウィン 心理學

ロムプロン 天才及狂氣(レクラム會社)

ジエームス 大心理學

チーヘン 生理的心理學

ロツチエ 論理及哲學概論

シジユウキク 倫理學史

附 録

アレキサンダー モーラル、オルダー、エンド、

プログレス

カント 倫理哲學

ウント 倫理學

ブルアル 佛國普通教育論

ゲリユージェイ 秘神小引

シヤスレル 審美學

第二門 社會學類

イライ 現時佛獨社會主義

グラハム 社會主義

ジヨージ 社會問題

マヨースミス 移住及來住

フエーラー 刑事的社會學

ハウスホーヘル 現時ノ社會主義

ヘルトリング 自然法ト社會制度

デモレン アンクロナキソン人ノ勢力

ジャツグラー ト 合衆國ニ於ル恐惶略史

ニボルソン	貨幣論	ボンフヒトス	國際公法授要
ブロー	貨幣ノ自然法	リビエール	商法講義
ジヨージ	進歩ト貧困	オーリユー	行正法正義
ジヤンス	トラスト論	エスマイン	憲法要論
ロイド	勞働組合論	ガロー	佛國刑法大全
ホーウエル	商業組合		一八九九年ゴタイシエル
シヨーンズ	借地料	ムールホール	統計字典
フハーレル	通貨論		一九〇〇年政治年鑑
ベルゲル	帝國實業法	アクウオース	鐵道ト商人
ウヰンドシヤイド	ローマ法教科書		第三門 歷史類
エリネツク	法律及布告	ホフマン	萬國史教科書
サルウエー	一般行政法	エーゲル	古代史
マイエル	獨乙法	ランゲ	年表
メルケル	法學通論	ボルテア	查理十二世
	瓊國民法(レクラム文庫)	フラータ	萬國史(ウヰーベル問答書第廿六)
リビエール	佛蘭西法典正文		慶長元年年間英人書翰
フレューブ	法律大本論		
ミンエール			

クロスベノー	コンテンポラリイヒストリー	ハアゲン	高等數學類聚
チンケル	ウキルヘルム皇帝時代	トバンター	微分
ジユスツスベルツス	古代史懷中用地圖	ハルトマン	計算教授法
ヒルト	歷史説明圖		第五門 理學類
レーマン	地理 上卷	ヘルムホルツ	力學原理
ジユスツスベルツス	海 圖	ポール	螺旋論
	國民圖	ヘルツ	力學
同		ワールブルヒ	實驗物理
ユール註解	マルコポロー旅行記	ロムメル	實驗物理
ルトトツレデ	現代人名辭書	ツオイネル	熱論
リツビンコツト	地名辭書	ウヰーテンエヘルト	物理實驗
ペレイフエル	支那地名辭典	ポインチング	音響學
サツケン	建築式(ウエーベル問答)	レイレイ	同
ブーテル	古代及中世武器及武裝	エウイング	磁氣感應
パトマン	不整數論	スチル	電氣動力
キルリグ	非ユークリッド体形論	フヒツシエル	藥學者用化學教科書
ベルノース	空間論	バイレー	エ、ポッケットブック、フチアー

ケミスト

蒸氣機關及瓦斯石油機關

有機化學

現今ノ農業

經度及緯度

第六門 博物學類

フランチンフハミリーエン

ブルン

植物界

同

細胞及受胎實驗理論

ラフエ子ストル及リヒテンベルク

歐洲繪畫 フロレンスノ部

動物生活

スコット

第八門 文學類

實地動物學

ゼ タリスマン

第七門 技術類

グレモナ

ペー

ハルデー

スマイルス

シアールス

ガーレット

フリス

ブラウニン

測量學

ポーン

實用平面及立体幾何學

コレリツジ

測量學

全 集

英詩引用辭典

セークスピア論等

テイトン注

レユーヘンナツケ

●乙文學入門

クロー

クライスト

全 集

ツルゲニエフ

シエークスピア

同

ジョンキーツ

エエーニング獨文評譯

レツシング ラオーコン

スラン及ヘーテス

同 第二卷

ゲーテ ヘルマル ウンド ドロテア

キツブリング

同 第六卷

シルレル マリア スチユアート

チャンパー

同 第七卷

シルレル ワーレン スタイン

丸 屋

同 第九卷

シルレル ヲルレアン處女

ネスファイルド

同 第十卷

ゲーデ エグモンド

同 第二讀本

同 第十一卷

シルレル アラウトフォンメッセンナ

コンフラー

同 第十二卷

クロツブストツク短歌

大村等

同 第十三卷

ヘルデル チツド

ブリュムメル

同 第十四卷

ゲーテグツツコカンベルリヒンゲン

同 十九世紀獨乙詩人辭典

原田隆造

獨乙小文典

グロート譯

大村等

獨乙文法科書 前篇

舌切雀

ウーランド

詩及劇

シツプロツプ譯

レナウ

全 集

カールネル 同 トツベル 七ネーテ小説

レツシング エミリア、カロツチ、シェーニンゲ 第八 アルネエール 佛文學史提要

同 ミンナフチンパルンヘンム 同 第四 バルザック イフゼニ一物語

ゲーテ トルカト、タツソ一 同 第十五 モンペール 文學要言

同 エフヒゲゴエ、チウフタウリス 同 第三 ラ、フオンテーン 小説

シルレル ウイルヘルムテル 同 第四 ラゴソ 佛文詩文集

辻 高田 獨乙詩文詳解 第一第二 アレーア ラ、モラールザンルドラマ

カレエ 第二讀本 殉教者 ボアロー 傑作集

ドーミツク 文人性行 コルチイユ 傑作集

同 現代ノ文人 セビチー 同 書翰集

同 現代戲論 ドーデー 月曜隨筆

佛國文學研鑽 同 漫筆 傑作集

十六世紀文學論 同 傑作集

十七世紀文學論 同 佛語讀本 第一

十八世紀文學論 同 佛語讀本 第二

聖戲曲 同 第二

石井信五郎 佛語動詞變化小字彙

カヂライン、オレーシヨ 同 ハイテ 獨乙小辭典

ユートロビユス卷一ヨリ卷三ニマテ 高木、保志 獨和新辭林

アグリコラ 同 同

リビー 卷五 同

オード 同

西班牙會話文典 同

和蘭會話文典 同

日本文學史 同

第九門 辭書類 第十門 雜書類

島田 和譯英字彙 一八九八ノ下ヨリ

フハンク及ラヂ子ル スタンダード大辭典 一九〇〇ノ上

フリエーゲル、タンダ 英字典 一八九八ノ下ヨリ

ル、シユミツト 獨和辭典大全 一八九九

小栗柄 獨和辭典大全 一八九九

ホフマン 文法字書 七九卷ヨリ 八二卷

フハンク及ラヂ子ル スタンダード大辭典 一八九九ノ下ヨリ

パウ 獨乙辭書 一八九九ノ上 一八九九ノ下ヨリ

チミカルニウス 七九卷

評論ノ評論 一八九九ノ下ヨリ
一九〇〇ノ上

ゼ、ブツクハイヤー十八卷十九卷

セ子ツル、ナレツダ、エキザミ子一
ヨノベールバース解

洋籍終

和漢書譯書ノ部

第一門 哲學、經書類

荀子増注

荀子箋釋

趙注孫子

認識論

四書

經筵進講錄

哲學叢書

孫子合契

支那哲學史

論語集解義疏

村上專精

元良勇次郎

中澤道二閣

清原元業

中島力造

稻垣萬次郎

山口小太郎譯

婿崎正治

石田勘平

平田篤胤

森林太郎

太田元貞

活用 因明學全書

倫理學

繪本實語教

和論語

輓近ノ倫理學書

教育ノ大本

エミール抄

上世印度宗教史

都鄙問答

出定笑語和解

審美新說

仁說三書

第二門 社會書類

稻垣萬次郎

蒲生秀實

藤原以文等

小中村清矩

東方策

職官志

儀式

官制沿革略史

持地六三郎

田尻稻次郎

小林丑三郎

夏秋龜一

末岡精一

松室致

入江良之

内川義章

山口弘一

志田鈿太郎

清浦圭吾

交詢社編

横山正脩

内閣統計局

同

經濟通論

經濟史眼

單稅經濟學

純正經濟學

最新經濟論

比較國法學

改正 刑事訴訟法論

國際私法要論

法規大全追録

國際私法

日本商法論會社篇

獨乙商法論

明治法制史

國民要鑑

非鐵道國有論 (早稻田小篇)

日本帝國統計摘要

第十八統計年鑑 (卅二年)

第三門 歷史類

齊藤馨

低落爾

學校製

中園公賢

林 恕

川田剛

西村貞一

河野通之

坂崎斌

栗田寬

荻野由之

箕作元八

趙 翼

綏韓章

讀史贅議 逸篇共

萬國史

國朝先生事略

歷史圖 ナボレガン、エリサベス、
アンゼロ、ラファエル

園太曆 寫本

日本王代一覽

藤樹先生年譜

最近支那史

校訂 太平記 (續帝國文庫)

陸奥宗光

新撰姓氏錄

日本歷史要解

西洋史綱要解 卷上

二十二史劄記

二十二史記事提要

平家物語

蘭田宗惠

聖德太子

山名留三郎点

資治通鑑

山科道安

槐記

定史籍集覽

愚管抄

神明鏡

神皇正統錄

宇多天皇實錄

續世續

月のゆくへ

池の藻屑

櫻雲記

南方紀傳

菊地傳記

浪合記

信濃宮傳

十津川記

冊

底倉記

應仁前記

應仁廣記

應仁後記

續應仁後記

第四冊 大草公弼

南山巡狩記

北條九代記

鎌倉大草紙

鎌倉九代後記

關八洲古戰錄

北條五代記

和歌圖幅地形圖

肥前風土記

大和志 日本輿地通志

山城志 同

河内志 同

和泉志 同

第五冊

三浦淨心

地質調査所

並河永

同

同

同

同

同

同

同

同

歷史地理
研究會

黒川道祐

松原一記

三田淨久

秋里籬島

釋了貞

鎌田榮吉

久保得二

僧元政

富田景周

平出鏗二郎

大道寺友山

重田定一

敷田年治

栗原信光

攝津志 同

古戰場 續共

雍州府志

能登國圖

河内名所記

木曾路名所圖繪

廿四叢順拜圖繪

歐米漫遊雜記

七寸鞋

身延道之記

燕臺風雅

東京風俗志 上卷

岩淵夜話 寫本

井上玄桐筆記寫本

國史辭典

中臣宮處氏本系帳考證

應仁武鑑

大關増業

日本書紀

柳澤越後黒田
加賀伊予 騷動實記

本居宣長

伴信友

經濟雜誌社

大日本人名字書

同 第四版

同 第四版

杉山文梧
杉山俊之助 國史通釋

小野清 大坂城志 帙入

角田簡 近世叢話 正續

小中村清矩 國史學之棊

第四門 數學類

ト、ハンター著
長澤龜之助譯 論理方程式

市東佐四郎 論理方程式例題解式

長澤龜之助 中等
教科 算術教科書

上野 湖
佐久間又太郎 初等代數學

菊地大麓 幾何學小教科書(平面部)

菊地大麓 初等幾何學教科書(立体部)

遠藤利貞

大日本數學史

本校製

博物圖

第五門 理學類

第七門 技術類

ラムゼイ著
櫻井鏡二譯

化學理論之實驗明

石橋絢彦

欽橋圖譜 第一集

大幸勇吉

近世化學教科書

野澤房敬

木橋圖譜 第二集

龜高德平譯

オストワルド氏分拆化學原理

岡田竹五郎

橋梁論

第六門 博物學類

石橋絢彦

欽材講造設計例

地質調査所

大日本大和國土性圖(説明書共)

田邊朔郎

水力

同

志布志圖幅

(同)

高田元吉郎

和英米
佛對譯 欽道用語類集

同

酒田圖幅

(同)

山村征吉

圖學教科書 解說一、二、三、
國式一、二、三、

農商務省
鑛山局

日本鑛產地

齊藤謙

支那畫家人名字書

地質調査所

彌彦圖幅

堀直橋

扶桑名畫傳 (史料大觀)

同

萬分一大日本帝國地質圖

東陽堂

繪畫叢志 卅二年分全

三好學

植物學講義

同

風俗畫報 同

松村任三

植物採取便覽

同

國華同

箕作佳吉

植物學雜誌

藤井乙男

第八門 文學類

市村塘

通動物新論

久留間壇三

操觚便覽

近世動物學教科書

俗

標 土佐日記

注

高橋富兄編

伊勢物語 寫本

荒木田守武

世中百首

小中村清矩
中村秋香

梅のかをり
改正 日用文鑑
增訂

稻垣太平

玉鉾百首解

岡吉胤

假名遣提要

細川幽齋

詠歌大概抄

和田英松
佐藤球

榮花物語詳解

順德天皇

八雲御抄

橘守部

稜威言別

萩原宗固

志野の葉艸

第一高等學校
國文科編纂

改正 高等國文

肖 柏

春の夢艸
芭蕉翁俳諧全集

保科孝一

國語學小史

榎本其角

便船集

佐々政一

うつら衣評釋

類柑子

類柑子

關根正直

更科日記略解

同 第六篇

續日本歌學會書四、五編 香川景樹翁全集

鈴木暢幸

文學小論

同 第七、八篇

小澤芦庵翁全集

岡田正美

新式日本文典 上卷

同 第九篇

近世名家々集

佐々政一

連俳小史

同 第十篇

近世長歌今様歌集

本居宣長

出雲國造神壽後釋

同 第十一篇

桂園門下歌集

源稻彥

紫文製錦

同 第十一篇

明治名家々集

清水宣昭

天和物語

和四萬吉
永井一孝

國文學小史

紫式日部記注釋

加茂真淵

萬葉新探百首解

萬葉新探百首解

横井也有

うつふ衣

橘守部

助辭本義一覽

芭蕉翁文集

僧義門

玉の緒線分

終焉記

僧妙玄

山口菜

俳諧寂菜

黒澤翁滿

言靈のしるべ 上、中、篇
指出のいそいその 洲崎

松尾芭蕉

芭蕉翁七書

僧義門

日本文典大綱

白馬奥儀解

岡倉由三郎

作文教授法

俳諧枝葉集

上田萬年

風來山人傑作集 (帝國文庫)

俳諧をたゞき綱目大成

平賀源内

南總里見八犬傳

俳諧てには抄

瀧澤馬琴

國文學史十講

俳諧饒舌録

芳賀彌一

狭衣 寫本

渡邊嵩松

俳諧發句三傑集

大三貳位

清小納言

山本明清

古今和歌六帖標注

岡澤鉦次郎

初 日本文典 前編

城戸千楯

和歌布留の山ふみ

端隆

葛原詩話

荒木田久老

日本紀歌の解榧の落葉

顧祿

清嘉録

平田篤胤

古史本辭經

關義臣編

經史論存

淺香山井

徒然草諸抄大成

僧空海

性靈集

木村温

觀旭軒遺稿

伊藤東涯

刊謬正俗

石川鴻齊

纂評箋注蒙求講本

東花坊

和漢百花賦

宇津宮由的

蒙求詳説

第九門

辭書類

安藤太郎

文章軌範纂評

林 聖臣

日本新辭林

古城貞吉

支那文學史

棚橋一郎

俚言集覽

福島淳吉

蘇長公論策

村田了阿岩

和漢合類大節用集

上野萬年

靜齊遺稿

井上 近藤増補

類語品彙

金澤庄三郎譯

言語學

橋守部

日臺小字典

宮田修

通俗言語學

臺灣總督府
民政局學務課

政正月令博物筌

保科孝一譯

言語發達論

第十門

古事類苑 姓名部

保科孝一

定 神代文學考 寫本

雜書類

間宮永好

言語學大意

竹内武

軍事 幹部必携
教育 各個教練

島本北洲

和歌年中行事

各個教練

基本戰術摘要講義

三宅橋園

夢路の記

步兵教育方案

同増補

松本愚山

譯文須知

野外要務令

河北景楨

助辭鶴

工業雜誌 百五十一號ヨリ
百六十二號マテ

天地人 卅二年 一月ヨリ
六月マテ

東京人類學雜誌 百廿七號ヨリ
百五十三號マテ

東京經濟雜誌 第十四卷

哲學雜誌 百四十三號ヨリ
百五十二號マテ

教育公報 二百十九號ヨリ
二百三十號マテ

軍事新報 第二卷

東洋學藝雜誌 第十六卷

動物學雜誌 第十一卷

史學雜誌 第十編

外交時報 十一號ヨリ
十二號マテ

法學協會雜誌 第十七卷

地學雜誌 第十一卷

昆虫世界 第三卷五號ヨリ
第四卷五號マテ

通高彙纂 百四十七號ヨリ
百五十五號マテ

國書解題

扁額規範

中根肅治

松本君平

澤旭山

文部省

張之洞

關野正直

伊藤長胤

佐村八郎

細川潤次郎

井上頼國

黒川春村

本居宣長

入江昌喜

山崎美成

伴蒿溪

同

新見正朝

慶長小説家著述目錄
以來

新開學

華陽皮相

圖書館管理法

書目答問

宮殿調度圖解

釋親考

漢書解題集成

かゝしくさ

己亥叢書

墨水遺稿

王勝間

久保之取蛇尾

文教温故

閑田耕筆

閑田次筆

八十翁書かたり

焦 竝

松平定信

欽定古今圖書集成

蕉氏筆乘

花月草紙

故實叢書

裝束集成

輿車圖考

冠帽圖繪

安齊陰筆

同 安齊雜考

一條兼良 御代初抄
有職細中抄

伊勢貞丈 軍用記

同 鏡着用次第

新井君美 本朝軍器考

谷村光義 建武年中行事略解

和、漢、譯書、終



謹告

去月上旬に發刊すべかりし本誌は、印刷人の繁忙に妨げられ、吾人の豫想と諸君の意志に背きたり、吾人は深く將來を警めて此失態を再びせざらんを期す、追て次號の原稿一切を本月廿日に延期し、大に諸君の投稿をまつ

四月

雜誌部委員

會員諸君

投書心得

- 一 投書は本會原稿用紙に限り御認めありたり
- 一 長文と雖も全文を寄贈せざれば掲載せむ
- 一 雜誌上には雅號のみを記載することを許せども姓名は必ず編輯委員まで御報道あるべし
- 一 學理上の論說諸小會の記事雅文詩歌等續々寄投ありたり勿論言、或は政治を論じ或は徳義に背くものは一切掲載致さざるべし

明治三十四年四月一日印刷
明治三十四年四月三日發行

編輯兼發行者

吉村政行

印刷者

沼倍男

印刷所

商法施行
前設立

活版合資會社

發行所

第四高等學校校友會

石川縣金澤市早通町五十六番地

同縣同市火水町二番丁二十九番地

同縣同市高岡町三十四番地

